

第87図 S A-34 遺構実測図 アミ目は硬化面

S A-32 (第80図)

31・33号住居の中間に位置し、東西2.24～2.36m・南北2.3～2.4mの隅円方形を呈する。覆土は8～10cm程の厚さで、土層的に10cm程の削失と推定される。主柱穴と炉は確認されないが、6～8cmの貼り床がある。覆土から、土師器片8点が出土したが、1点のみ(808)図化できた。

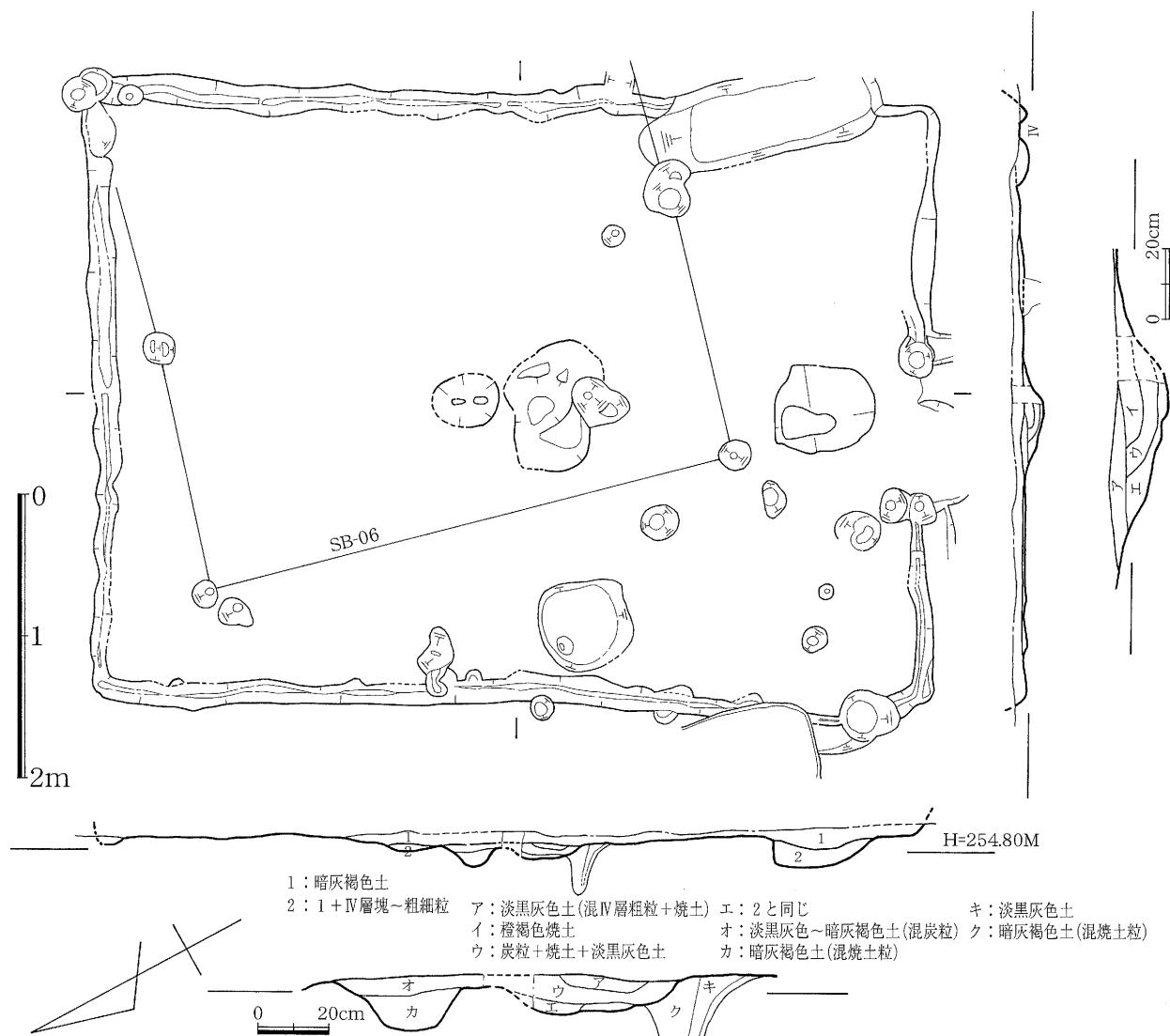
S A-33 (第81図)

北西～西側を近現代の土坑(S K-442)に切られているが、東西4.2～4.3m南北3.6～3.8mの隅円長方形を呈する。覆土は22～24cm遺存するが、土層的には10cm程の削失が推定される。貼り床は、4～22cmの厚さが施される。主柱穴は2本で、直径19～29cm・深さ32・42cmを測る。明確な炉は無い。

覆土から、土師器片198点が、2層から10点が出土している。4世紀後半～5世紀前半か。

S A-34 (第87図)

IX区の北東部に位置した、東西4.75～4.83m、南北4.0～4.6mの長方形住居で、北西隅と北東隅



第88図 S A -35 遺構実測図

は丸くなる。北辺は胴張りで、東～南の壁溝は判然としない。覆土は8～14cm遺存し、土層的には10cm程の削失が推定される。主柱穴は2本で、直径31～35cm・深さ31cmと61cmを測る。東の柱穴は、攪乱坑の底面における変色硬化面と若干の凹凸によって位置が明瞭であった。中央には、甕の口縁部を打ち欠いた（828）土器埋設炉があり、北接・南接する前段階の掘り込み炉も検出された。南北断面から想定すると、南の掘り込み炉→貼り床・北の掘り込み炉→土器埋設炉という構築変遷が看取される。

覆土から、土師器片185点、須恵器1点、鉄器2点（刀子ほか）のほか、土器片加工双孔円盤、砥石片、台石が出土、2層から土師器片2点が出土している。6世紀前半か。

S A -35（第88図）

34号住居の北東に隣接する、長さ5.93～6.04m・幅4.22～4.42mの長方形を呈し、南壁中央部の壁溝が途切ることから、出入口の可能性がある。覆土は4～8cmしか遺存していないが、削失も10cm程度と推定され、構築当初から浅い住居であったようだ。中央には、長さ92cm・幅52～73cm・深さ12～17cmの不整形な掘り込み炉があり、その北側にも長径49cm・短径37cm・深さ16cmの橢円形

掘り込み炉がある。

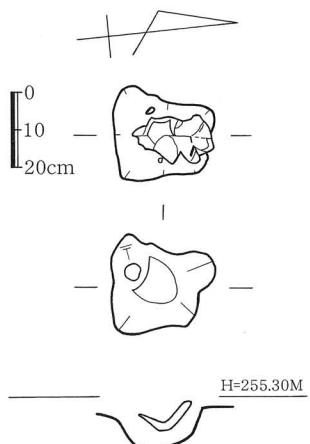
新旧は不明である。

主柱穴は不明瞭である。覆土から、免田式土器(842)のほか、土師器片29点、須恵器片1点等が出土している。6世紀後半か。

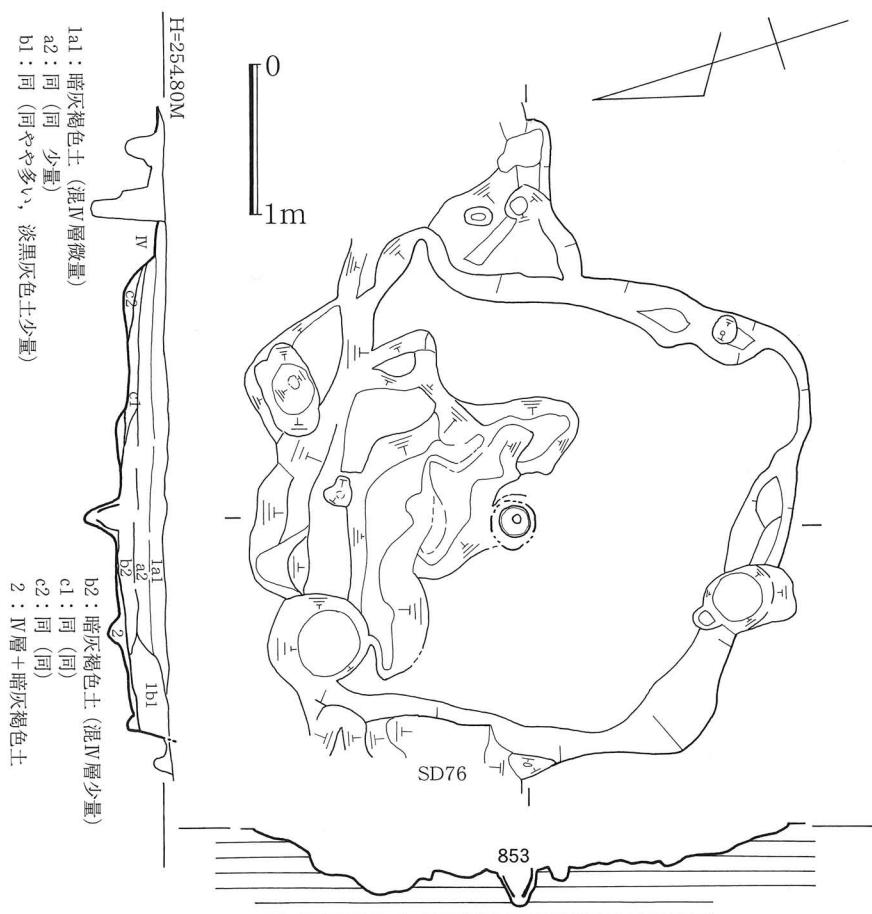
S A-36 (第89図)

IX区北縁中央部に位置し、近現代の76号溝に北半分を搅乱された、1辺2.8~3.1m程の隅円方形を呈する。北東隅には、幅1m前後・奥行き0.6m前後の出

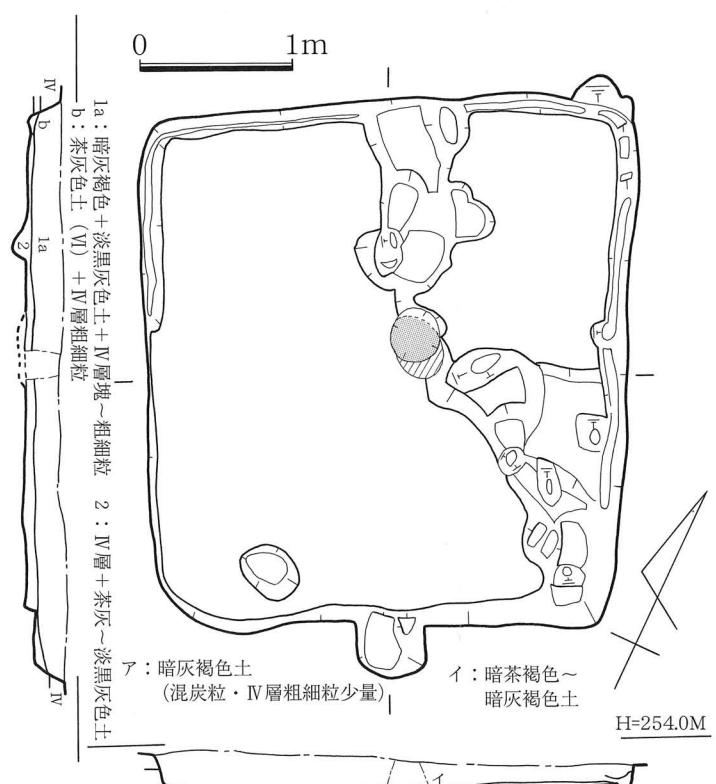
入口的な半円形の張り出しがある。覆土は30cm遺存し、土層的には10cm程の削失が推定される。貼り床は、凹凸が無くなる程度に数cm施されている。主柱穴は検出されず、中央には、列点文のある甕の口縁部と底部を打ち欠いた



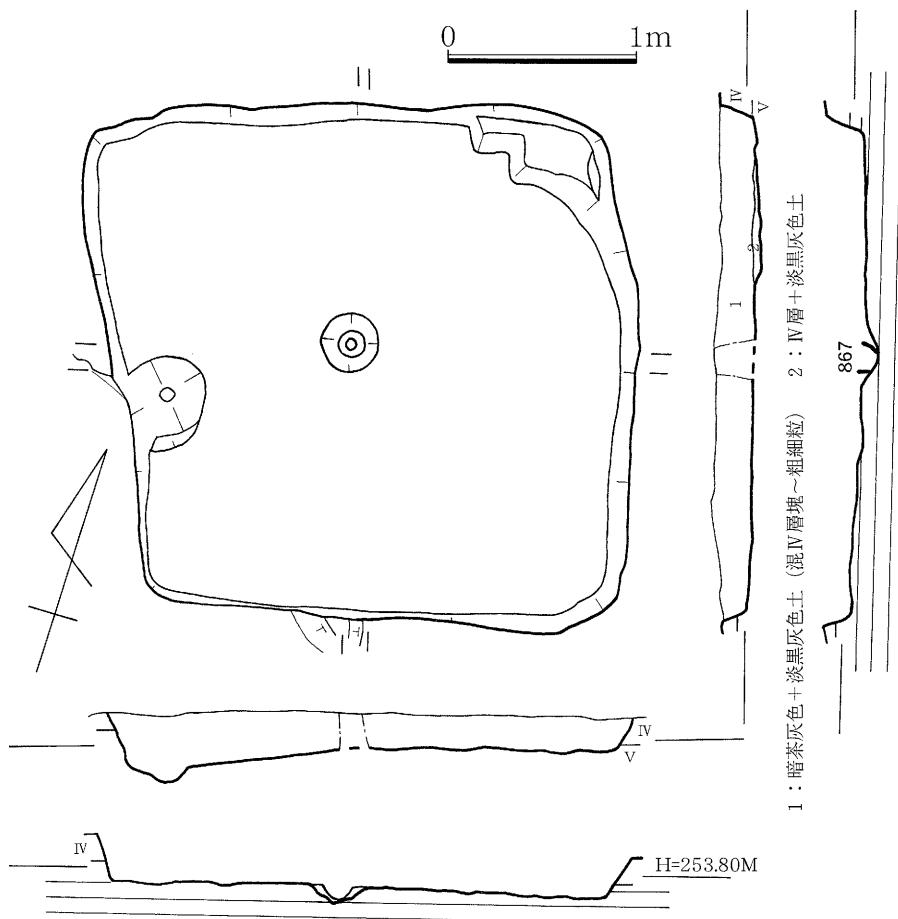
第90図 S A-37 遺構実測図



第89図 S A-36 遺構実測図



第91図 S A-38 遺構実測図 アミ目は焼土



第92図 SA-39 遺構実測図

とから、竪穴住居であった可能性が高いと判断している。6世紀後半か。

SA-38 (第91図)

VII区の南東部に位置し、長さ3.35～3.52m・幅3.0～3.3mの隅円方形を呈する。南辺には壁溝が無くその中央には幅45cm・奥行き34cmの突出部があり、底面に貼り床が認められたため出入口と推定できる。覆土は20cm程の厚さで、土層的には20～30cm程の削失が推定される。主柱穴は不明であり、中央には焼土と炭片混じりの掘り込み炉を検出した。貼り床は、1～8cm施されている。

覆土から、土師器片33点のほか、鉄鏃片(864)と砥石が出土している。5世紀代か。

SA-39 (第92図)

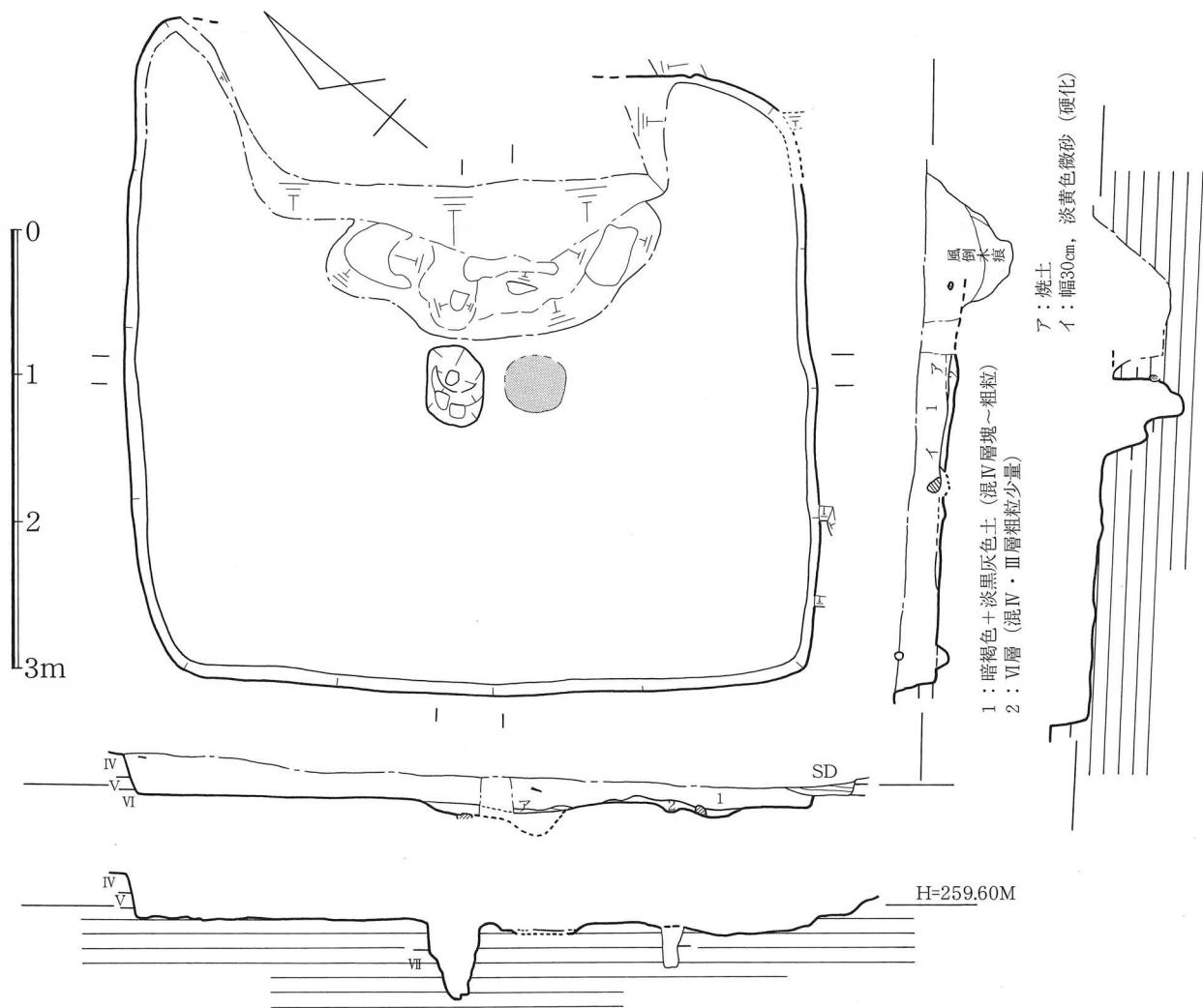
38号住居の3.1m南に位置した、南北3.2～3.58m・東西3.18～3.45mの、西辺が短い隅円方形を呈する。南の隅は、"天地返し"による搅乱で削平されている。覆土は24～38cm遺存し、土層的には20cm程の削失が推定される。北隅は、底面よりも6～7cm高い掘り残しがある。貼り床は北側に僅かにみられ、中央には、壺か鉢型土器の上半を打ち欠いた(867)土器埋設炉が設置され、西辺中央付近には、直径60cm・深さ16cmの土坑がある。

覆土から、土師器片113点などが出土地しているが、小片が多い。丹塗り土器の皿型土器(870)の内面には、雑ながら十文字状の意図的な丹塗りがある。5世紀後半か。

(853) 土器埋設炉がある。覆土から、土師器片122点が、2層から17点が出土したが、図化できたのは少ない。5世紀前半か。

SA-37 (第90図)

IX区北西部で検出した、土器埋設炉である。付近は造成による削失が著しく、炉底11cmと、埋設炉転用甕の底部が遺存していた。土器外縁～下部において、少量の焼土と隅粒を確認し、西南部の調査区壁内Ⅱ層から土師器片10数点も採取しているこ

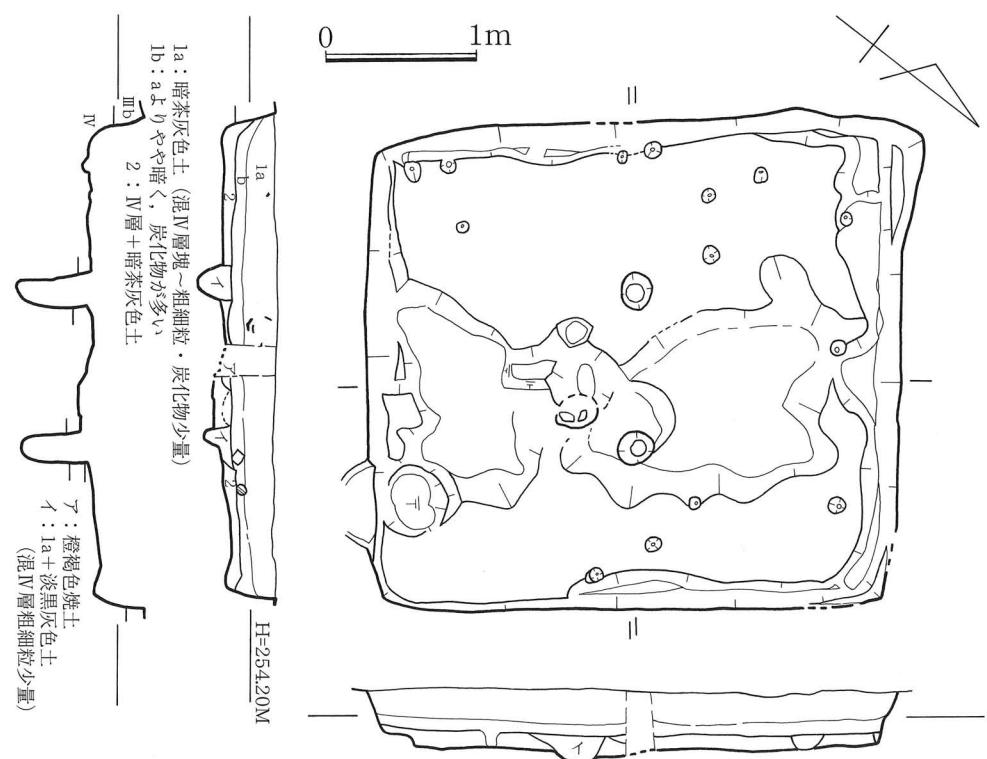


第93図 SA-40 遺構実測図 アミ目は焼土

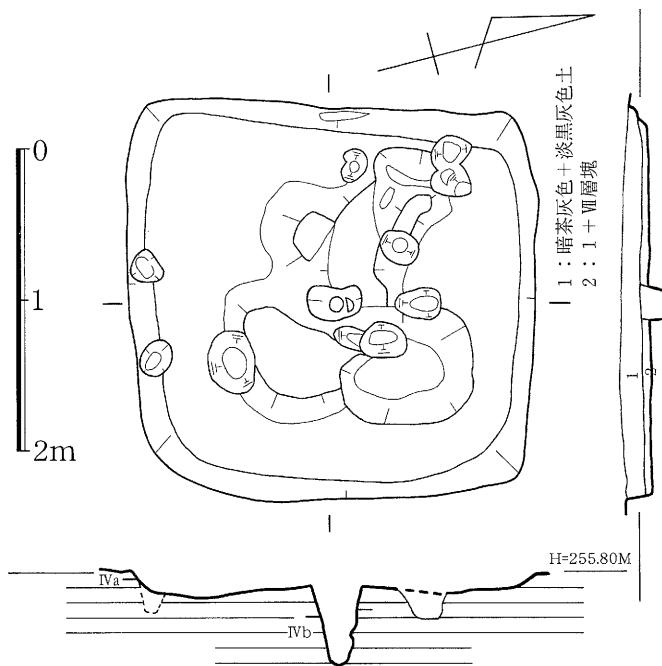
SA-40 (第93
図)

IX区の南東部に位置した、1辺3.9~4.4mの隅円方形を呈する住居であるが、南東辺が短いために、台形に近い。北東部は埋没後の風倒木によって破壊されている。覆土は

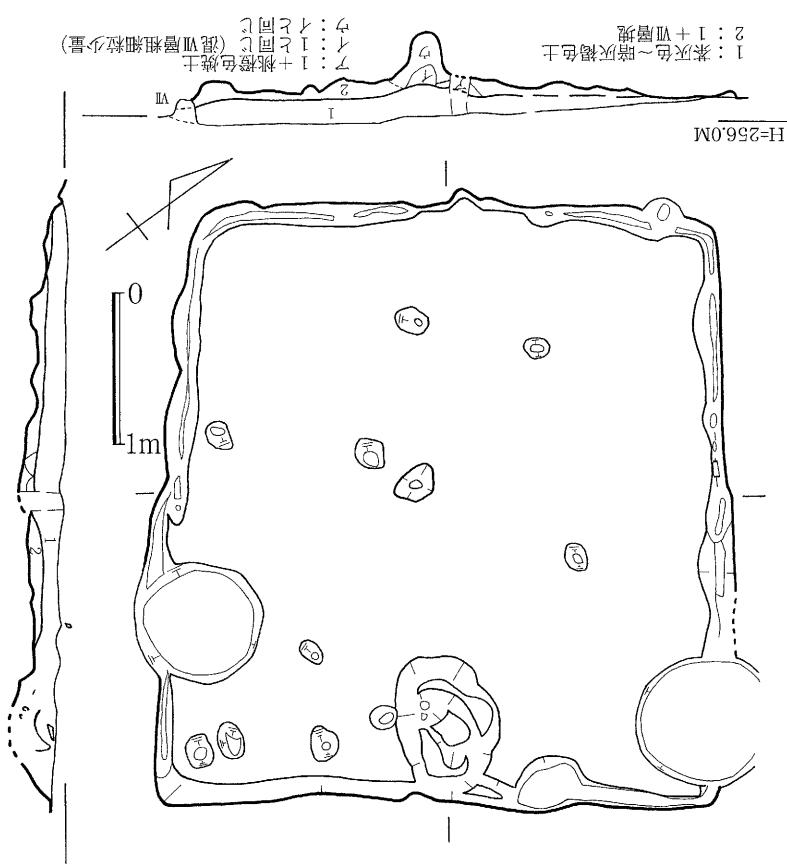
16~27cmの厚さ



第94図 SA-41 遺構実測図



第95図 S A-42 遺構実測図



第96図 S A-43 遺構実測図

深さ20cmの小pitが3個並列し、南西壁溝の肩部にも4個検出された。これらは住居の屋根構築に係る支柱の痕跡と思われる。

覆土から、土師器片112点のほか、直方体河原石が15個程溝壁内に纏まって出土している。4世紀代か。

が遺存するが、土層的には20cm程の削失が推定される。貼り床は東部のみに施され、炉の南西部には淡黄色微砂を貼り付けた硬化面があった。主柱穴は不明であるが、中央やや南西寄りに深さ53cmのpitがある。焼土が充填した掘り込み炉は長径70cm・短径60cm・深さ8cmを測る。南西壁と0.7m隔てて03号地下式横穴墓が、北西壁と1.1m隔てて02号地下式横穴墓があり、位置的に、当住居の乳幼児が軒先部に埋葬されたと推定される。

覆土から、土師器片310点のほか鐵器3点(884~886)などのほか、ツブラジイを主とする炭化堅果類が20点以上出土している。5世紀前半か。

S A-41 (第94図)

X区で検出した、長さ3.34~3.56m・幅3.04~3.23mの長方形を呈する住居で、覆土は厚さ30cmを測る。南西辺中部~東隅部には壁溝がない。主柱穴は、貼り床後に掘り込まれた直径20~24cm・深さ44cmの2本であるが、その南東側で、直径20~27cm・深さ22~7cmの小pitが2層下で検出され、構築初期の2本柱と思われる。北西壁の40cm内側には、直径10cm内外、



第97図 SA-44 遺構実測図

SA-42 (第95図)

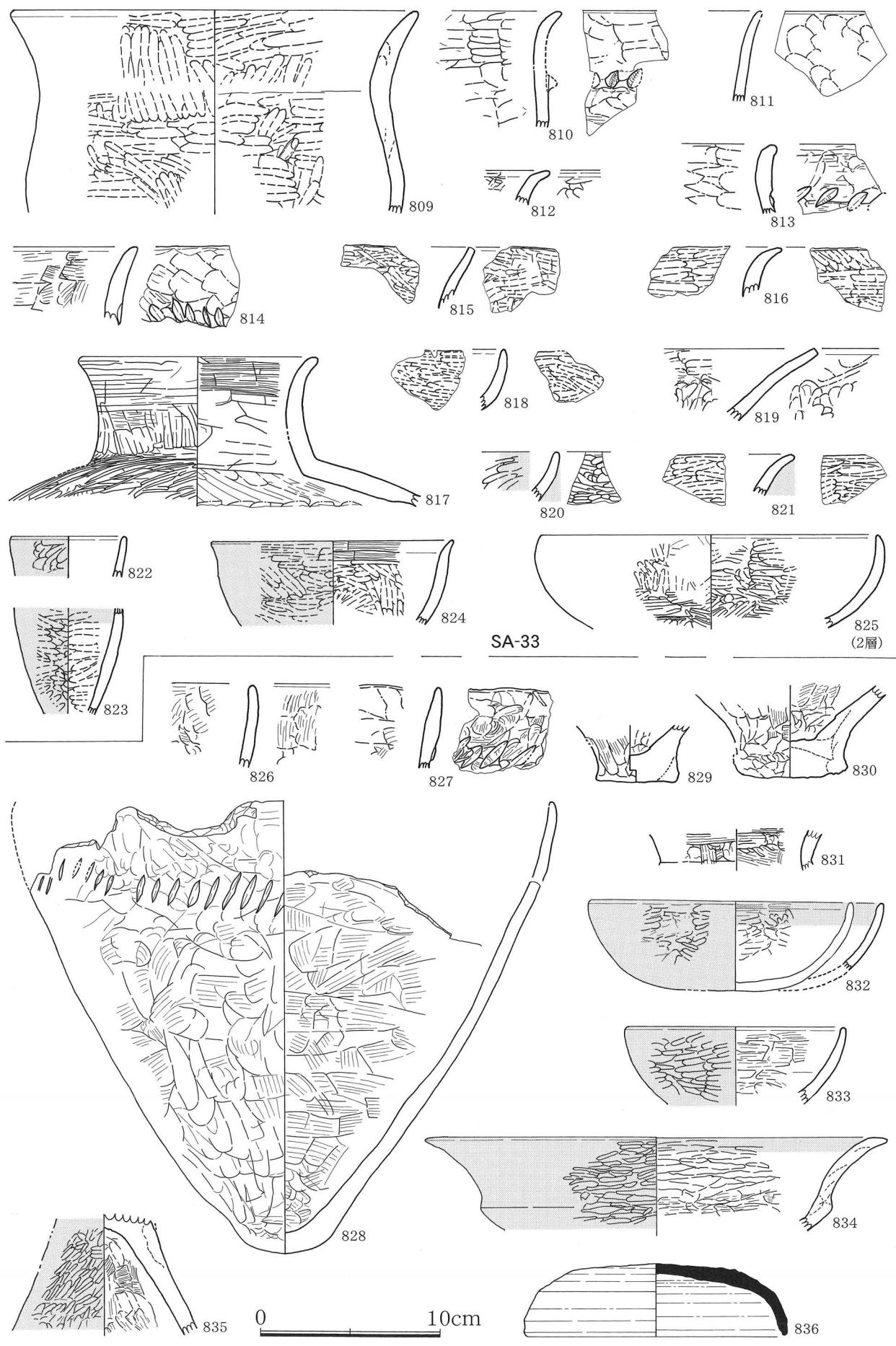
VIII区の東中央部に位置した、南東隅が丸い1辺2.4~2.5mの方形を呈する住居で、覆土は10~12cmの厚さである。2層は5~6cmの厚さで、中央にはその上面から掘り込む長径36cm・短径21cmのpitがある。攪乱が多くて主柱穴も不明瞭であるが、南壁中央にある直径20~24cm・深さ15~16cmのpit 2基は、出入口の柱と推定される。

覆土から、土師器片40点が出土したが、図化できたのは1点(896)のみである。3~4世紀代か。

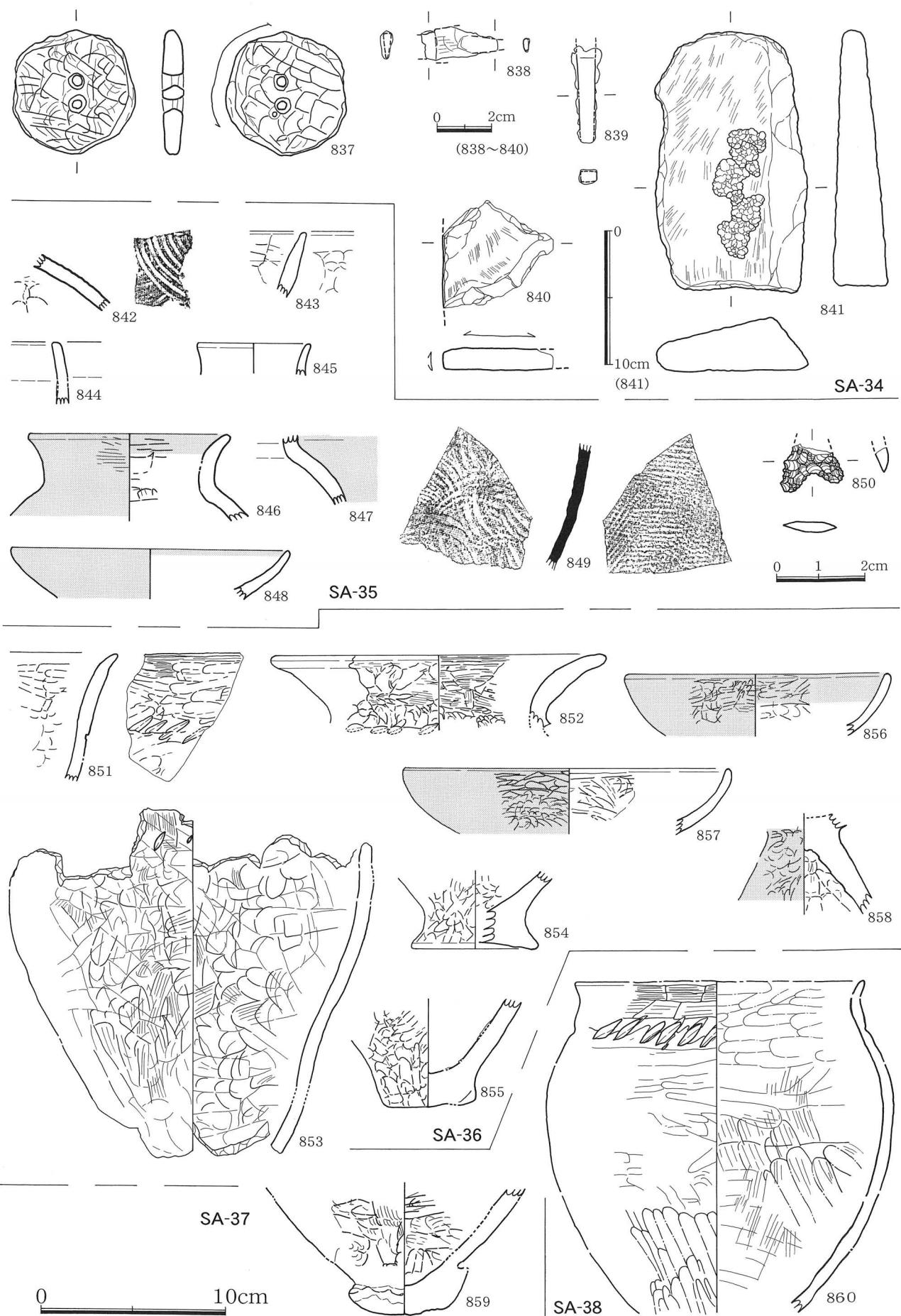
SA-43 (第96図)

42号住居の北5mに位置した、長さ3.9~3.97m・幅3.45~3.7mの長方形を呈する住居である。覆土は10~20cm遺存するが、土層的には40cm程の削失が推定される。2層は4~12cmの厚さがある。壁溝の無い南東壁の中央部には、長径92cm・短径65cm・深さ12cmの土坑がある。主柱穴は不明で、中央部の2層上面においては、直径33cm・深さ8cmの掘り込み炉を確認した。

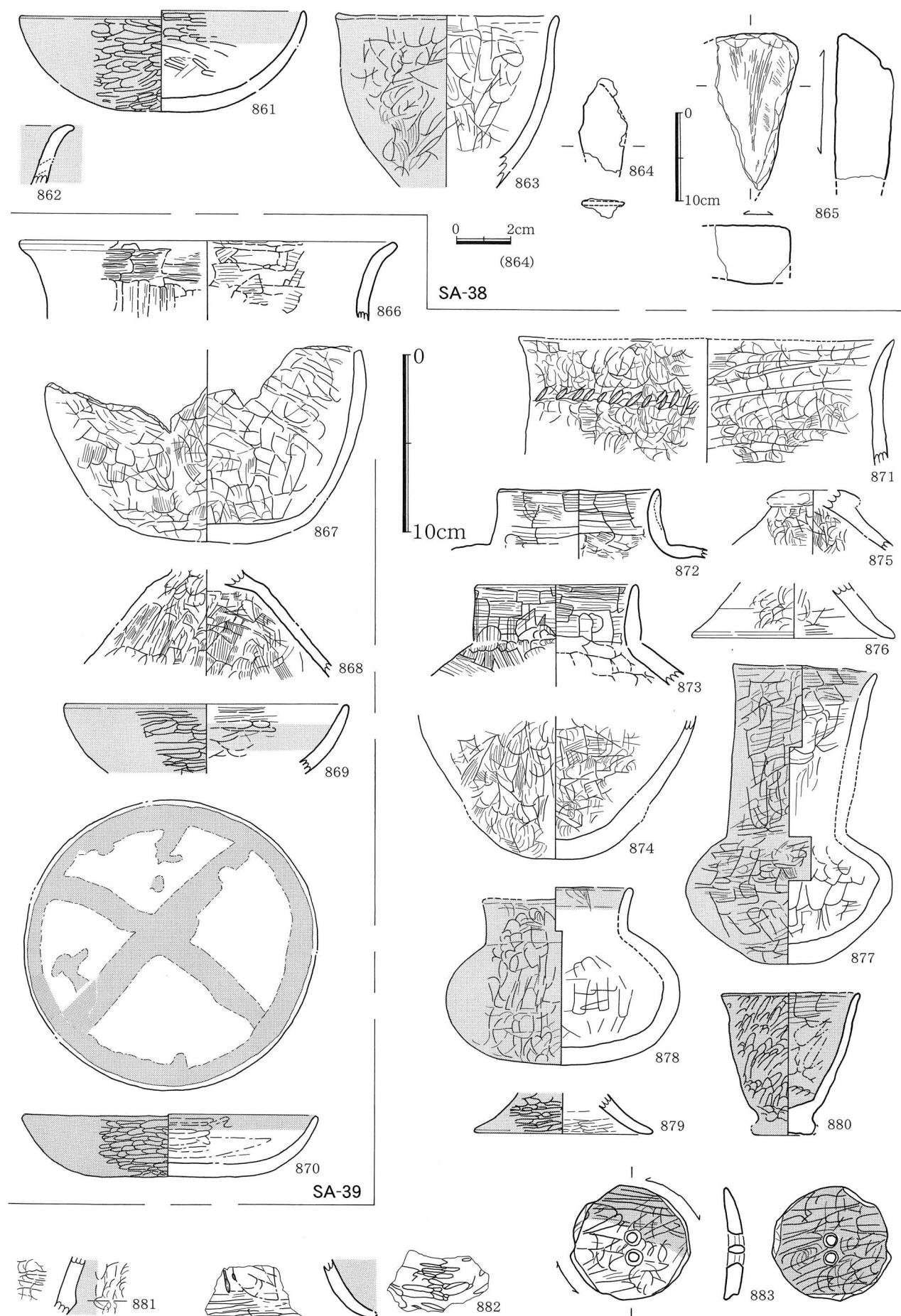
覆土から、土師器片243点のほか、須恵器片1点、砥石1点などが出土している。遺物は南西部



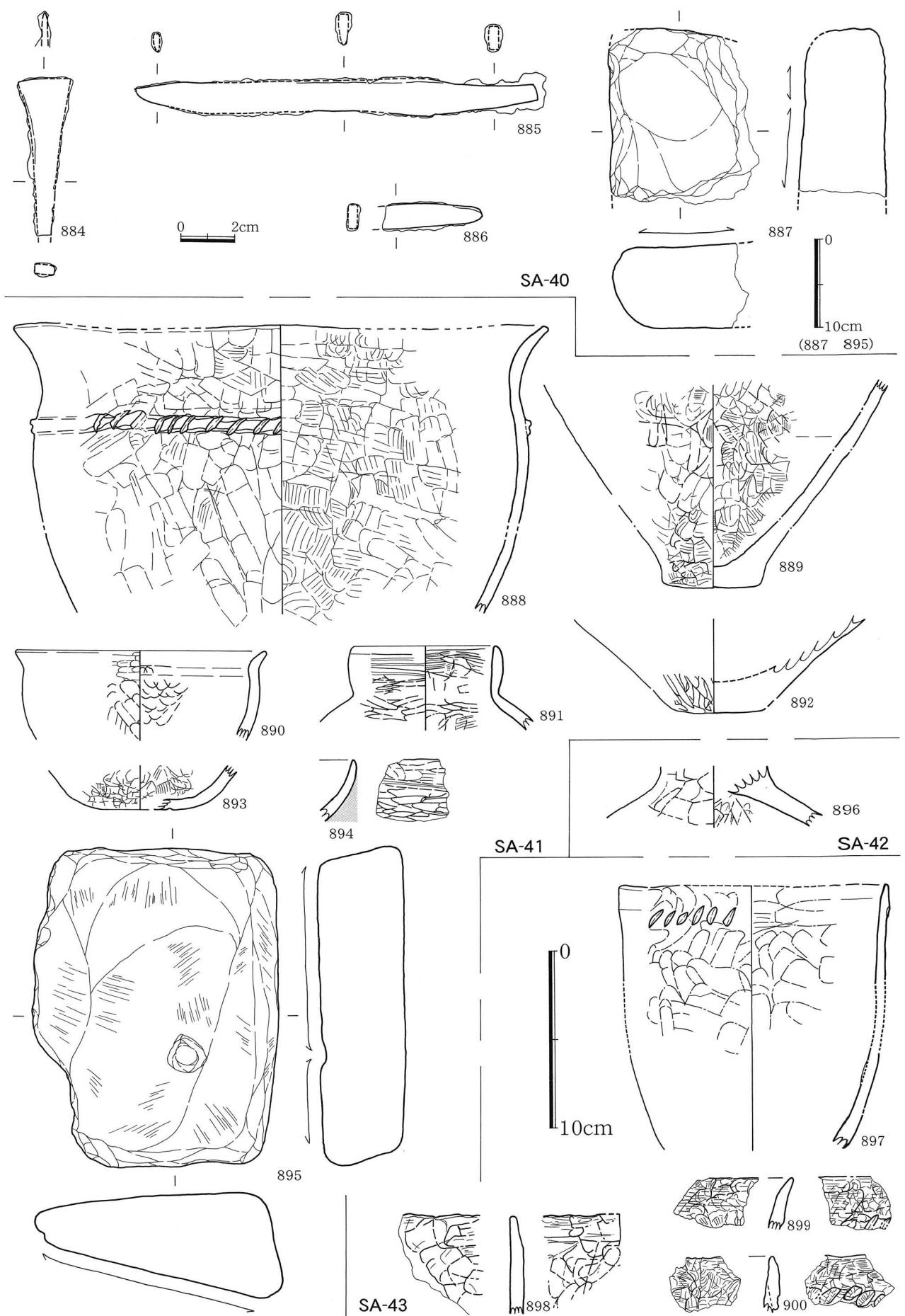
第98図 SA-33・34 出土遺物実測図(1)



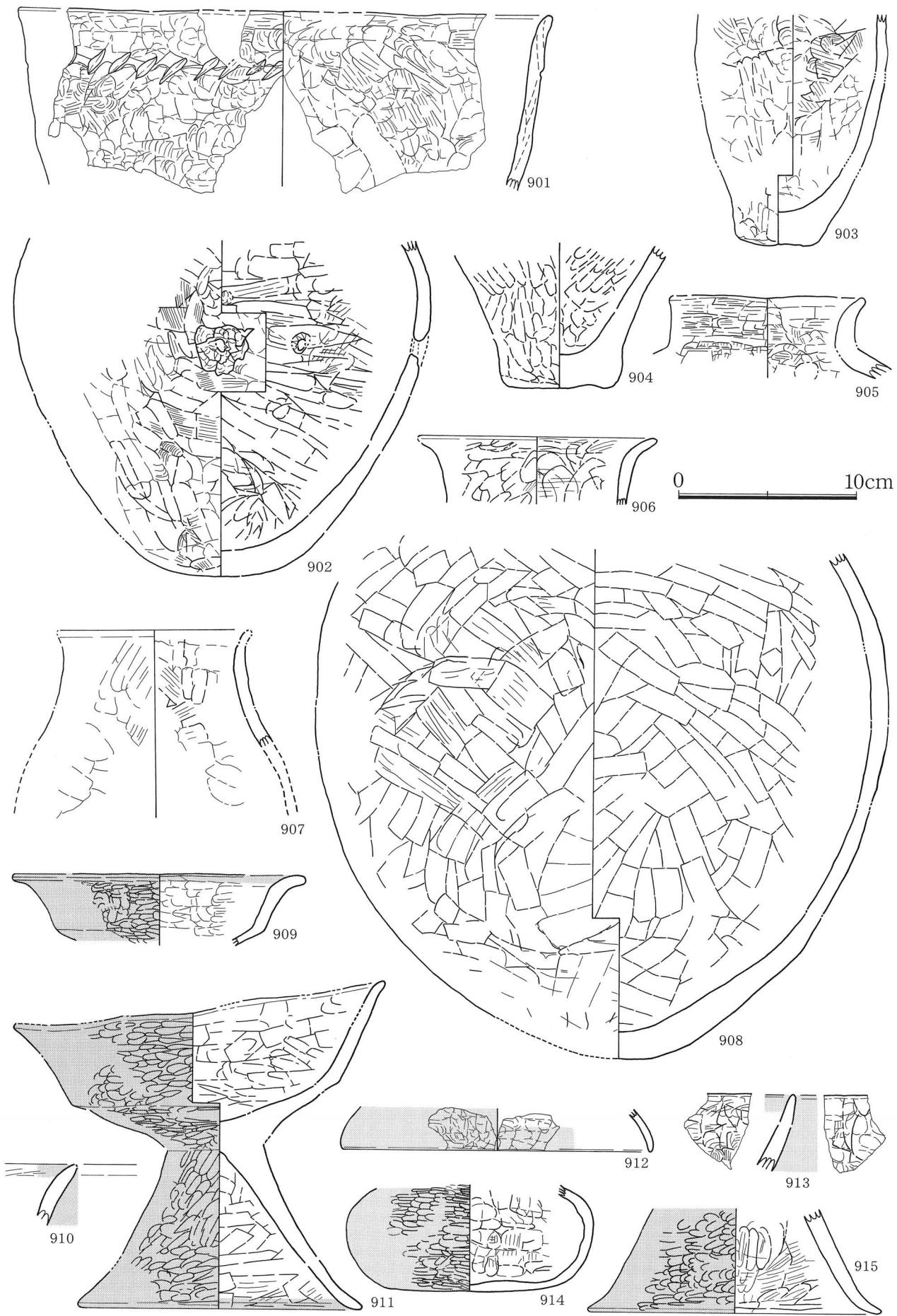
第99図 SA-34出土遺物実測図, SA-35~38出土遺物実測図(1)



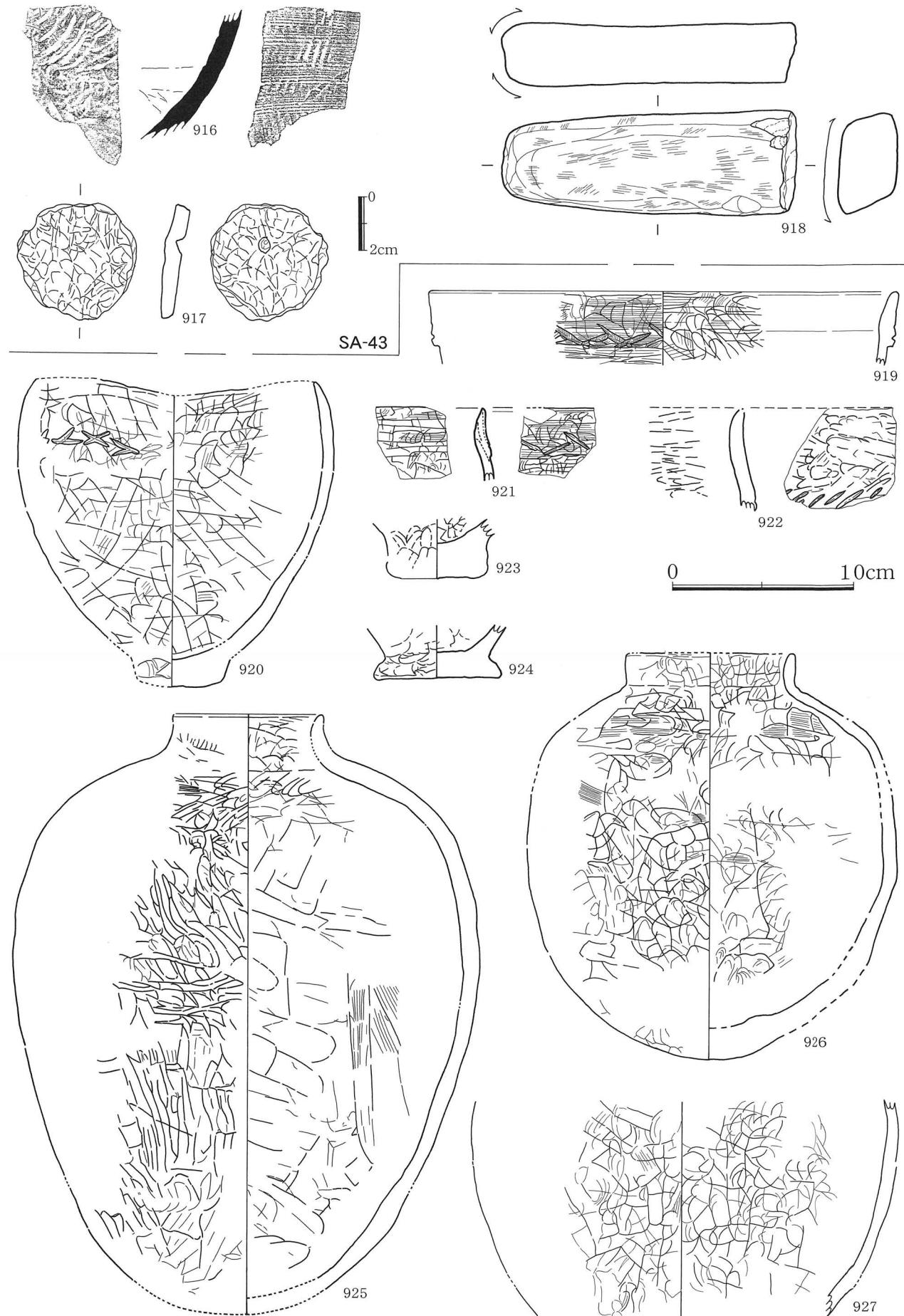
第100図 SA-38出土遺物実測図(2), SA-39・40出土遺物実測図(1)



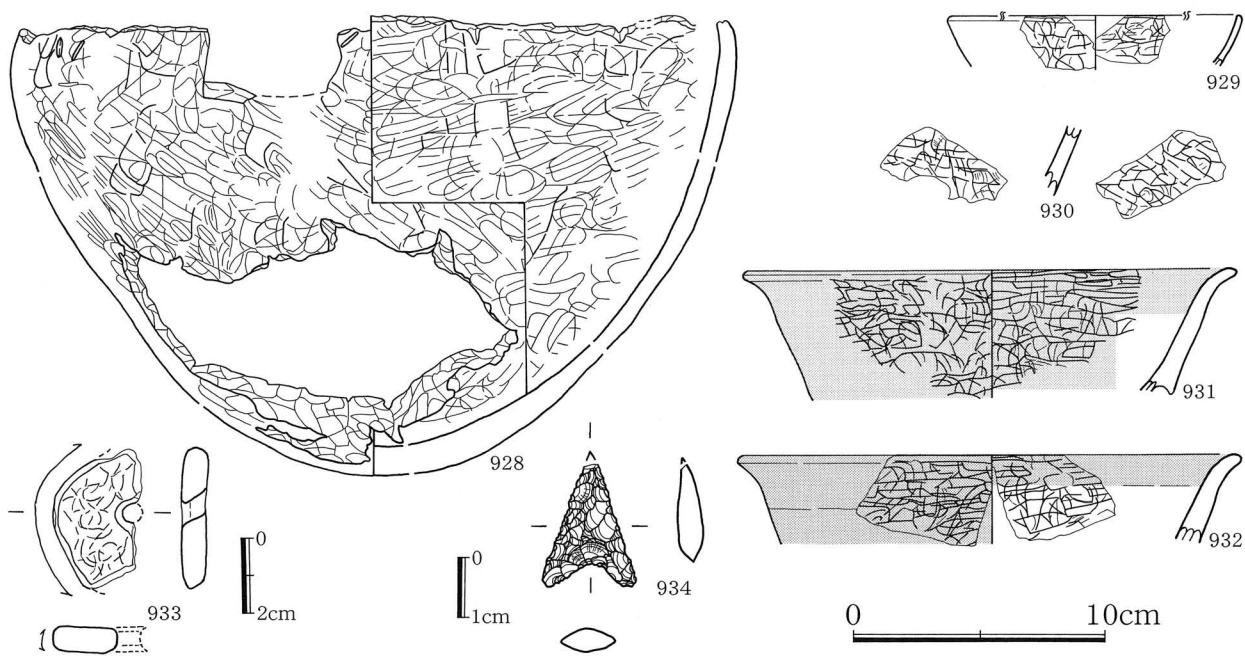
第101図 SA-40出土遺物実測図(2), SA-41~43出土遺物実測図(1)



第102図 S A -43出土遺物実測図(2)



第103図 SA-43出土遺物実測図(3), SA-44出土遺物実測図(1)



第104図 S A-44出土遺物実測図(2)

と東端中央土坑に集中して出土し、後者では908や911の大型の土器等が出土した。須恵器の甕片(916)は、44号住居出土片と接合している。914の内面には黒色の付着物があり(図版-230)、口縁部欠損後に何らかの容器として転用されている。917は土器片加工円盤であるが、双孔の未製品と思われる。主として6世紀前半か。

S A-44 (第97図)

43号住居の6~7m北に位置した、長さ4.8~5.3m・幅4.43~5.0mの、北東壁が短い長方形を呈する。覆土は6~12cm遺存していたが、土層的には40~50cm程の削失が推定される。主柱穴は、深さ42cmの2本柱である。中央には、壺の上半部を打ち欠き、下方に窓を有する(928)土器埋設炉がある。北東隅には、半径1m前後・深さ4~6cmの浅い土坑があり、西側中間にも直径80cm前後・深さ10cm程の土坑があるが、機能は不明である。

覆土から、土師器片94点、須恵器片1点等が出土したが、小片が多い。925の壺のみは、北壁沿いに潰れた状態で出土した。6世紀後半か。

S T-02 (第424図)

VII区40号住居の北西壁中央寄りから1.1m北西に位置し、竪坑の長軸は40号住居の壁面とほぼ直交する。竪坑は、長さ88cm・最大幅68cmの逆D字型を呈し、深さ48cmを測る。土層的には、20cm程の削失と推定される。埋土はⅢ・Ⅳ層の混じりで、閉塞材は認められず、羨道~玄室には黒土が充填していたことから、板閉塞と推定される。羨門は北東部にあり、底面の幅60cm、天井の幅79cm、最大幅83cm、高さ25cmを測る。長さは14cmで、天井は下降して高さ19cmになる。平入り両裾の玄室は、幅84cm・奥行き8~20cm程であり、東側が歪つな形である。天井は平らで、高さ20~22cm、奥壁は垂直である。人骨や副葬品は出土していないが、竪坑内から、小型壺の小片(4304)が出土している。主軸方位はN36°Eで、40号住居の主軸とほぼ同じである。

S T-03 (第424図)

40号住居の南西壁中央寄りから1.65m南西方向へ離れた所に位置している。豎坑は、長さ1.06m・幅72~82cmの隅円長方形を呈し、深さ51cmを測る。土層的には20cm程の削失が推定される。羨門は北側にあり、底面の幅68cm・天井の幅80cm・最大幅87cm・高さ28~32cmを測る。羨道は、長さ22cmを測る。玄室は平入り両裾の楕円形タイプで、裾部の奥行きは20cm、規模は幅1.04m・奥行き21cm・高さ13~28cmを測る。床面は羨道から緩やかに上昇する。奥壁は垂直で、天井は平らに近い。玄室内は黒灰色土が充填しており、人骨や副葬品は出土していないが、玄室流入土から甕の口縁部片(4305)が出土している。豎坑の土層断面から見ると、閉塞時には4・5層が入り込んで床面的になり、骨化するまで閉塞せず、板閉塞の後に残りが埋め戻されたことが想定される。

主軸方位はN15°Wであり、40号住居の軸とは若干ズレる。

S T-04 (第424図)

40号住居の北東15mに位置している。豎坑は、長径1.13m・短径82cmの楕円形を呈し、深さ58cmを測る。土層的には、20~30cmの削失が推定される。羨門は北側にあり、床面の幅48cm・天井の幅52cm・最大幅62cm・高さ31~33cmを測り、アカホヤ塊6個で閉塞している。羨道は、長さ10~16cm・幅38cm・高さ34cmである。玄室は平入り両裾で、裾部の奥行きは20cm、規模は幅1.04m・奥行き20~26cmを測る。西壁奥側は広く、頭位を推定させる。天井はほぼ平らで、奥壁は垂直である。玄室内は黒灰色土が充填しており、人骨や副葬品は遺存していないが、豎坑内から丹塗り土師器の壺片(4309)が出土している。

主軸方位はN26°Wである。

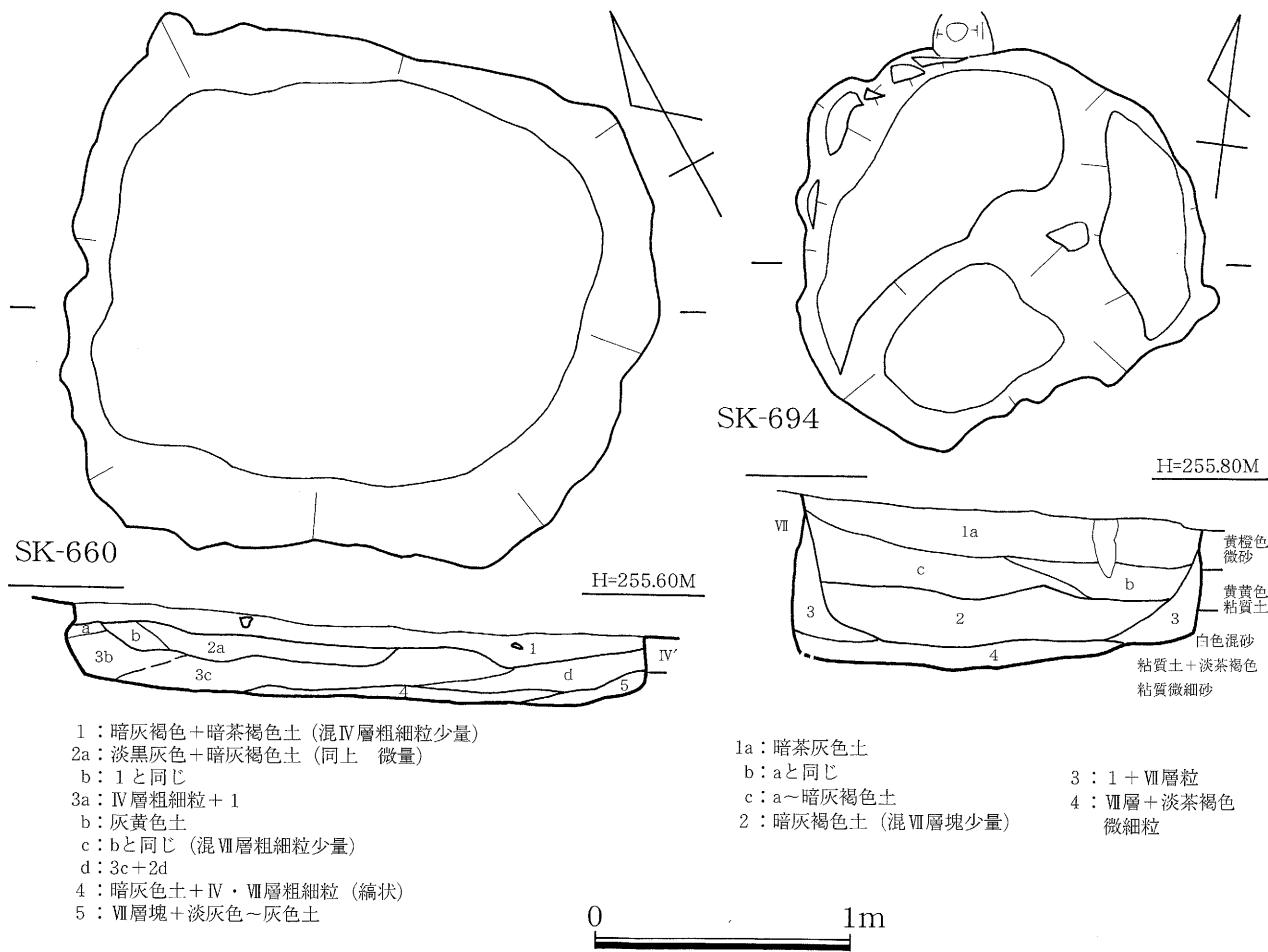
S T-05 (第424図)

X区41号住居の東5.1mに位置している。豎坑は、長さ97cm・幅59~67cmの楕円形を呈し、深さ44~47cmを測り、土層的には10~20cmの削失が推定される。底面は、羨門に向かって若干下降する。羨門は北側にあり、底面の幅14cm・天井の幅30cm・高さ36cmを測る。羨門の手前には直径11cm・深さ8cmの小pitがあり、閉塞板の抑え杭か豎坑の目印杭か、用途は不明である。羨道の長さは6cm程で、玄室は平入り両裾の楕円形プランである。裾の奥行きは30cm程、玄室は、幅87cm・奥行き22cmであり、天井は羨門から下降し、床面は上昇していき、明瞭な奥壁が造られていない。玄室内は黒灰色土が充填し、人骨や副葬品は出土していない。頭位も推定できないが、幼児の墓と推定される。

主軸は、ほぼ北向きである。

遺物包含層の調査

VI区18号住居の南東部(S X-03)やVII区の32号住居~65号溝周辺、旧谷への下降部(S X-06)などで、主として5~6世紀代の土師器を包含するⅢ層の調査を実施し、若干の遺物が出土している(第113~115図)。



第105図 SK-660・694 遺構実測図

4. 古代～中世

遺構・遺物は少なく、掘立柱建物跡2棟、土坑2基のほか、溝状遺構数条および自然流路1条程度の検出である。

IX区 SB-05 (第451図)

2間×2間の、4m四方の建物跡である。柱穴の規模は、直径26~34cm・深さ45~80cmを測る。北桁の中間の柱穴は、位置が相当片寄り極端に浅いことから、別遺構の可能性もある。主軸方位は、N80°Wである。

SB-06 (第451図)

35号住居に重複する、梁行2間(3.72~3.8m)、桁行1間(3.60~3.85m)の建物である。柱穴の規模は、直径25~30cm・深さ40~52cmを測る。主軸方位は、N13°Eである。

SK-660 (第105図)

VIII区の西端中央付近、99・100号溝の北に位置する、長径2.32m・短径1.97mの亀甲型を呈する土坑で、深さは24~28cmを測る。土層的には、55cm以上の削失が推定される。壁面の殆どがオーバーハングしており、覆土も自然堆積であることから、粘土採掘穴と推定されるが、若干粘性のある土しか採掘できていないので、途中放棄した可能性もある。覆土から丹塗り土師器(975)が出土

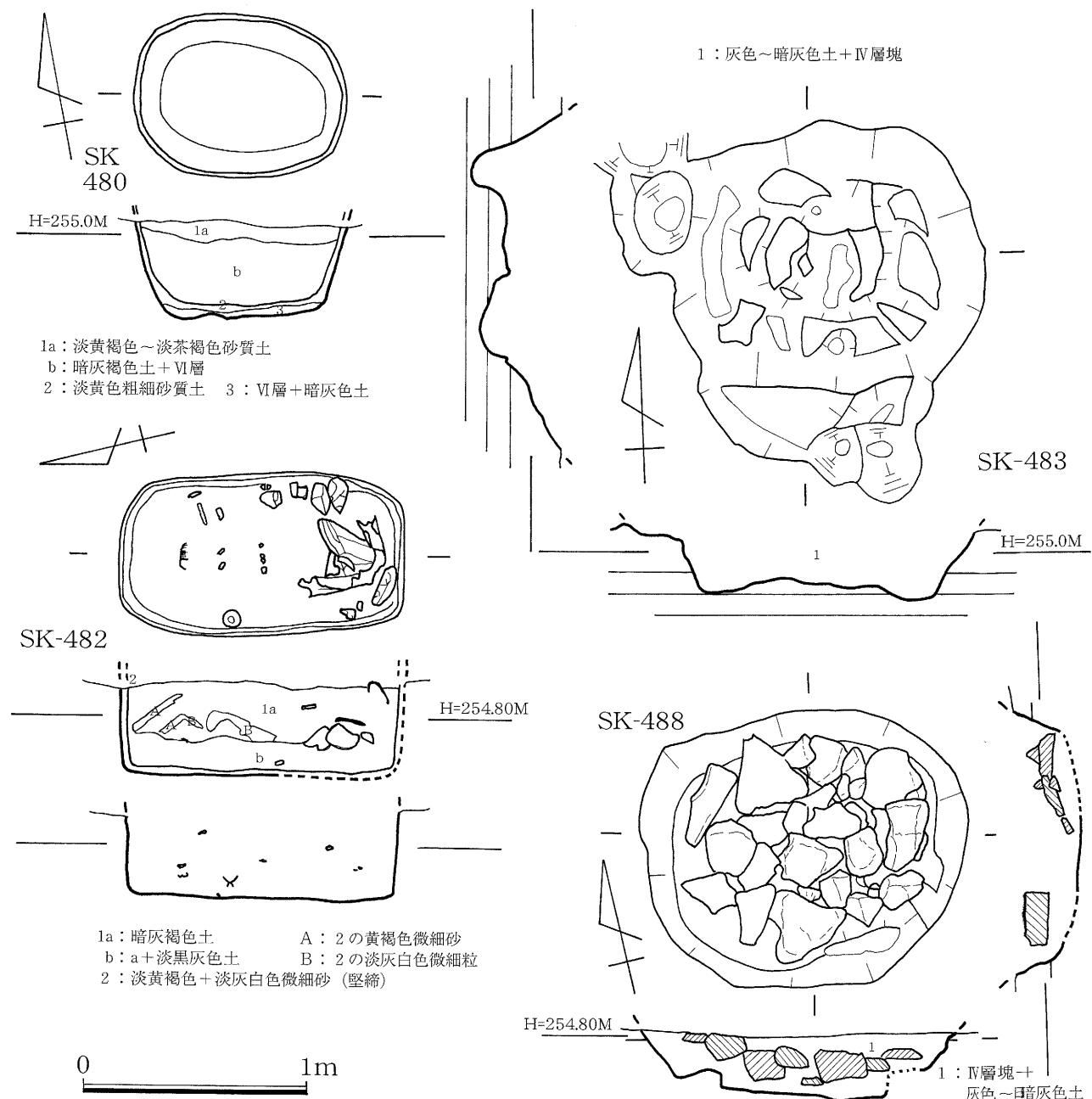
しているが、中世末～近世の遺構と推定している。

S K -694 (第105図)

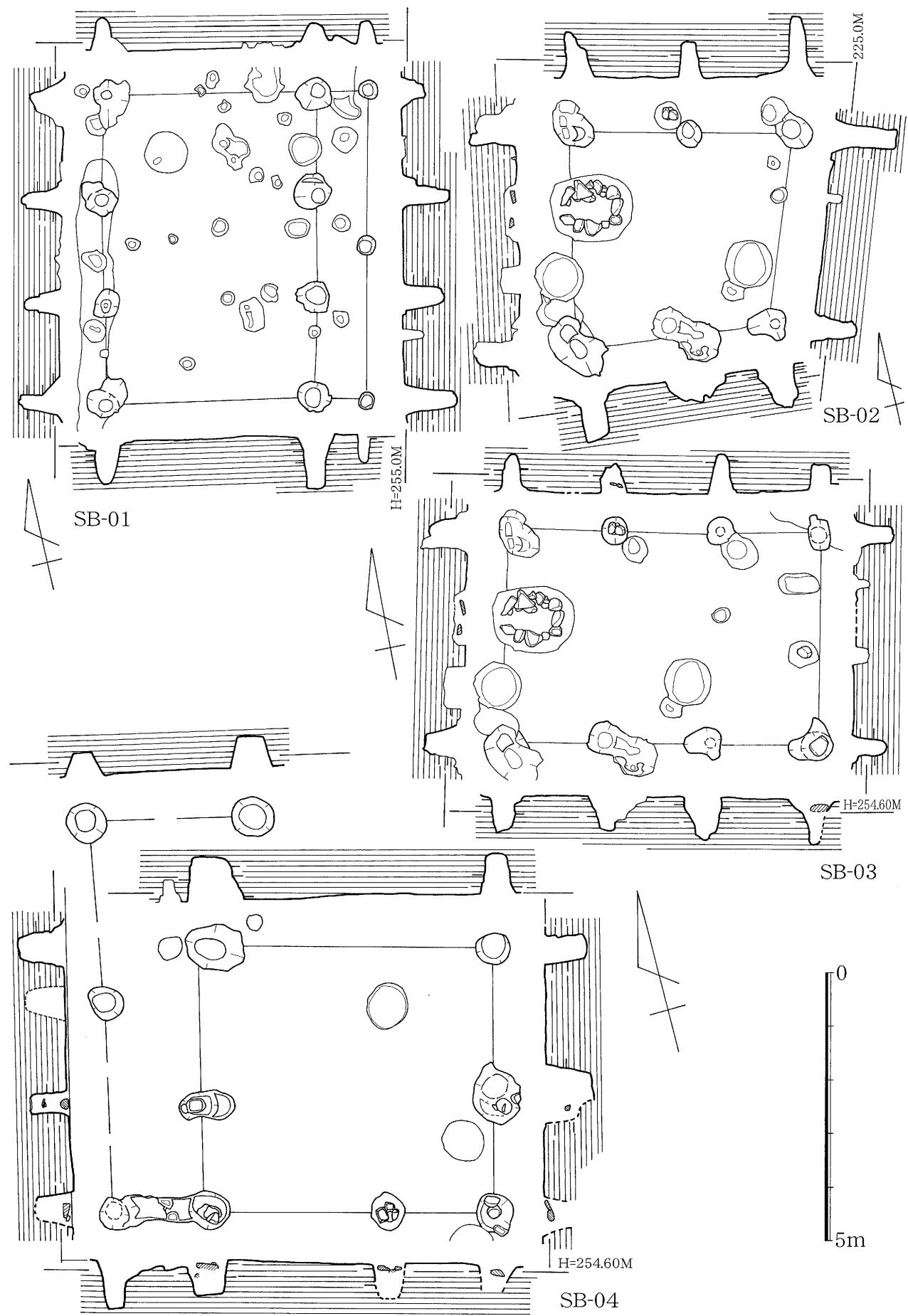
30号住居の西に位置する、直径1.6mの円形の一部が切れる不整形な土坑で、深さは50～64cmを測る。土層的には、80cm以上の削失が推定される。壁面の半分はオーバーハングし、底面は白色粘土を含む層で止まっていることから、粘土採掘穴と断定される。時期判定は困難で、6世紀～中世末頃までが推定される。

S D -37・44B・45・80～83・91・92

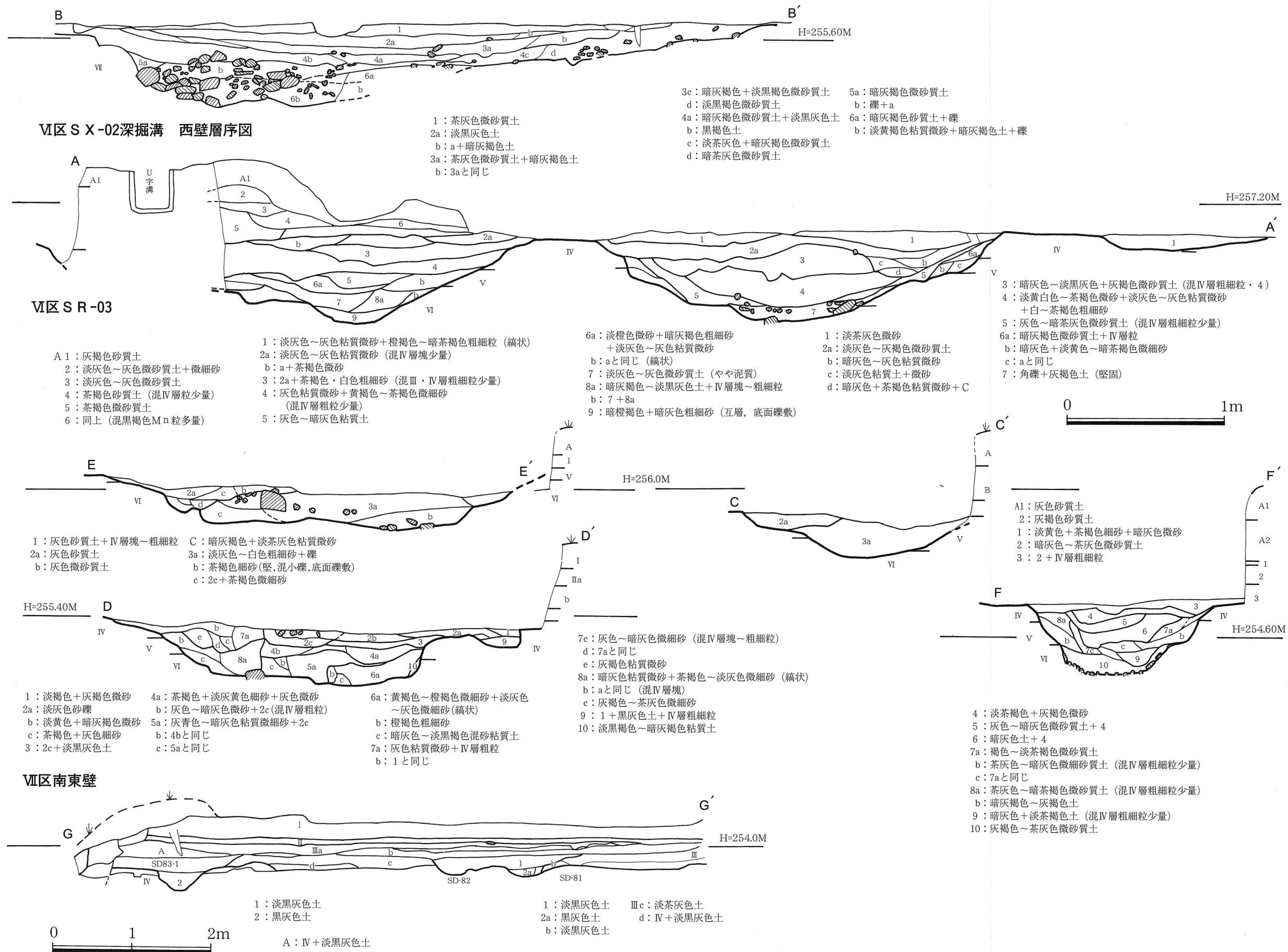
覆土の質から、古代～中世の溝状遺構と断定されるが、機能は明言できない。



第106図 IX区 S K -480・482・483・488 遺構実測図



第107図 IX区 SB-01~04 遺構実測図



第108図 VI区 S X-02, S R-03, VII区南東壁 断面層序図

S X-02

VI B区の北西部に位置した、段丘の凹地（自然流路）へ流れ込む支流であり、中世末以前の遺物を含む。工事計画では削平されないので、部分的に深さ等を確認した（第108図）。

5. 近世以降

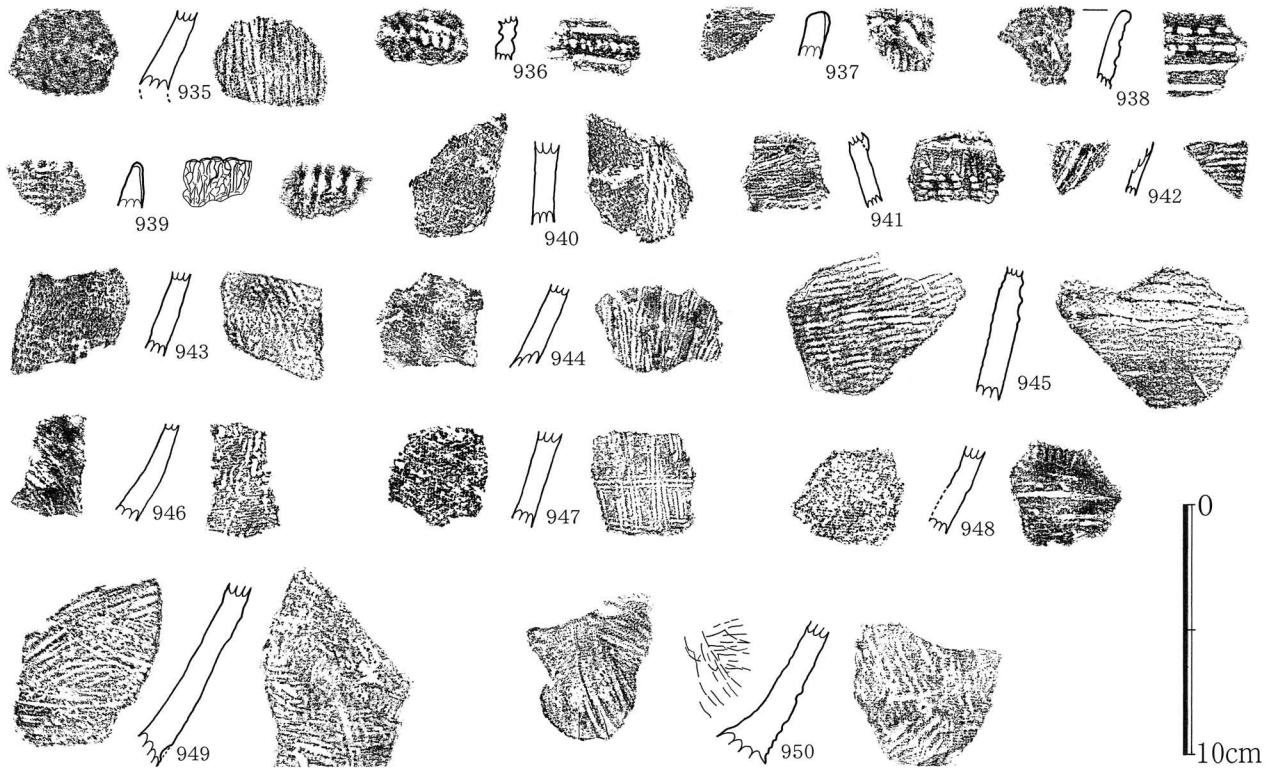
近世の遺構の殆どは座棺墓であり、VI～X区で220基程を検出したが、副葬品は無く、鉄釘も皆無である。近現代になると縦横に水路が走り、昭和10（1935）年以降の大規模な水田化に伴う用水路が整備されていったことを物語る。墓は楕円形や長方形の土壙墓・木棺墓のほか、石囲いの火葬墓まで様々なタイプがある。IX区の01～04号建物は、半世紀前のものである。

S K-480（第106図）

IX区の北部、34号住居の北側に位置し、主軸を東西にとる長径98cm・短径76cmの楕円形を呈し、深さ42cmを測る。土層的には、60cm前後の削失が推定される。壁面～底面には、淡黄白～淡褐色の粗細砂質土（粘質）が厚さ3cm程丁寧に貼られた土壙墓である。規模的には、未成人と思われる。副葬品等は出土していない。

S K-482（第106図）

480号土壙墓の1.4m東に位置し、主軸を南北にとる、長さ1.29m・幅0.75mの隅円長方形を呈し、深さ43cm程を調査した。土層的には、60cm前後の削失が推定される。構造は前述土壙墓と同じであるが、覆土中位からセルロイド製の櫛が、底面から壺・煙管・ボタン2個など（第110図）が出土

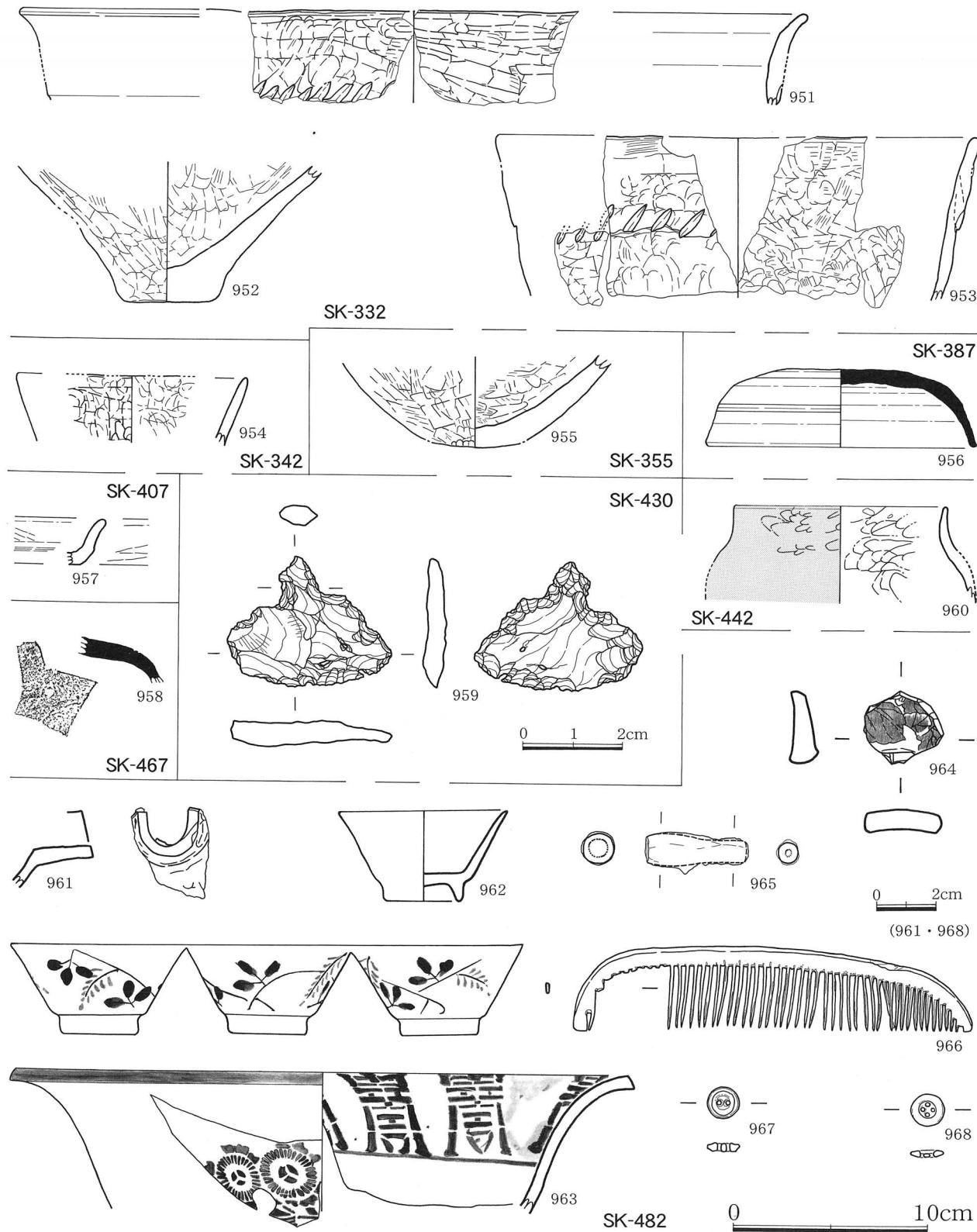


第109図 VII～IX区出土 繩文土器実測図

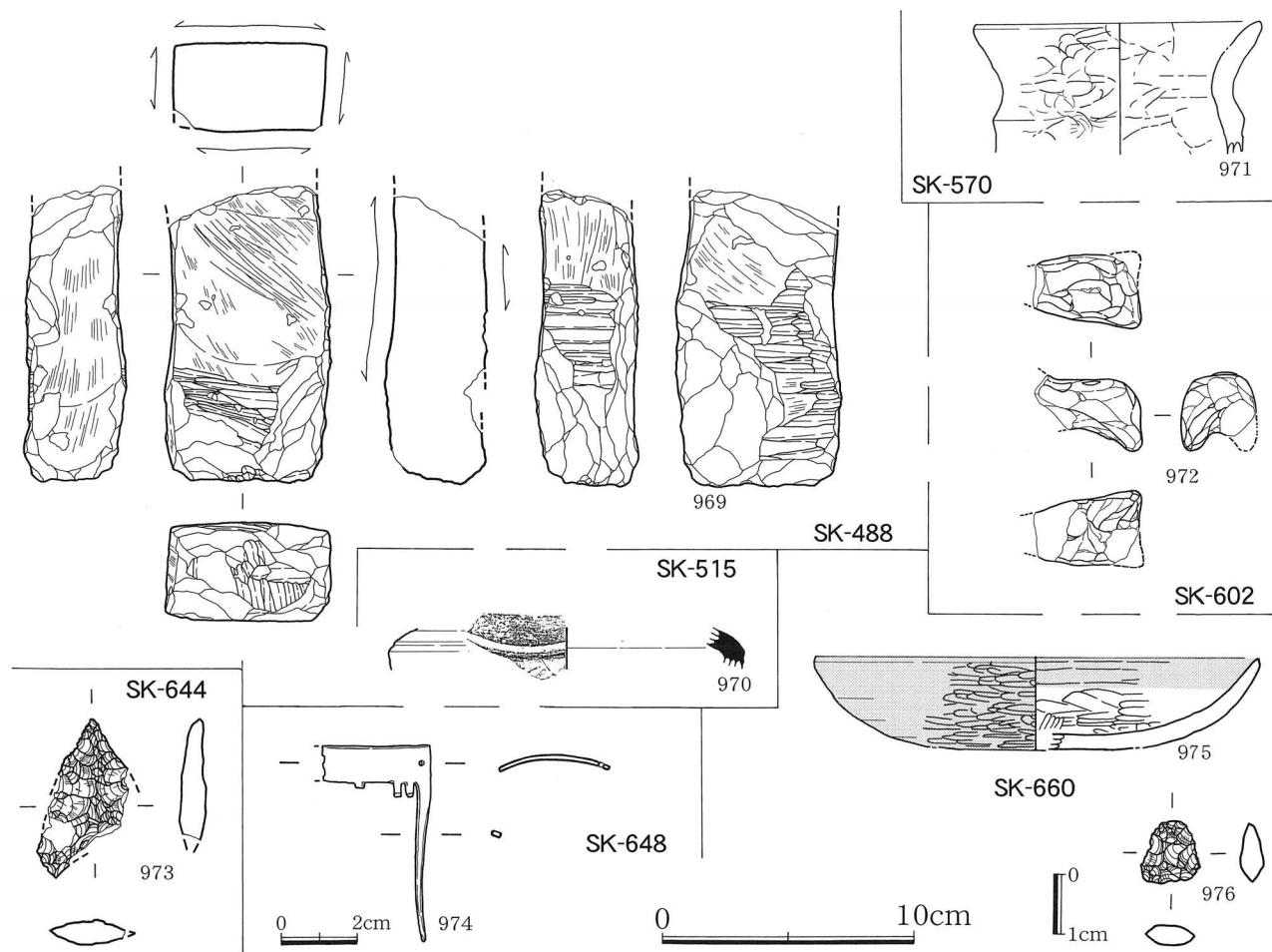
し、成人女性が屈葬されたことが推定される。南半部では拳大の礫5個と木（楠か）の根元付近が出土し、木蓋の重しが落ち込んだものと思われる。戦中～戦後期の墓である。

SK-483 (第106図)

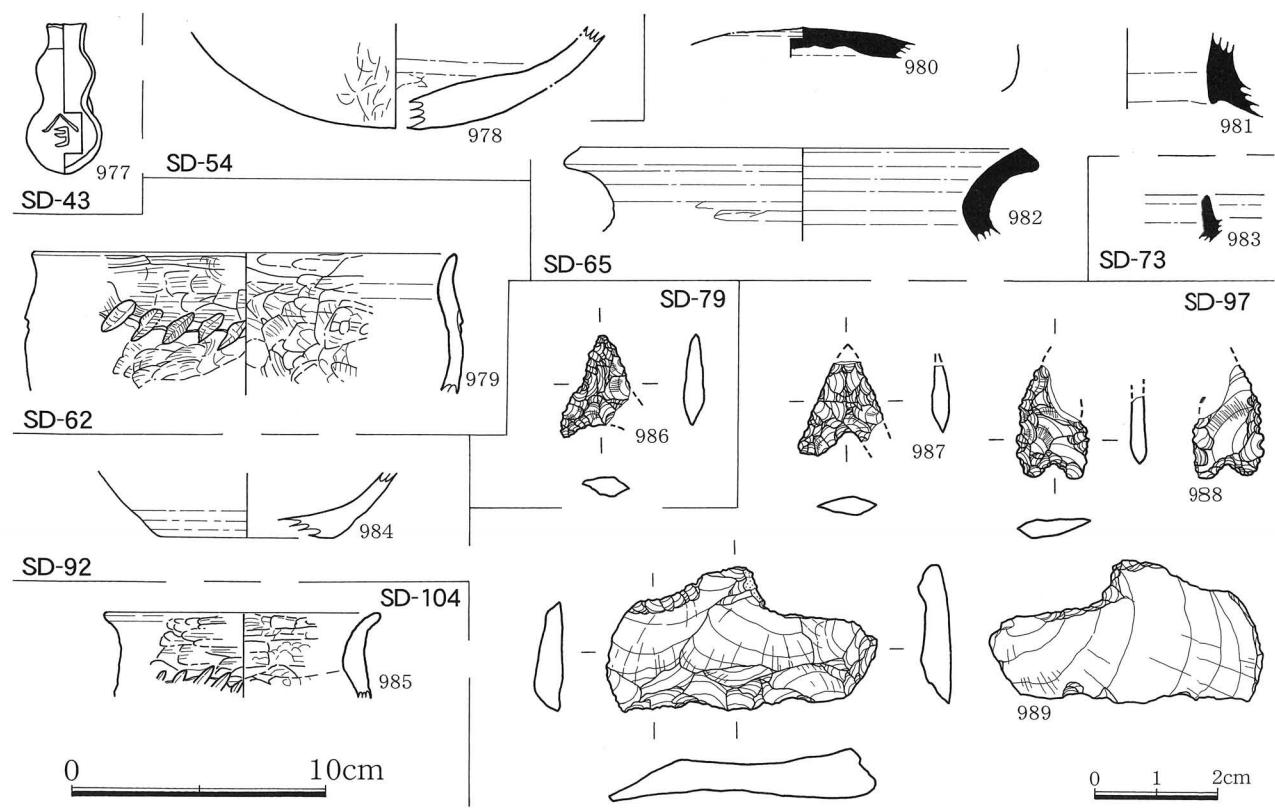
05号建物の北西部に重複する、直径1.46～1.7mの不整形なプランで、深さ26～30cmで中央部は40



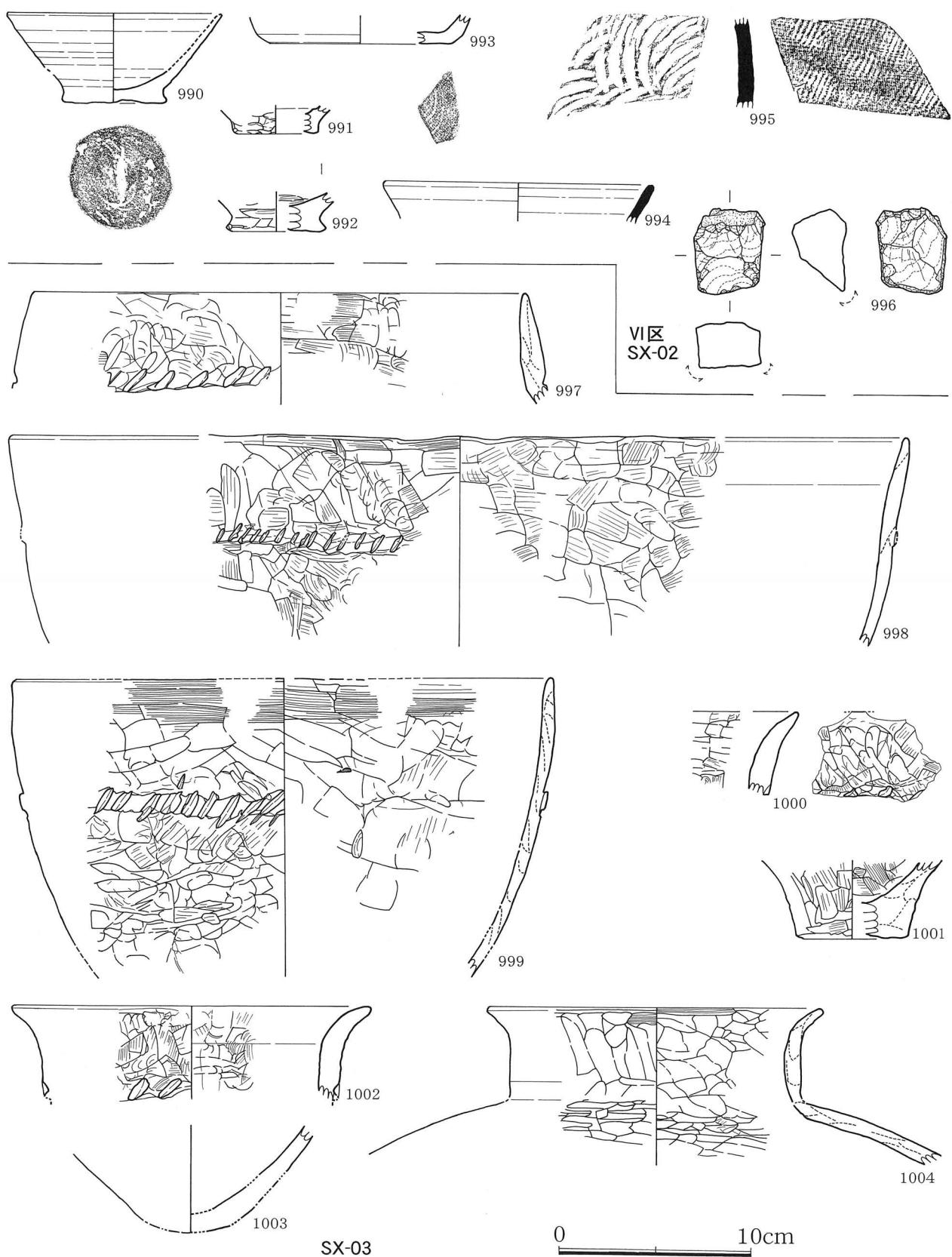
第110図 SK-332・342・355・387・407・430・442・467・482 出土遺物実測図



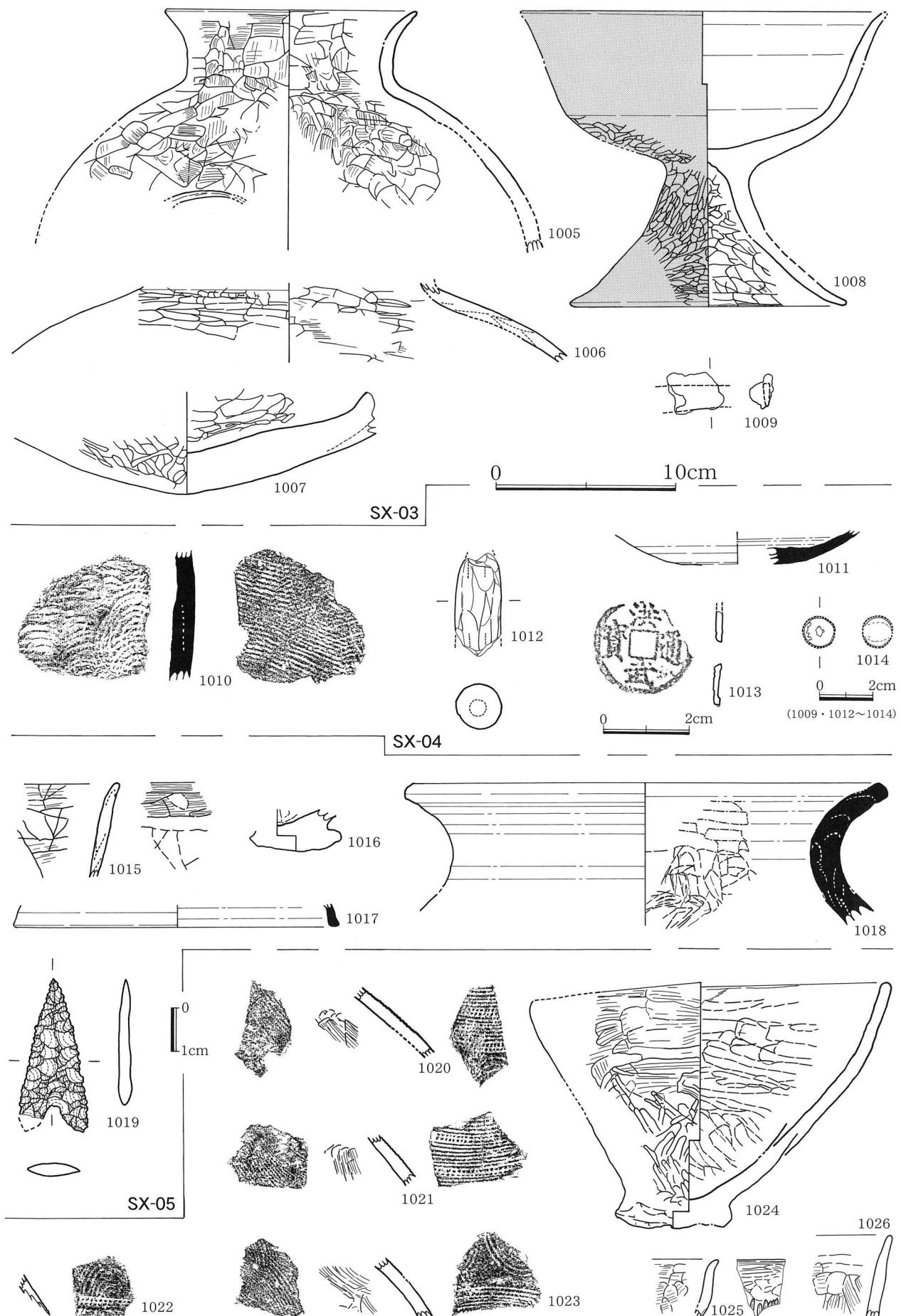
第111図 SK-488・515・570・602・644・648・660 出土遺物実測図（陶磁器以外）



第112図 SD-43・54・62・65・73・79・92・97・104 出土遺物実測図（陶磁器以外）



第113図 VI区 SX-02・03 出土遺物実測図(1)



第114図 VI～IX区 SX-03～06出土遺物実測図(2), SX-04～06出土遺物実測図(1)

×50cm程の床面になる。周囲は8～15cm程掘り凹められた、石棺墓の様な掘り込み形態である。出土遺物は無いが、覆土から、近現代の遺構と断定できる。

S K-488 (第106図)

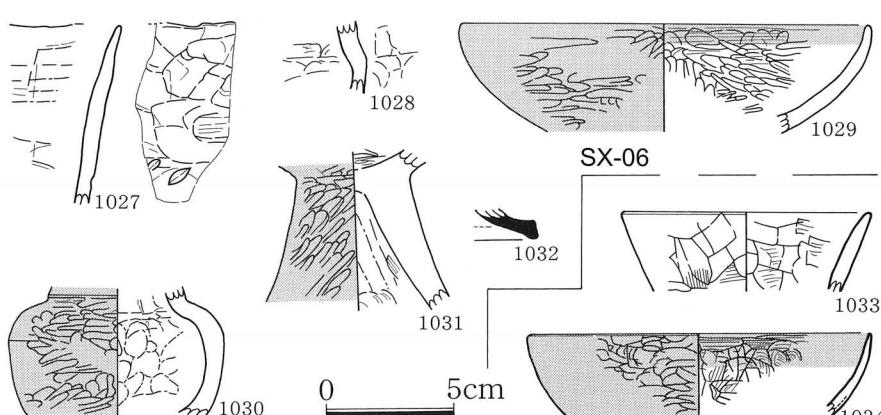
02号建物の西部に位置し、主軸を東西にとる、長径1.5m・短径1.3mの楕円形を呈し、深さ25～29cmを測る。土層的には、50～60cmの削失がある。構造としては、白色粘土を使用した床面を貼り、河原石を内法52×80cmに組み、火葬にした（礫が被熱している）ものである。人骨や副葬品は出土していないが、貼り床内から、瓦片3点が出土している。近現代の火葬墓である。

S R-03

VIA～C区で検出しているが、近現代まで機能していた道路跡のため、部分的な確認調査に止めている。覆土には微細砂～粗砂礫が充填しているが、底面には礫混じりの堅固な硬化面がある。近世に掘削され、埋没しながらも継続して使用された道路跡である。

S D-97 (付図4)

VIII区の中央部で検出した、東西方向の溝状遺構であるが、重複する下部の東半分に硬化面を確認した。幅80cm前後を溝状に掘り、粘質土を混ぜた土が堅く締まっていた。地元古考の話では、昔、鉄鉱石や製錬鉄を馬車で運んだ「木馬道」があったらしい。馬車ならば、轍や2条の硬化面か車幅+ α の幅の硬化面が想定されるが、当遺構は該当しない。ただ、97・98号溝掘削の際に削失したことは推定可能と考える。X区においても続きの掘り込みが検出されており、このまま東方へ下って現道から川内川へと運んだと思われる。⁽¹⁾



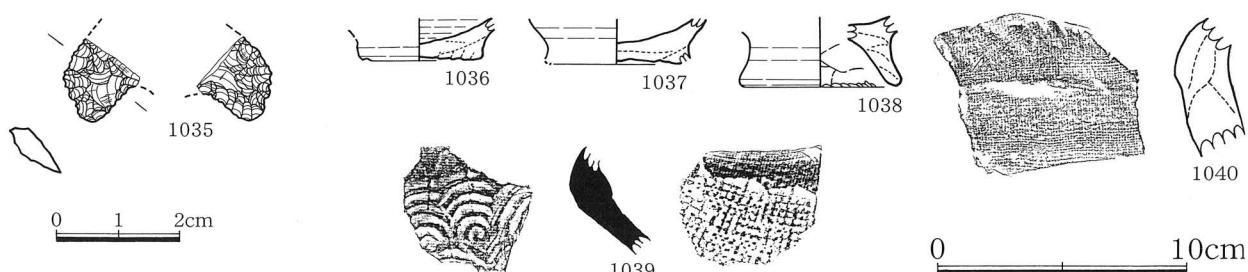
第115図 IX区 S X-06出土遺物実測図(2)、VI区 S Z-09出土遺物実測図

IX区 S B-01 (第107図)

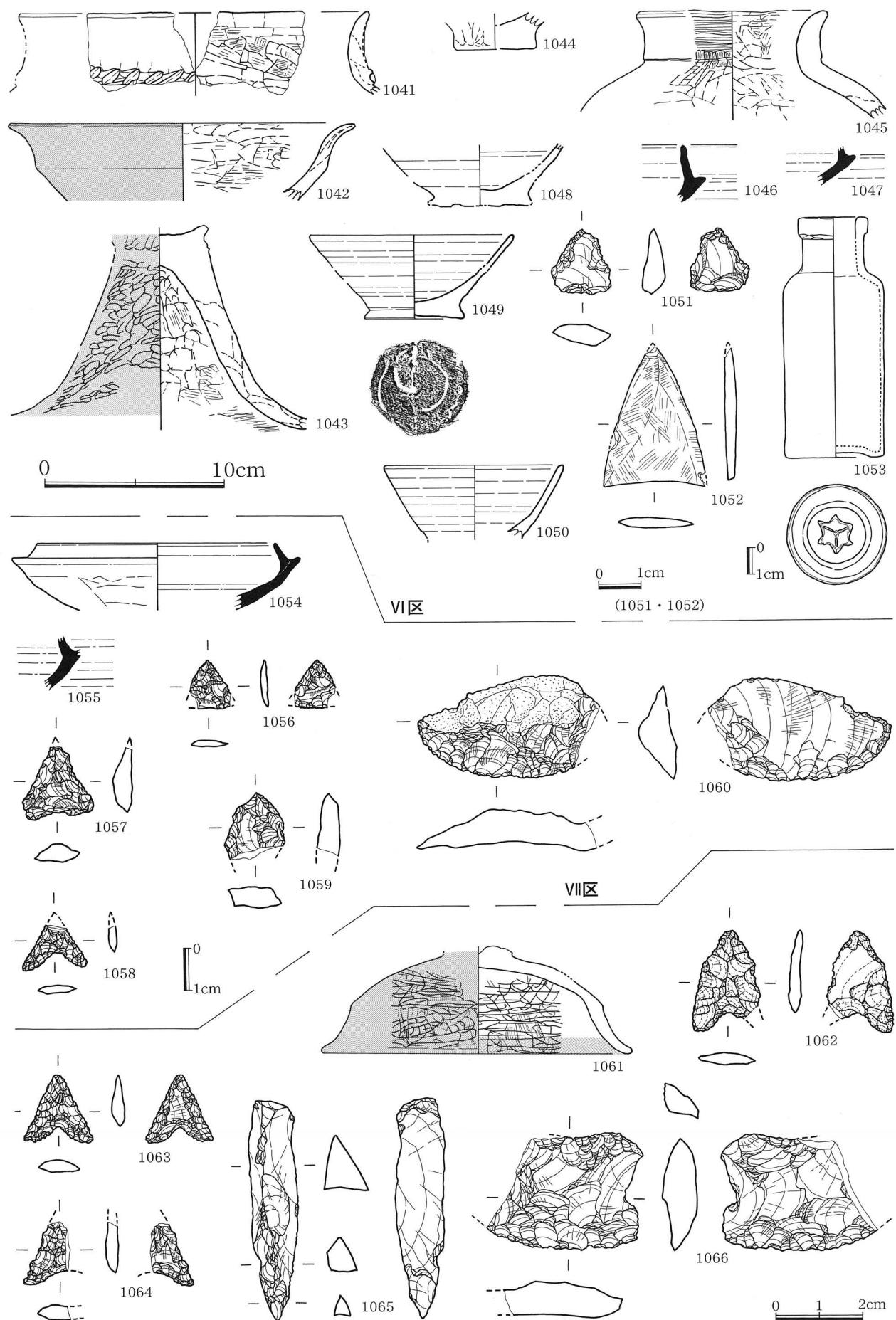
梁行1間 (3.8m)・
桁行3間 (5.7～5.8m)
の身舎に幅1間の廂が付
く建物である。

S B-02 (第107図)

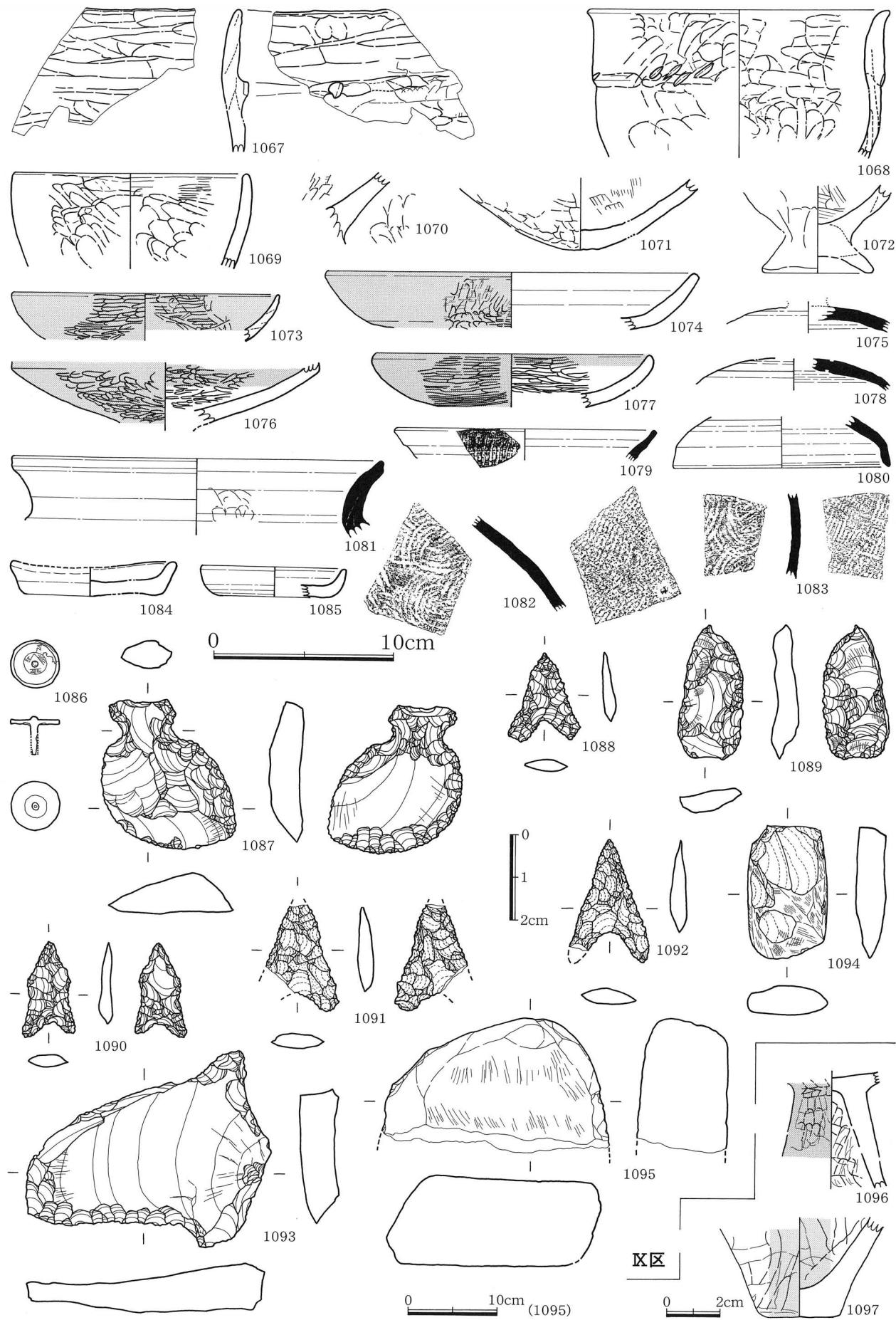
梁行2間 (3.6～4.15
m)・桁行1間 (3.65～
4.0m) の歪つな建物と



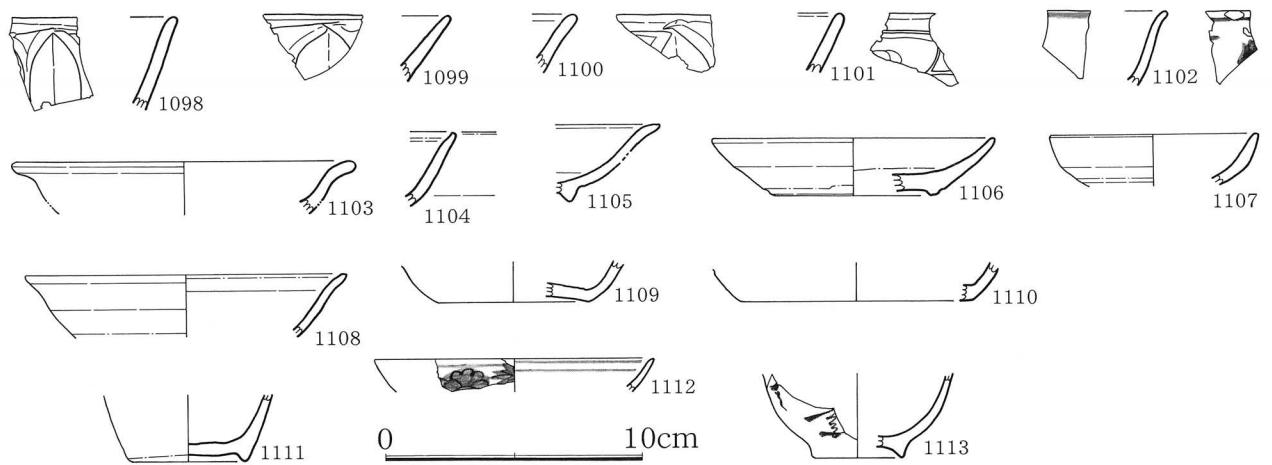
第116図 VI区 S R-03 出土遺物実測図 (陶磁器以外)



第117図 VI～IX区 II～III層・pitほか出土遺物実測図



第118図 IX・X区 II~III層・pitほか出土遺物実測図



第119図 VI～IX区出土 輸入陶磁器 実測図

推定される。

S B-03 (第107図)

梁行1間 (4.0m)・桁行3間 (5.7~5.8m)の建物である。

S B-04 (第107図)

梁行2間 (4.95m)・桁行1間 (5.3~5.4m)の建物に、幅1.7~2.4mの廂・廊下が付くと推定される建物である。西端の柱は布掘りである。柱穴からはガラス片や陶磁器片多数が出土した。

S E-01

01~04号建物に伴う素掘りの井戸で、扁平な河原石で塞いでおり、完掘していない。

S E-02・03

幕末～近代の陶磁器が出土し、素掘りの井戸であると確証を得た深さの時点で、掘り込みを止めている。

6. 遺構・遺構外の出土遺物

第111図-972は、41号住居を切る座棺墓から出土した動物型の土製品である。

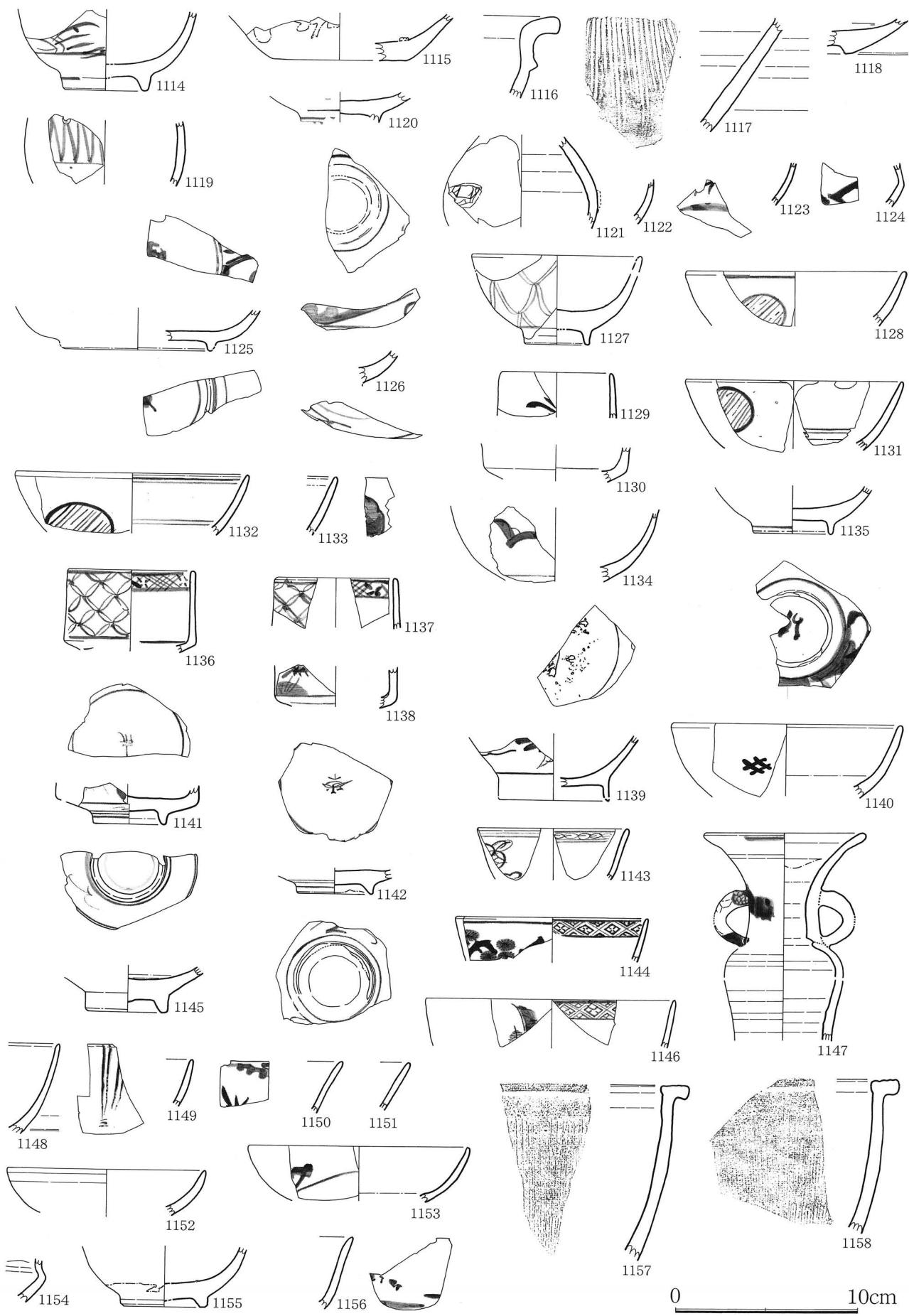
第113図-996は、石の稜が潰れており、火打ち石と思われる。

第113~114図のS X-03出土遺物は、18号住居に起因するものが多いと推定される。

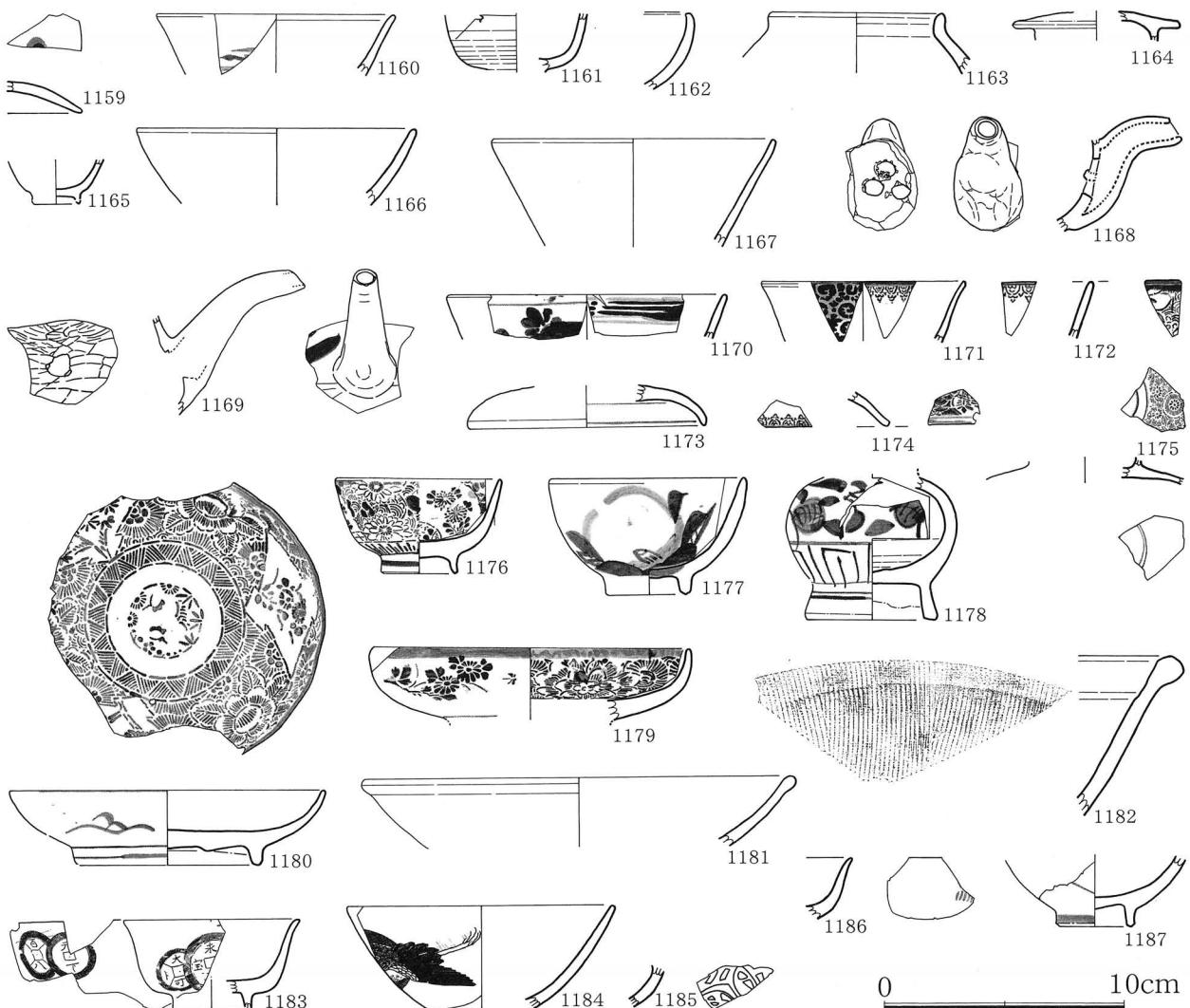
第117図-1048~1050は、柱穴等から出土しており、古代の建物跡が20号住居周辺に存在していたと思われる。1056・1058は縄文時代早期の所産であるが、これに限らず、竪穴住居や柱穴等の遺構や近世以降現代に至る搅乱によってVI層の土を掘り上げると、打製石鏃等の早期の遺物が混在する。天神免遺跡での縄文時代早期は、キャンプサイトにもなっていない単なる狩場であったようで、打製石鏃の成品が主たる遺物である。

輸入陶磁器は少なく、図化できたのは16点にすぎないが、これは遺構の少なさに比例している。

中世の掘立柱建物跡は、IX区の2棟のみ復元したが、01・05・06号建物跡の周辺には柱穴が2~4個縦列する状況にあり、さらに数棟を推定復元できそうである。輸入陶磁器は13世紀後半~17世紀



第120図 VI～X区出土 近世以降国産陶磁器実測図(1)



第121図 VI～X区出土 近世以降国産陶磁器実測図(2)

まで継続して出土しており、相当数の建物跡があつておかしくない。

近世国産陶磁器は、初期から継続して出土している。肥前の陶磁器は少なく、肥前系（八代～人吉周辺）と薩摩が多い。I～II層や撹乱から、ガラス片や瓦など近現代の遺物と混在して出土した陶磁器の何割かは現地で廃棄しているので、特に、幕末以降の陶磁器の数は不詳である。図化した陶磁器も選択したものであり、遺物の年代が即、遺構の年代を示すものではない。

註

- (1) 天神免遺跡の北西山中で、19世紀中頃に良質の鉄鉱石が発見され、薩摩藩の製錬所へ運ばれたのが発端で、明治33（1900）年には地元に精錬所が建設され、5年間操業されていたことは第2章でも述べているが、当遺構の年代は開始期からのものと思われる。道の補修や改修の痕跡は不明であるが、明治期にも同一路線で運搬されたと考えたい。

遺構検出地の西側は急斜面になることから、直線道が続いたとは考えられず、硬化面の途切れる中間あたりから、北か南に折れて現道まで繋がる葛折の道であったと推定する。この道について、元本市の歴史民俗資料館嘱託の市田寛幸氏に寄稿して頂いたが、氏は直線道は急斜面であり、馬車での往復は無理であることから、現在の舗装道路がほぼ踏襲していると考え、筆者の意見とは異なる。

第5節 XI区～XIII区

1. 遺構面の状況と検出遺構

XI区は、舗装道路の東隣の水田からを予定していたが、南半分は池を埋め、北半分は半世紀前の家屋を壊して廃棄物を埋めた土地であることを知り、調査対象外とした。調査区の中は、“天地返し”による搅乱があり、遺構が消滅している。残存遺構は西北部と東部に集中し、西北部には竪穴住居4軒と土坑、近世以降の座棺墓が10基程、南側は凹地で、自然流路も重複する。東部には弥生～古墳時代の竪穴住居9軒と地下式横穴墓3基等が確認された。

XII区は、北東部は近現代の溝状遺構と削平による搅乱が著しく、128号住居は痕跡程度であった。119号住居の南西部は“天地返し”があり、118号住居の東～南側は近現代の柱穴や土坑が多い。竪穴住居は11軒、地下式横穴墓4基、土坑10基程、古代と推定される溝状遺構1条などを調査した。XIII区は最も広い区画で、比較的起伏が緩やかな地であり、遺構密度が高い。弥生～古墳時代の竪穴住居70軒程のほか、地下式横穴墓13基、円形土坑10基程、片側小口付設土坑5基、掘立柱建物跡2棟、近世以降の座棺墓50基程と溝状遺構が縦横に走り、搅乱する。47・52・66・72・73・79・80・81号住居は削平著しく、痕跡程度しか遺存していない。道路際の96・97・112・113号住居は、擁壁の基礎工事によって半分程消滅している。82号住居と93号住居の間は“天地返し”があり、83号住居の掘形を不鮮明にしている。直径2～3mの風倒木痕は17ヶ所に散在しているが、黒色土内に土器片を含んでいないものは調査対象外としたが、北風によって大木が倒れた状況の地層横転が大半を占めている。南方の黒色土が充填する凹地・自然流路上にも、ある程度までは遺構が拡がっているという予想に反する検出結果になったが、工事計画では削平されない地であることから、遺構があつたとしても保存されている。

XIV区は、遺構は平均的な密度であったが、近現代の削平・天地返しが著しい。147・148・158・166・167・182・183号住居は痕跡程度の検出である。弥生～古墳時代の竪穴住居41軒のほか、地下式横穴墓1基、円形土坑10基程、片側小口付設土坑2基のほか、近世以降の座棺墓50基程、溝状遺構10条程を調査した。

XV区はX区に近く、XI区と凹地を挟む対岸に位置するためか、遺構が極端に少ない。北側は削失著しく、中程から南側は近現代の溝状遺構が縦横に走る。遺構・遺物は南側に集中し、古墳時代の竪穴住居1軒と片側小口付設土坑1基、平安時代前期の掘立柱建物1棟と土坑3基、pit4基のほか、古代～中世の土坑5基、近世以降の座棺墓5基を検出した。竪穴住居の東側一帯には、平安時代前期の土師器が相当量出土した。

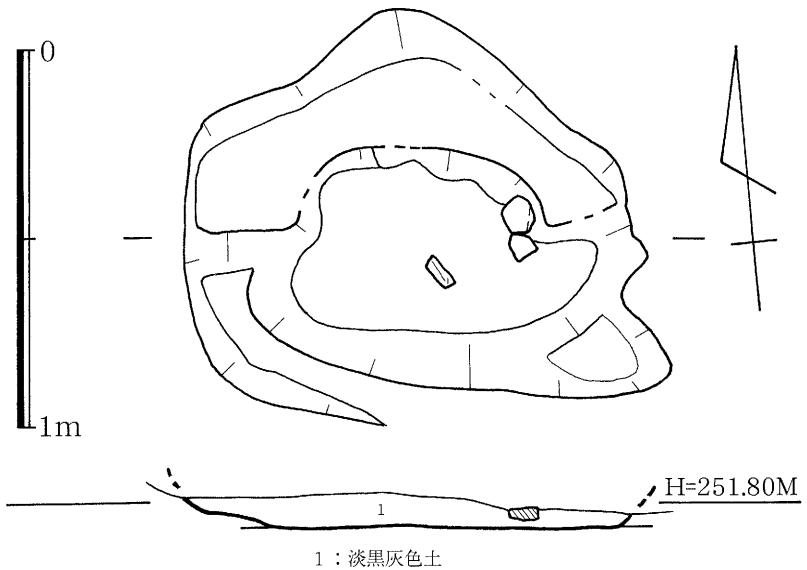
XVI区は、北西部の削失が著しく、南西部も広範囲に天地返しがなされ、北東部には廃屋を焼却して廃棄物を埋めたという搅乱坑がある。遺構密度は低いが、弥生時代の土坑1基と石器製作址2ヶ所、古墳時代にかけての竪穴住居12軒や土坑10基程、片側小口付設土坑2基、古代の掘立柱建物跡1棟と周辺に多数の遺物、近世以降の座棺墓16基、縦横に走る溝状遺構を検出した。

XVII区は、XVI区調査中に工事の照会があり、急拠、調査対象地区とした。XI区で検出していた134号



第122図 XI～XIV区 遺構分布図

住居の続きが良好な状態で遺存していることへの期待もあったが、さらに2軒の竪穴住居も検出した。この2軒には、XIV区で遺構番号を付した際に欠番となっていた171・172号を付している。結果的には、173号が欠番になる。現場ではあくまでも仮番なのであるが、当遺跡の遺構数の多さは、本番に変更すると遺物整理で混乱するであろうことは容易に推測されるので、本報告でも仮番のまま使用する。



第123図 SK-1082 遺構実測図

2. 縄文時代

XIII区の古墳時代の土坑や搅乱坑の覆土に縄文土器5点が混入していたほかは、竪穴住居等遺構の覆土に混入している早期の打製石鏃程度の出土であり、遺構は無い。第419図-4289～4293は晩期、4291と4292は前期の曾畠式である。

3. 弥生時代

竪穴住居以外の遺構として、土坑1基と石器製作址2基がXVI区で検出された。

SK-1082（第123図）

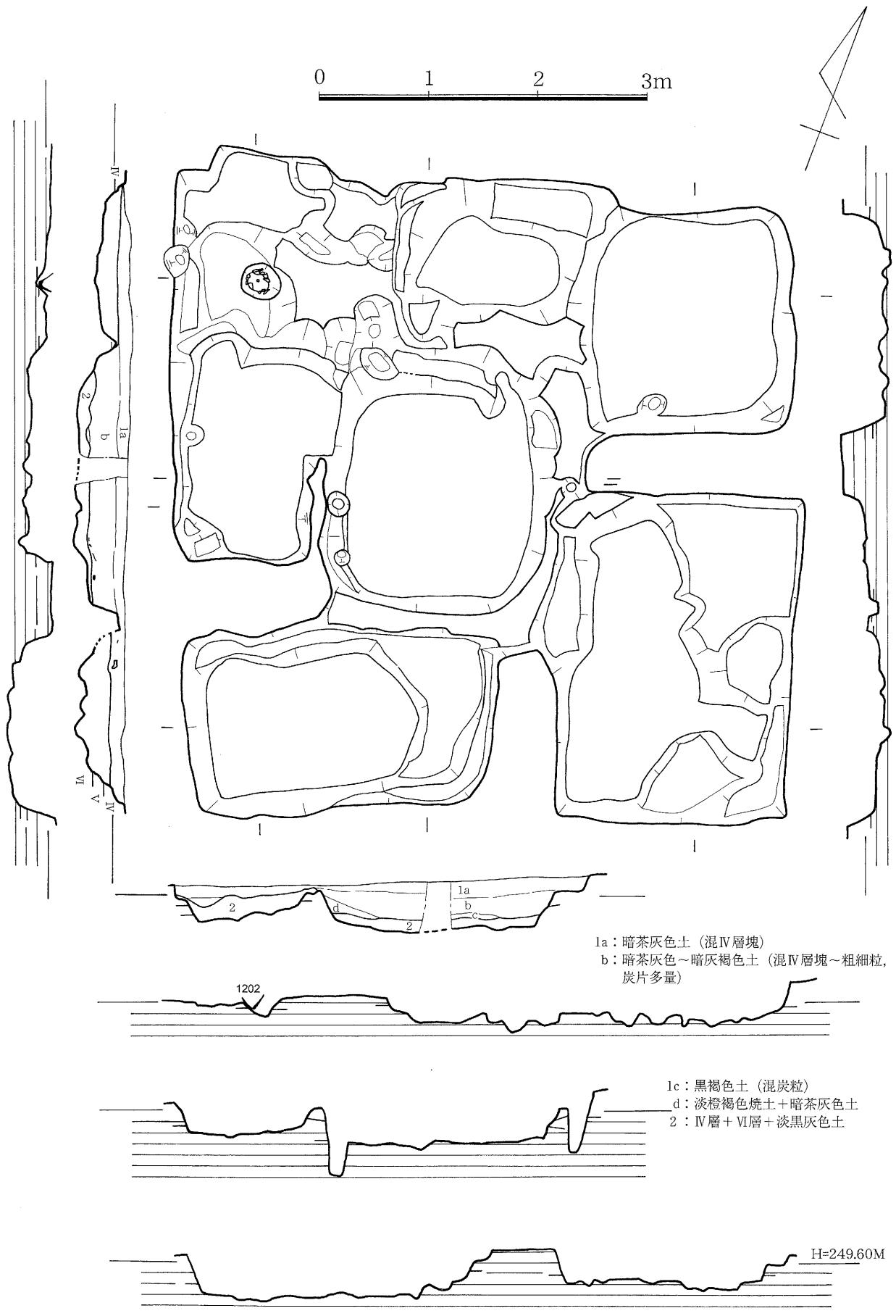
東西1.2m程、南北0.7～1.0mの楕円形に近いプランを呈し、深さ4～9cmが遺存する土坑である。土層的には、10cm程の削失が推定される。覆土から、中期末の黒髮式土器（4523）が出土している。

SL-01

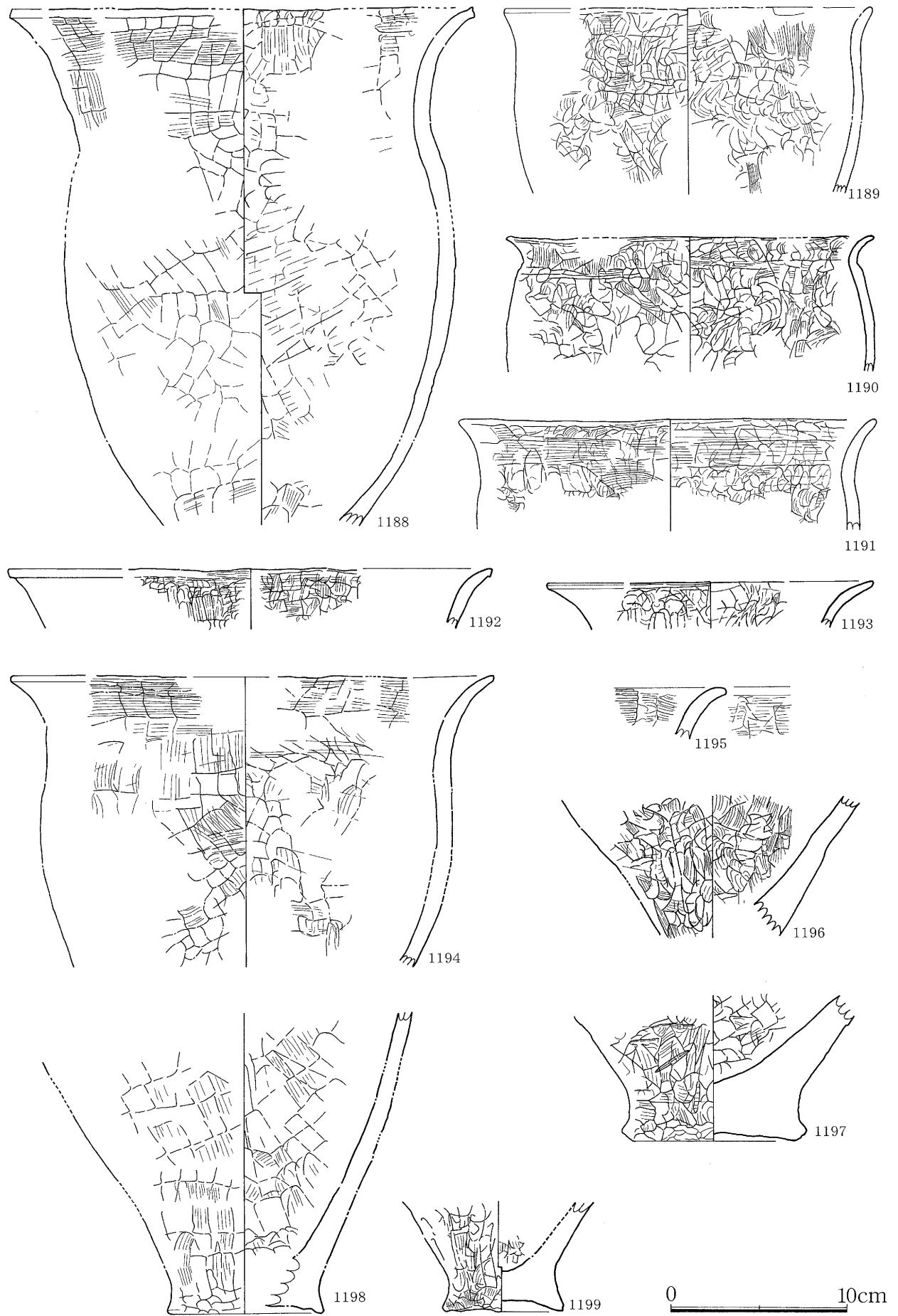
01号掘立柱建物跡南東隅の南で検出した、直径1m程に集中する石器製作址である。成品としては黒曜石製の打製石鏃（第420図-4294）のみで、大半は淡黄白色の頁岩系の石核・剥片・チップ（写真図版391～392）である。周辺にも、同一の石材の剥片が散在していた。

SL-02

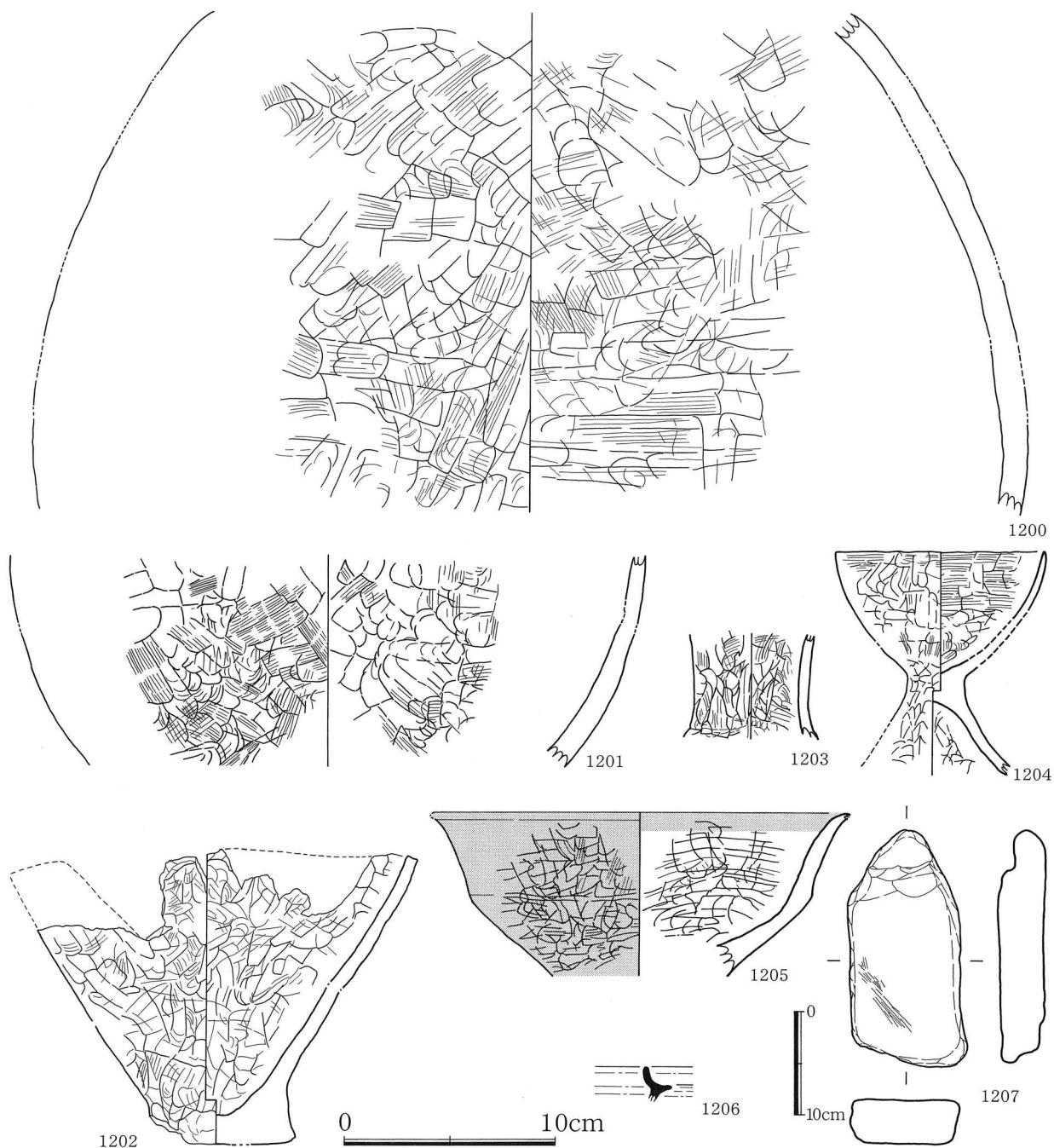
01号と1m隔てた南側で検出した、直径1mほどの石器製作址である。黒曜石製の石鏃失敗作2点と剥片、磨製石鏃の未製品5点と剥片に加え、黒髮式土器（4296）と多条突帯の甕が出土したことから、中期末頃の遺構と断定される。中には01号と同じ石材も入っていることから、01号もほぼ同時期と推定される。



第124図 S A -45 遺構実測図



第125図 S A-45 出土遺物実測図(1)



第126図 S A-45 出土遺物実測図(2)

4. 弥生～古墳時代

竪穴住居150軒程、地下式横穴墓21基、土坑数10基などのほか、方形周溝状遺構1基がある。

S A-45 (第124図)

XIII区の南西部に位置した、東西5.3～5.6m・南北5.6～6.7mの方形基調で、3ヶ所に幅60cmの間仕切りがある。突出部は、北辺以外の各辺中央右寄りにあるが、北辺は明瞭でない。北西隅だけは深く掘削されていないことも考慮すると、北辺突出部に相当する所が出入口の可能性が高い。覆土は10～14cm、中央内区で30～35cmが遺存し、土層的には10～20cmの削失が推定される。主柱穴は2本で、直径18～20cm・深さ56・63cmを測る。壁溝は不明瞭である。

覆土から、弥生終末頃の土器が242点出土したが、図化できたのは16点（1188～1204）にすぎない。1202は北西部の区画内で検出された土器埋設炉であるが、丹塗り土師器の高坏（1205）と須恵器の坏身（1206）とともに2次使用が推定される。2層からも破片19点が出土しているが、図化に耐えない。

S A-46（第127図）

45号住居の南3mに位置した、長さ3.3～3.44m・

幅2.8～3.3mの隅円長方形を呈し、深さは44～52cmを測る。貼り床は無く、西辺南寄りと西隅・東南辺中央には、深さ6～12cmの土坑状の掘り込みがある。中央には、長径33cm・短径25cm・深さ50cmのpit 1基を検出したが、主柱穴なのか、ロクロ pitなのかは不明である。

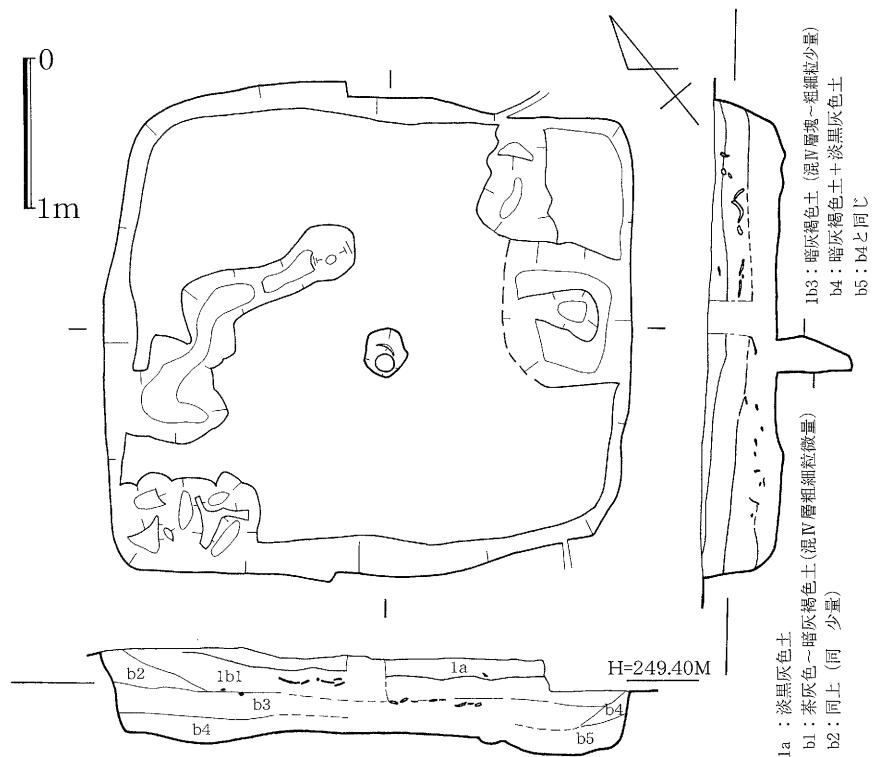
遺物は大量に出土し、1a層（1a・b1上層）と1b層（大半が1b3層）に分けて取り上げたが上下で接合したものもあり、b層は明瞭に分層できない。土器は、総数1170点が出土し、住居廃絶後に不要物が投棄された状態である。出土遺物の中では甕が一番多く、口縁部が大きく外反するタイプから緩やかなS字カーブを描くもの、突帯を巡らせるものなど様々であるが、底部は若干上げ底のタイプが多い。

小型壺も多く（1260～1274・1282）みられ高坏のミニチュアなど祭祀的要素もある。1278は、台付鉢を蓋に転用したものである。1284は完品の石包丁であり、廃棄の理由は鉄器化によるものか。主として3世紀中葉頃と思われ、4世紀前半頃までの時期幅がありそうである。

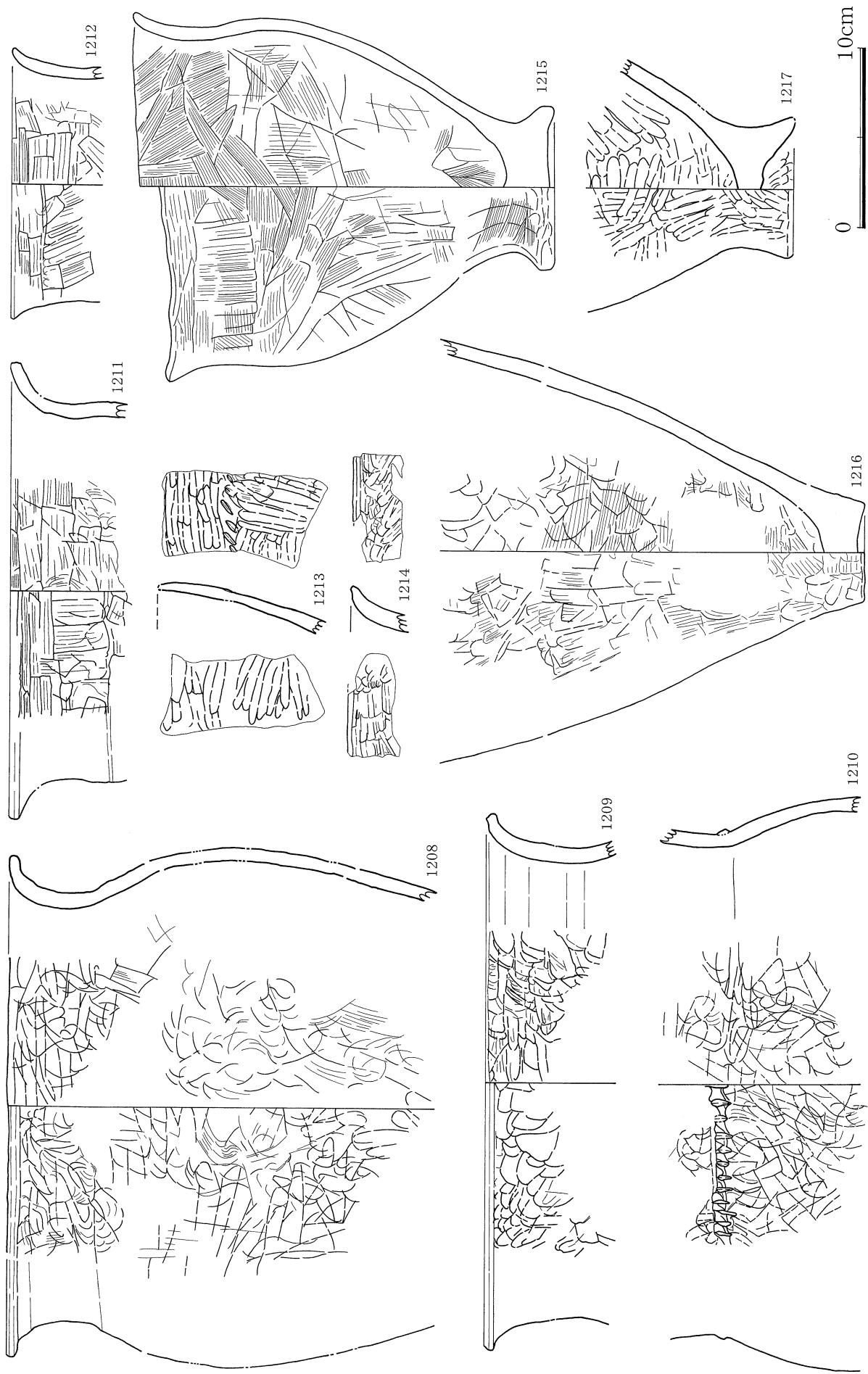
S A-47（第137図）

45号住居の3.3m南に位置し、長さ3.7m・幅3.32mの隅円方形に壁溝の痕跡を残す。覆土は西側で8～10cm程が遺存し、20cm程の削失が推定される、掘削の浅い住居である。主柱穴は無く、東壁中央～北寄りでは、08号地下式横穴墓の豊坑が切る。その南側では、土坑状の、僅かな掘り込みと貼り床を確認した。中央には、口縁部から胴部上半を打ち欠いた甕（1286）を使用した土器埋設炉がある。

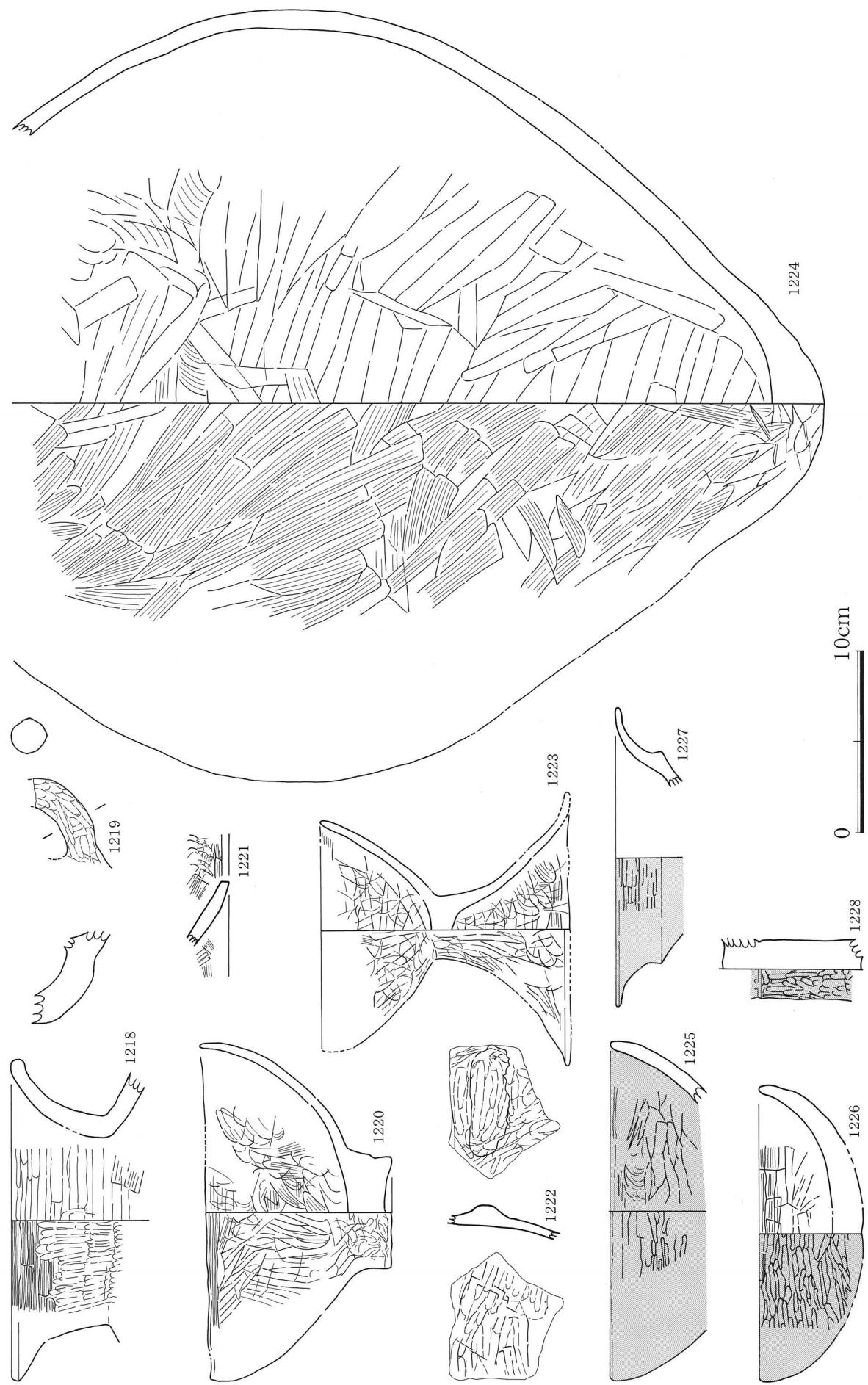
覆土から、土師器片41点が出土したが、図化できたのは2点である。6世紀前半か。



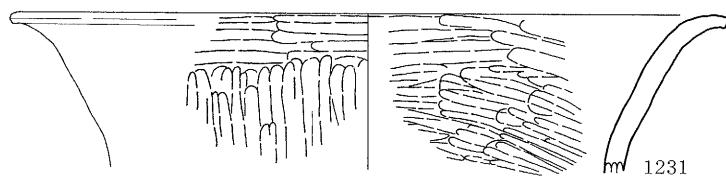
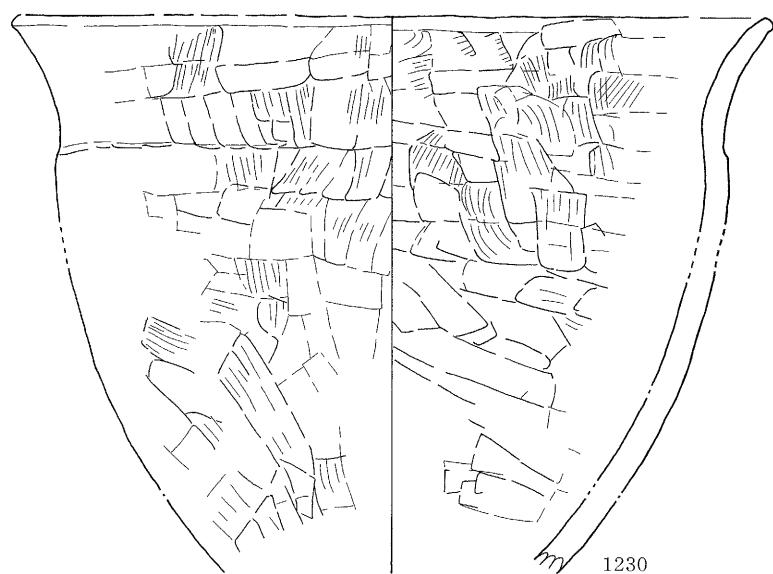
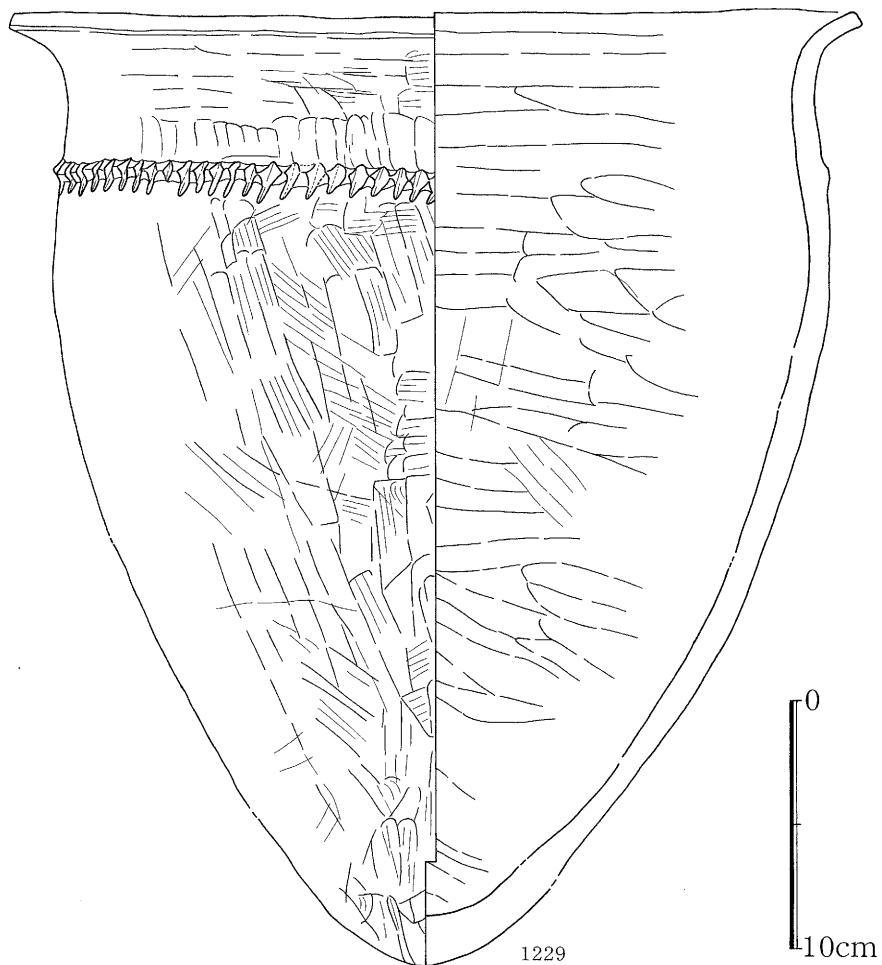
第127図 S A-46 遺構実測図



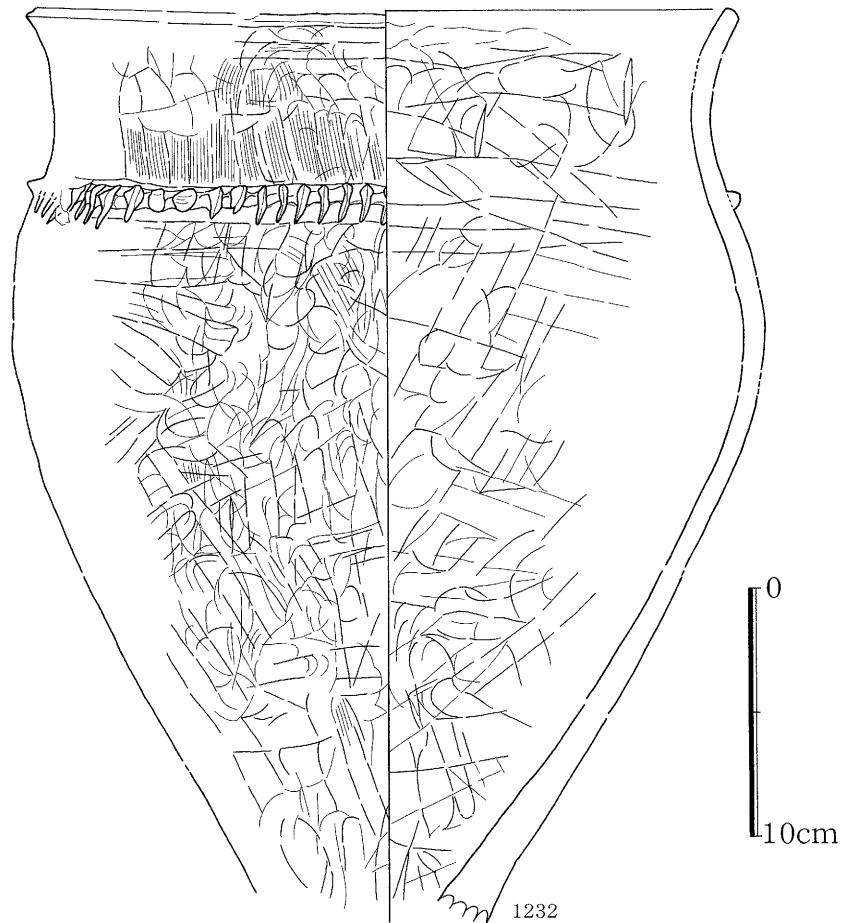
第128図 SA-46 1a層 出土遺物実測図(1)



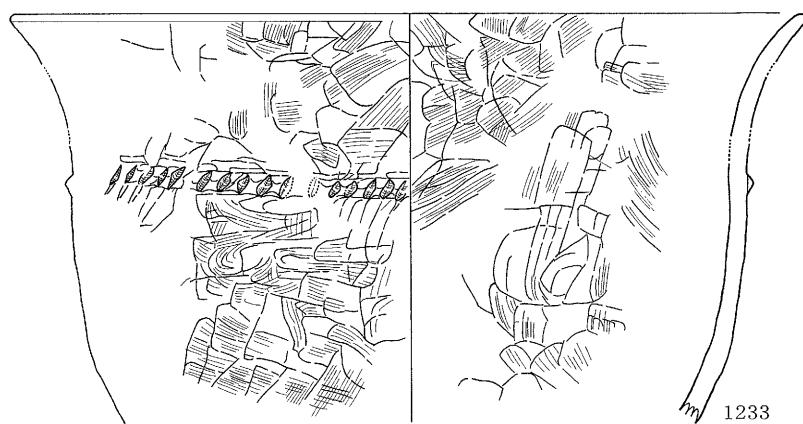
第129図 SA-46 1a層 出土遺物実測図(2)



第130図 S A -46 1b層 出土遺物実測図(1)



1232



1233



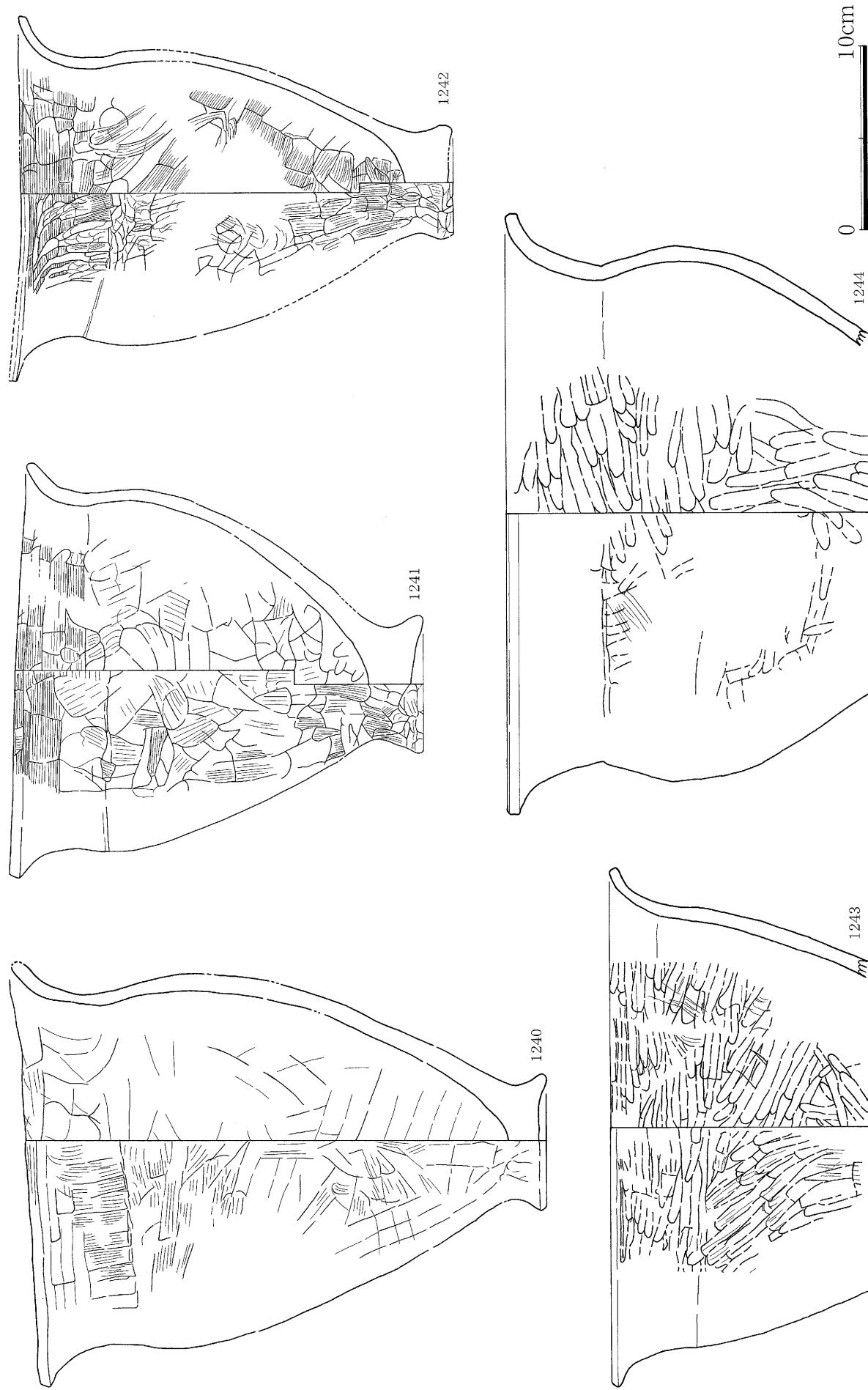
1234

第131図 S A-46 1b層 出土遺物実測図(2)

第132図 S A-46 1b層 出土遺物実測図(3)



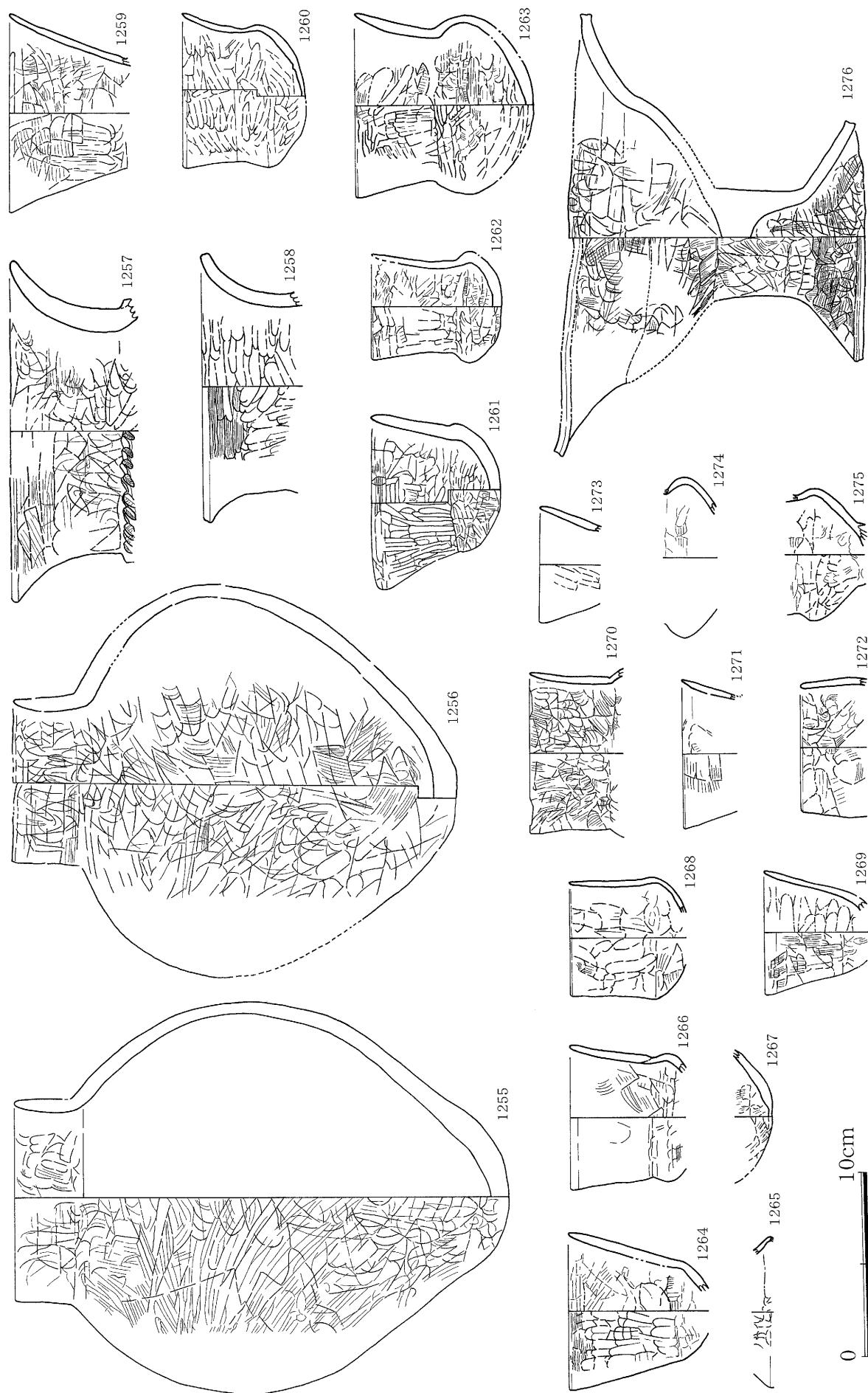
第133図 SA-46 1b層 出土遺物実測図(4)

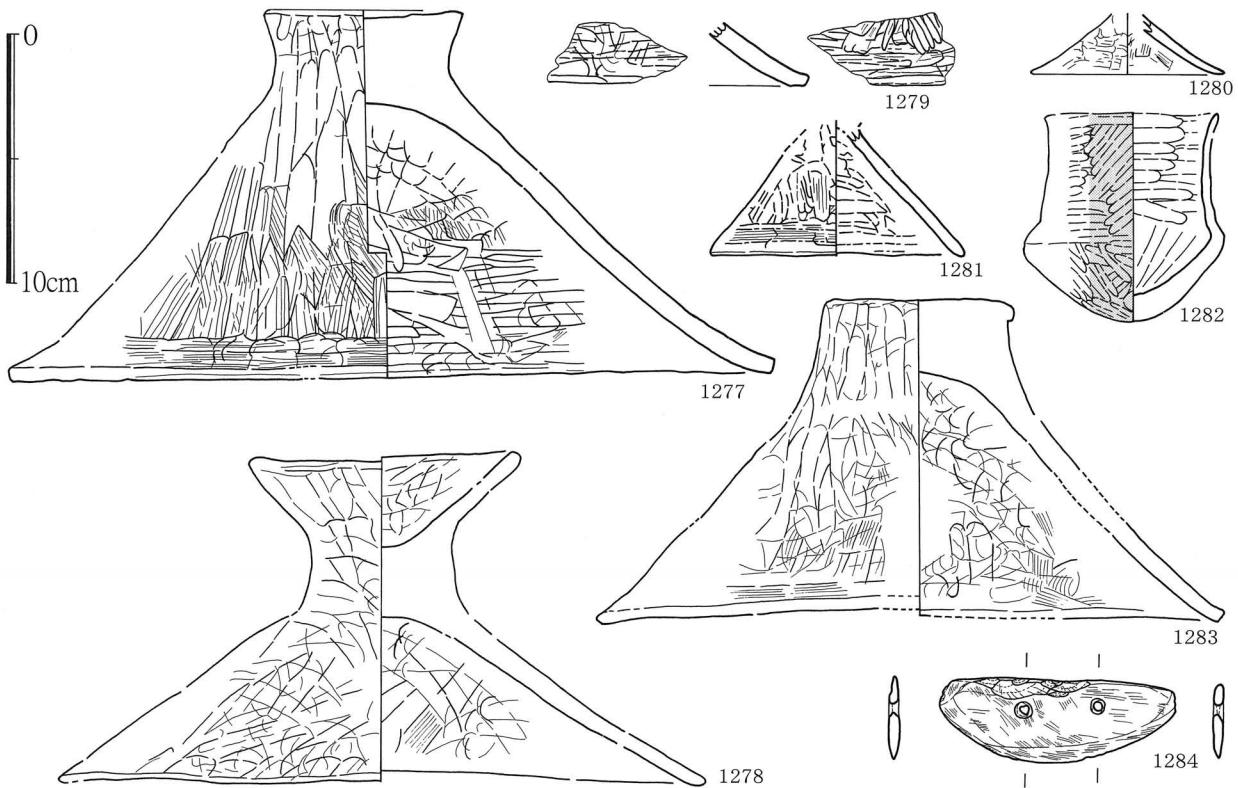




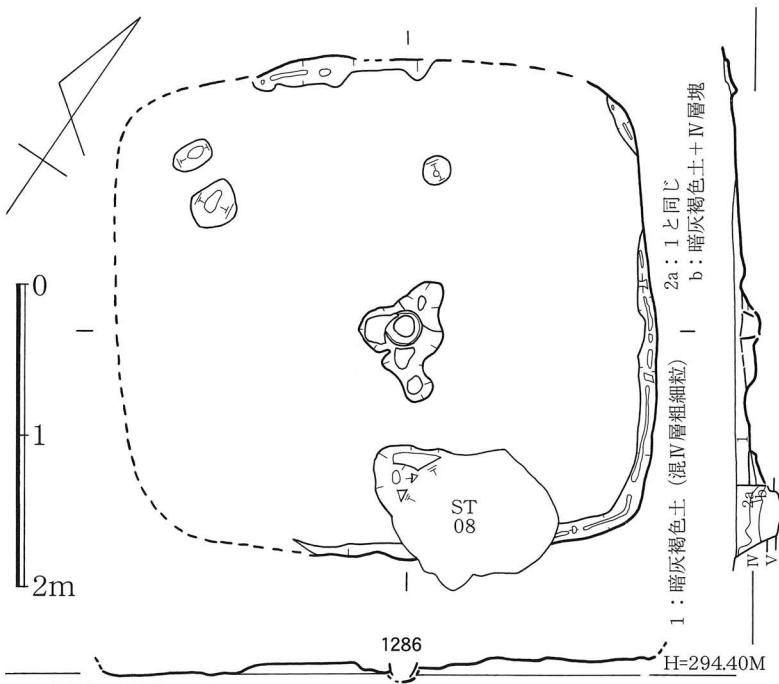
第134図 SA-46 1b層 出土遺物実測図(5)

第135図 S A-46 1b層 出土遺物実測図(6)





第136図 SA-46 1b層 出土遺物実測図(7)



第137図 SA-47 遺構実測図

炉を検出し、中心やや南側のほうが古い。1291は甕の上半分を打ち欠き、新しい炉1289は、甕の口縁～肩部を打ち欠いたもので、頸部片が炉内から出土している。覆土から、土師器片127点、須恵器片3点、炭化種子5点などが出土しているが、図化できたのは僅かである。6世紀後半である。

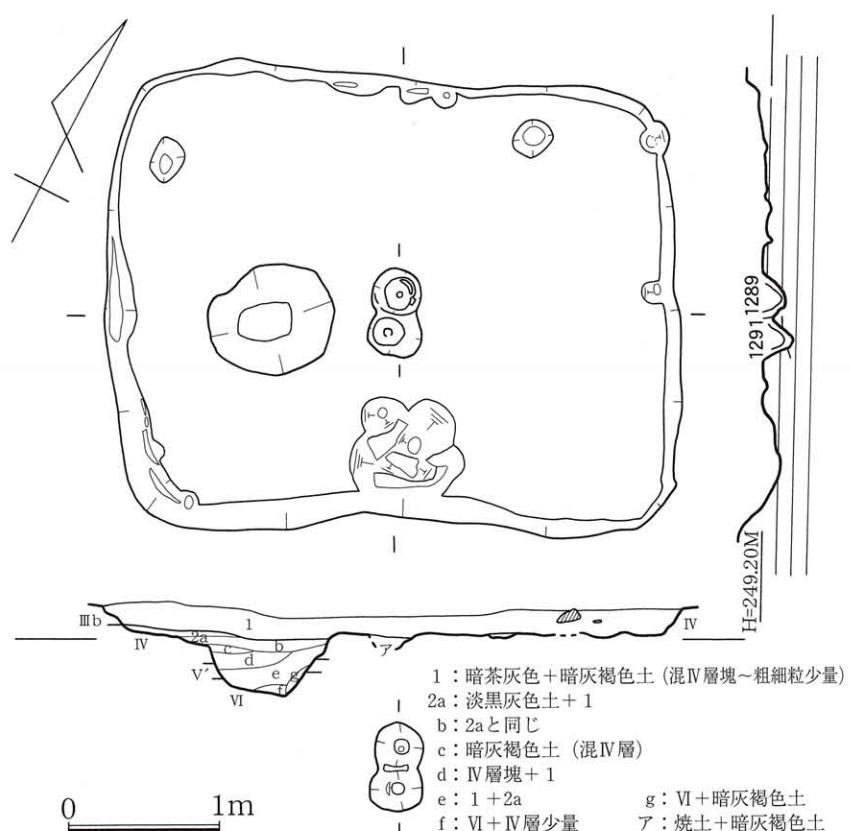
S A-49 (第138図)

48号住居の東1mに位置した、長さ4.2～4.38m・幅3.9～4.22mの隅円方形を呈し、中央を東西

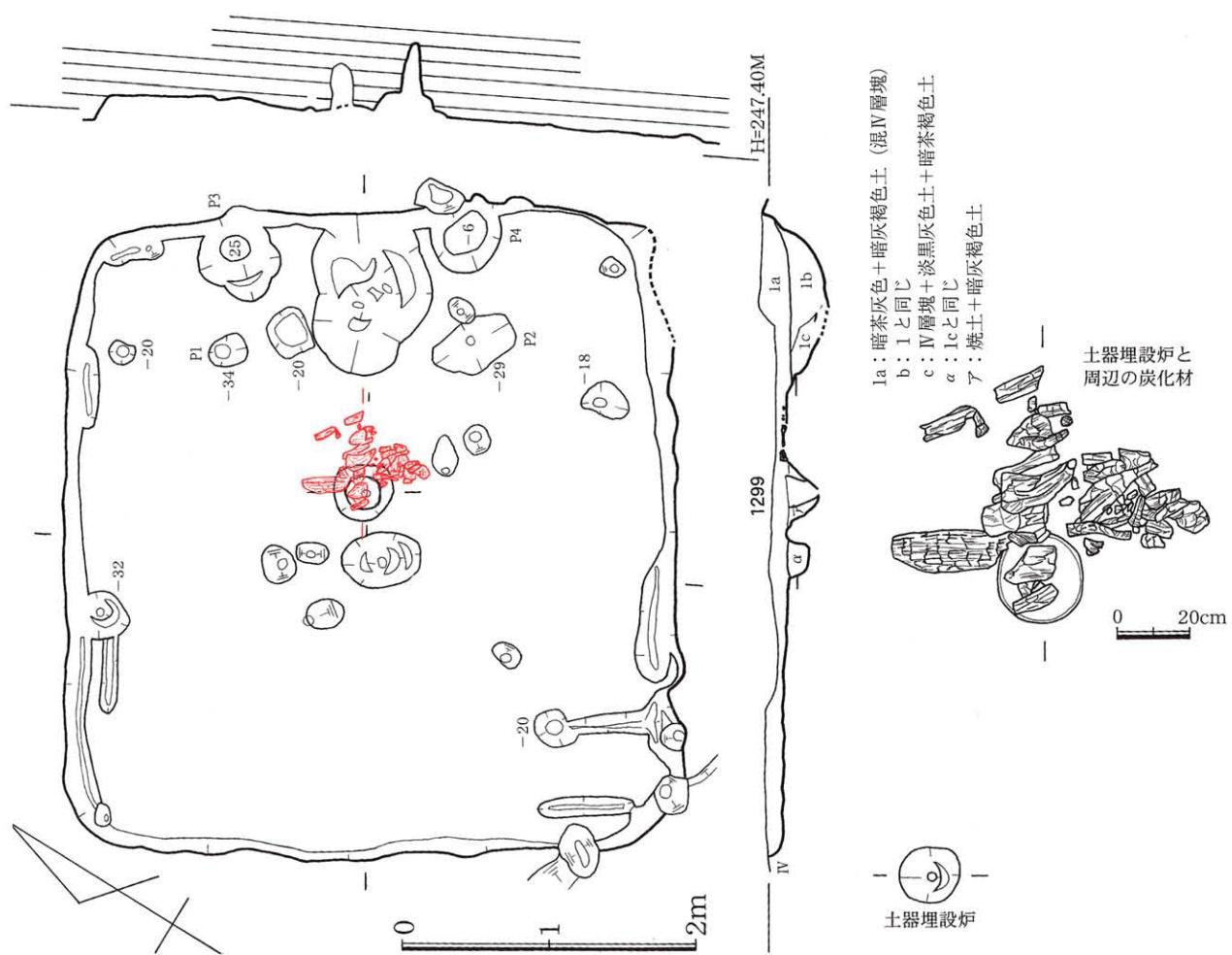
S A-48 (第138図)

47号住居の南2.5mに位置した、長さ3.4～3.83m・幅2.87～3.12mの隅円長方形を呈する。壁溝は、北辺中央部と南隅に僅かにみられる。主柱穴は無いが、北側の直径20～29cm・深さ40～25cmの柱穴と、南東辺中央部の搅乱状掘り込みの最深部は45cmを測り、3基が主柱穴であった可能性がある。覆土は10～18cmの厚さで、貼り床は、土坑状掘り込み～壁までの極く一部である。中央では切り合う土器埋設

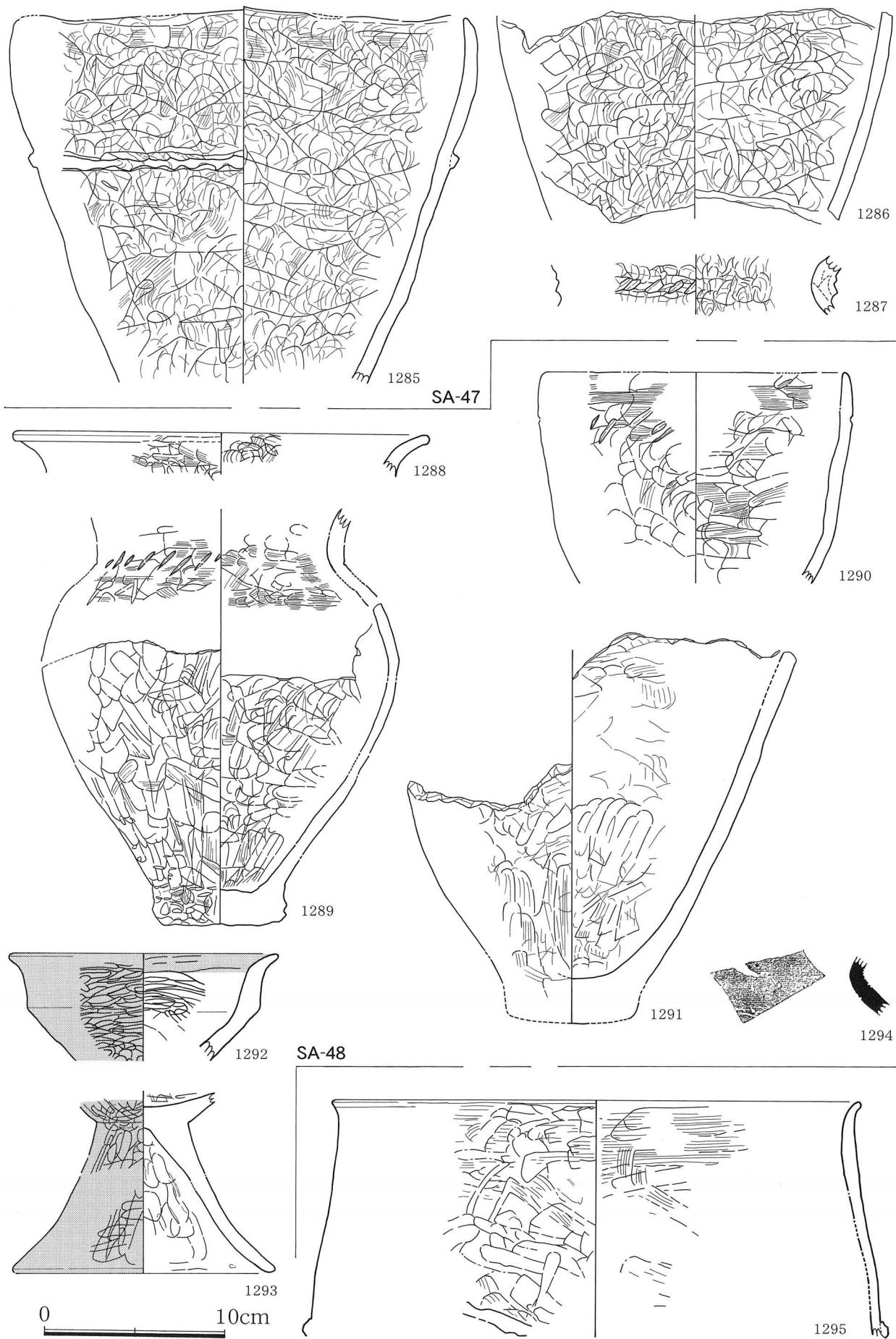
方向の115号溝が切っていた。主柱穴は不明であるが、壁の内側に初期の壁溝を残す。主柱穴は不明であるが、北東壁には中央に長さ1m・幅60~80cm・深さ26cmの土坑があり、両脇に、深さ6~25cmの入口支柱穴と推定される直径40~50cmの掘り込みがある(P3・P4)。その70cm内側(芯々距離)には、初期の出入口支柱穴と推定されるpit(P1・P2)がある。中央やや北東寄りには甌の口縁部を打ち欠いた(1299)土器埋設炉があ



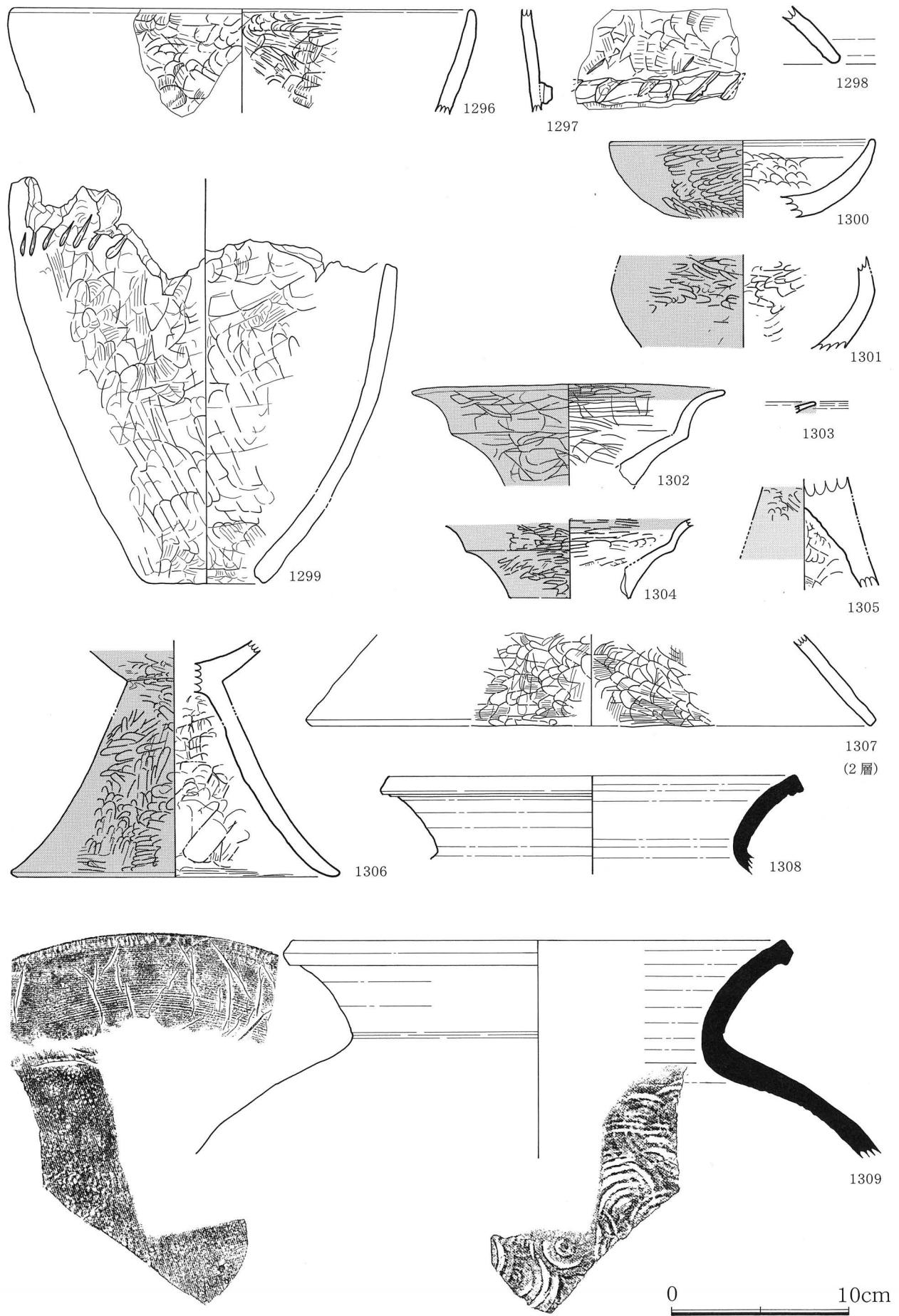
第138図 SA-48 遺構実測図



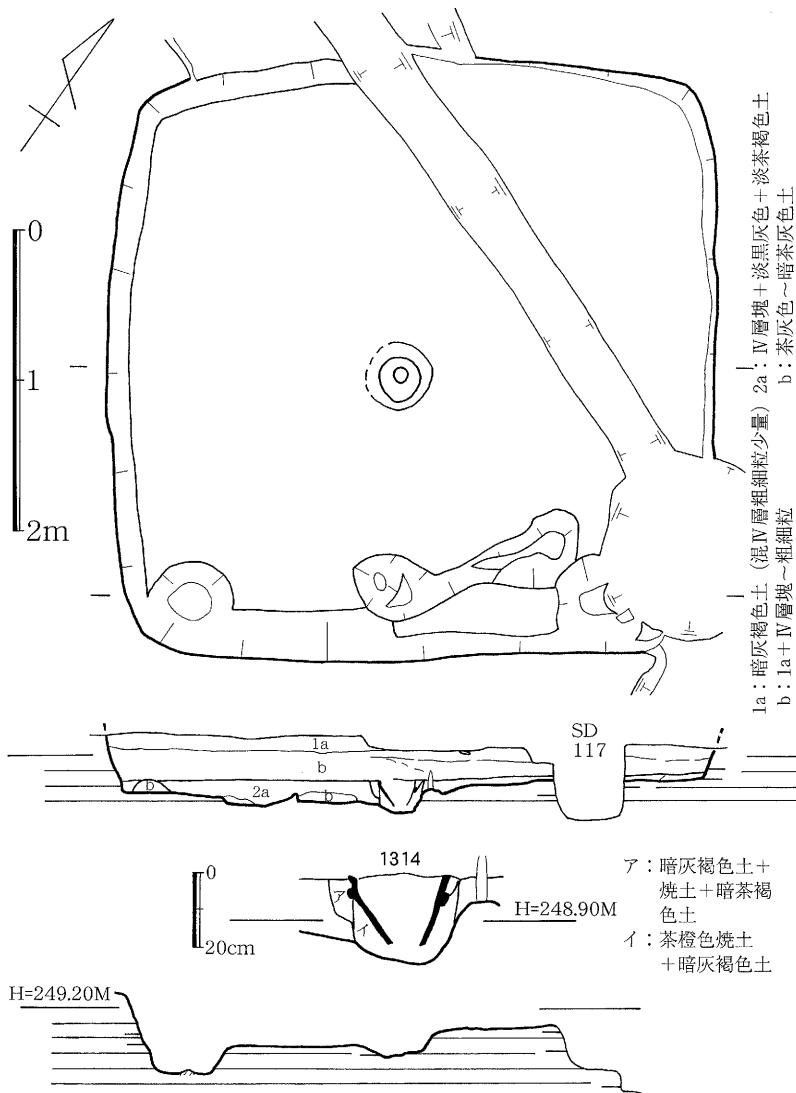
第139図 SA-49 遺構実測図



第140図 SA-47~49 出土遺物実測図(1)



第141図 S A-49 出土遺物実測図(2)



第142図 SA-50 遺構実測図

中央には、甕の口縁部と底部を打ち欠いた土器（1314）を使用した埋設炉があり、外縁～下部には多量の焼土がみられた。壁溝は不明瞭であり、貼り床の厚さは3～7cmである。覆土から、土師器片218点、須恵器片5点のほか、土器片加工円盤1点（1329）等が出土しているが、小片が多い。南西隅で出土した壺（1315）と、北東部で潰れた状態で出土した甕（1311）は原位置の土器と推定される。また、後者は、51号住居から出土した破片と接合している。6世紀後半である。

SA-51 (第145図)

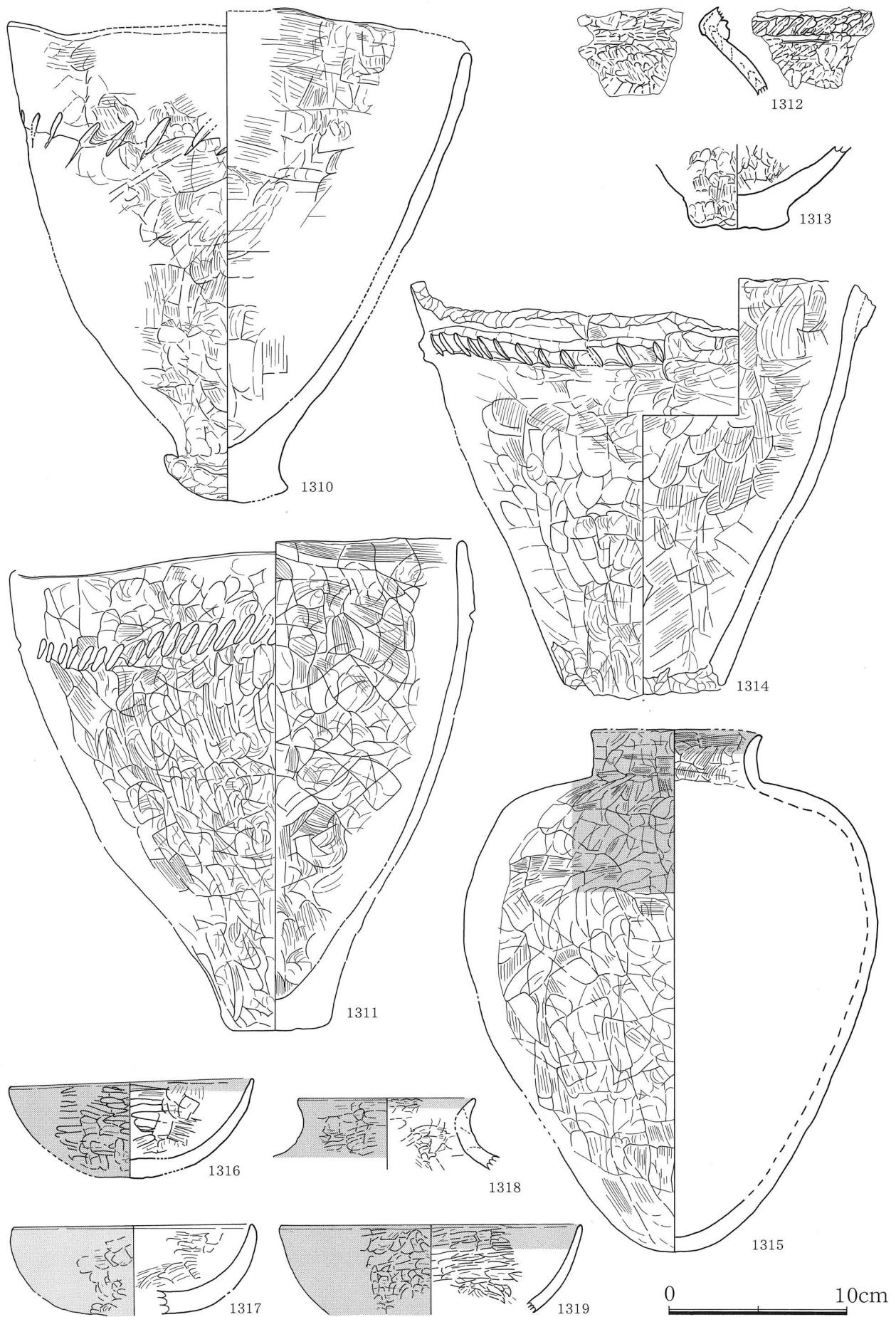
50号住居の5m東に位置した、南北4.9～5.13m・東西4.4～4.78mの隅円長方形を呈し、南北壁が胴張る。最終段階は土器埋設炉と2本柱（P1・P2）であるが、4本柱（P3～P6）の段階、初期の2本柱（P7・P8）の段階が想定される。P1・P2は、直径26～28cm・深さ35・46cm、P3～P6は、直径14～25cm・深さ24・30・32・16cm、P7・P8は、直径14～19cm・深さ15・27cmを測る。覆土は17～24cm遺存するが、10～20cmの削失が推定される。南辺中央部には、長さ79cm・幅70cm・深さ26cmの土坑を有する。南東部の長さ70cm・幅50cm・深さ25cmの土坑底面においては、須恵器の坏身を検出した。土器埋設炉には、上半部を打ち欠いた甕（1337）を使用している。北辺

る。その上面～北東側では、炭化材が纏まって検出された。これらは、炉で使用した燃材と思われる。

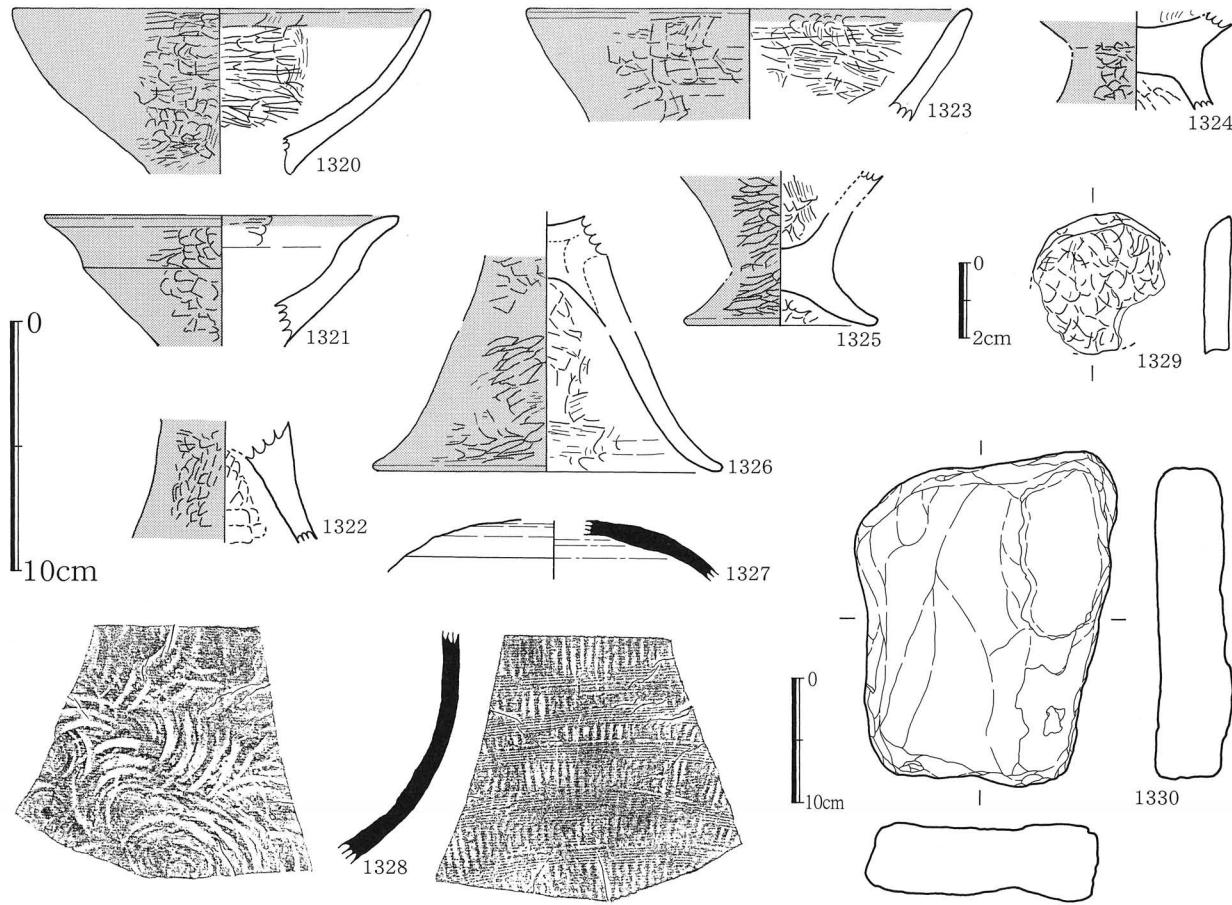
覆土から、土師器片122点と須恵器片9点などが出土したが、図化できたものは少ない。須恵器の甕（1309）は、北52mに位置する102号住居出土破片と接合している。6世紀後半である。また、南西部で8個・北西部で3個の長楕円形河原石が散在していたが、被熱や粘土付着物は無い。

SA-50 (第142図)

49号住居の1.6m南東に位置し、近現代の暗渠排水路に切られた、1辺3.7～3.8m・中央の長さ4.04～4.12mの隅円方形を呈する住居である。覆土は30cm遺存し、北東側は20cm程の削失が推定される。主柱穴は無いが、南端隅と南東辺中央に深さ20・10cmの土坑がある。



第143図 SA-50 出土遺物実測図(1)



第144図 S A-50 出土遺物実測図(2)

中央西寄りと、西辺北半分・南辺中央部は壁溝が途切れるが、出入口は不明である。

覆土から、土師器片479点、須恵器片17点、鉄器3点等が出土している。1338は、北東端で台石(1371)等と一緒に出土した長胴の壺である。1370は、全長20.9cmの大型の鉄鎌である。主として6世紀後半である。

南の柱穴(P2)の柱痕の直径は11cmで焼土混じりであり、1343・1350・1357・1361・1363の土器片が被熱していたことは、廃絶時に幾許かの火災があったことが想定される。

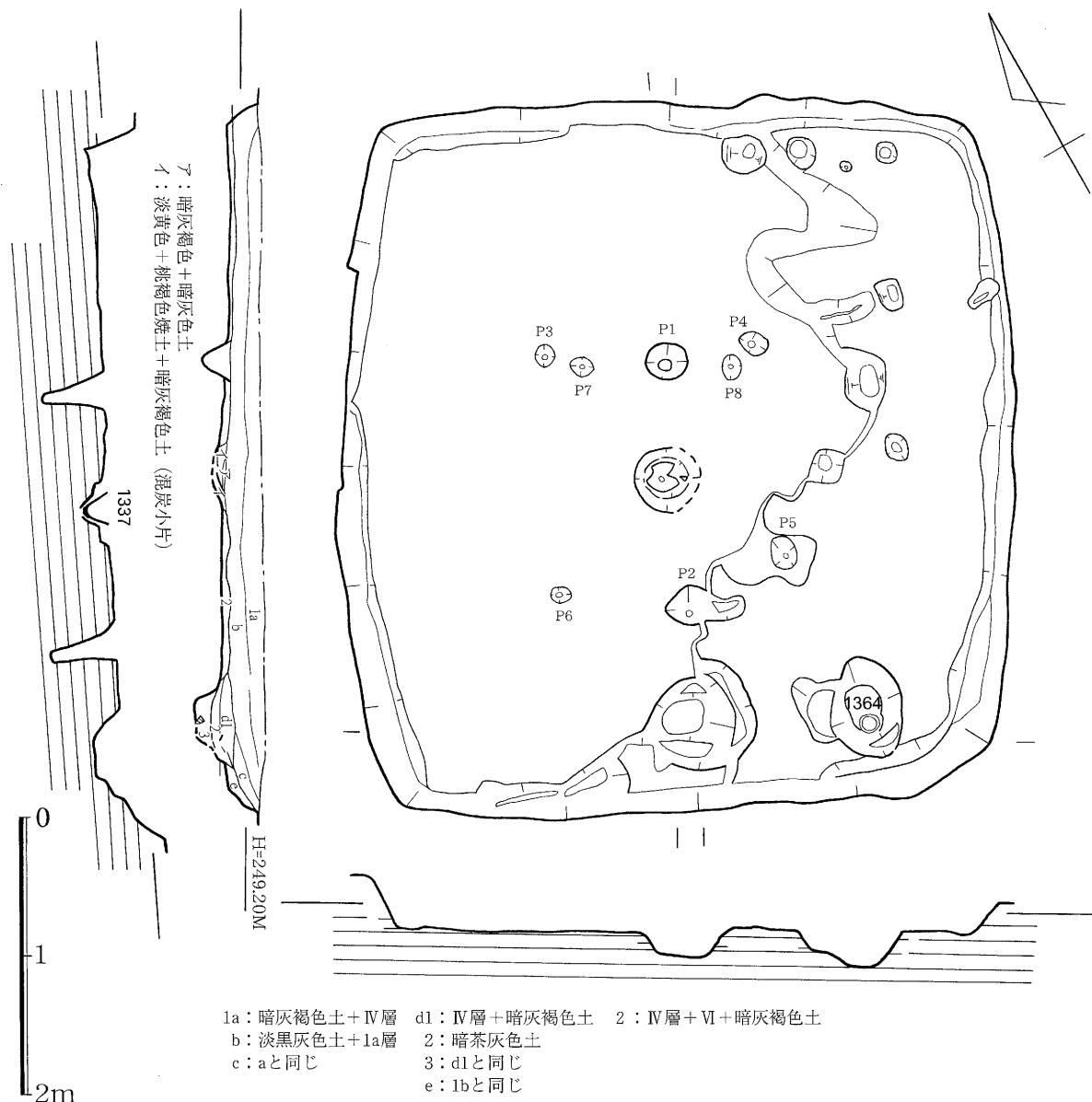
S A-52 (第146図)

51号住居の北5mに位置した、長さ5.08m・幅4.2~4.4m程の隅円長方形に壁溝が遺存している。東辺中央部には、直径1.1m程の略円形の土坑状掘り込みがあり、出入口であった可能性もある。削失は20cm程であり、当初から浅い掘り込みであったようである。主柱穴は4本で、直径35~57cm・深さ52~57cmを測る。東側柱穴の中間には、甌の下半部(1373)を使用した土器埋設炉があり、内部には焼土が充填していた。

覆土から、土師器片69点、須恵器1点等が出土しているが、小片が多い。西北部では長さ10cm程の河原石10個程が散在していたが、焼土や炭化物・粘土等は伴わない。6世紀後半と思われる。

S A-53 (第149図)

III区検出分(北西部)とXIV区で検出した182号住居が同一のものと推定されることから机上で合

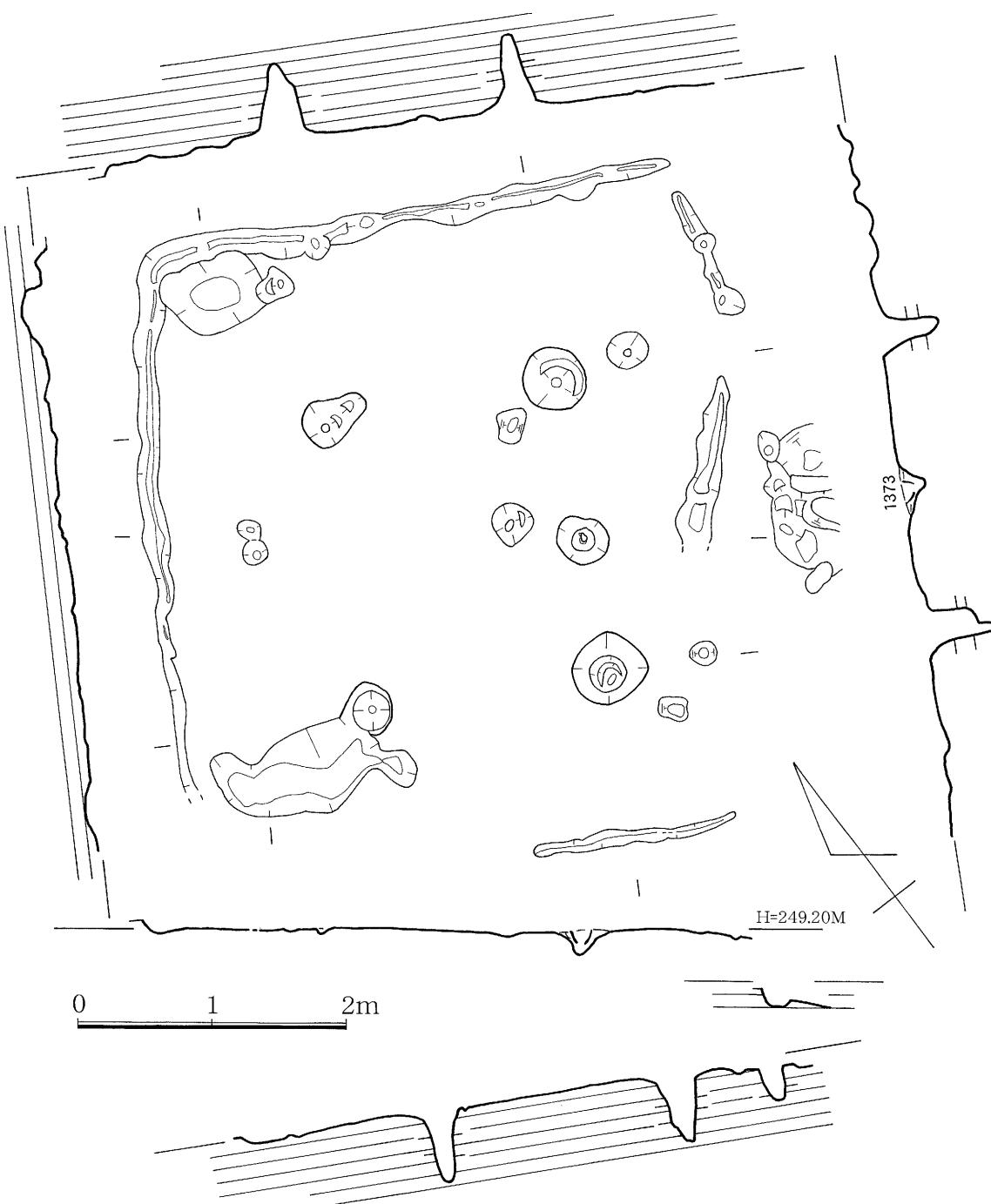


第145図 SA-51 遺構実測図

成し、182号を欠番とした。旧一筆境に位置することと、天地返しにより、10~20cmの削失が想定される。現状では、東西3.6m・南北3.0mの隅円長方形を呈する。主柱穴は無いが、中央に、口縁部~肩部を打ち欠いた甕（1379）を使用した土器埋設炉がある。壁溝はほぼ全周し、西~北~東壁は拡張された様子が窺える。土器埋設炉構築以前にも、掘り込み炉の痕跡（工層）がある。西の壁溝内では、長さ54.6cmの鉄刀（1383）が出土した。このほか、覆土から土師器片62点が出土しているが、図化できるものは少ない。5世紀中葉か。

SA-54 (第150図)

52号住居の北西 6 m に位置した、中軸3.5mの隅円方形を呈し、南西壁と南東壁がやや胴張る。覆土は13~20cmが遺存するが、20cm程の削失が推定される。主柱穴は無く、中央には、甕の胴部下半~底部を打ち欠いた（1384）土器埋設炉がある。その東には、長径90cm・幅54~74cm・深さ22cmの土坑がある。当土坑の外側のみ壁溝が途切ることから、出入口が想定される。貼り床は、凹地



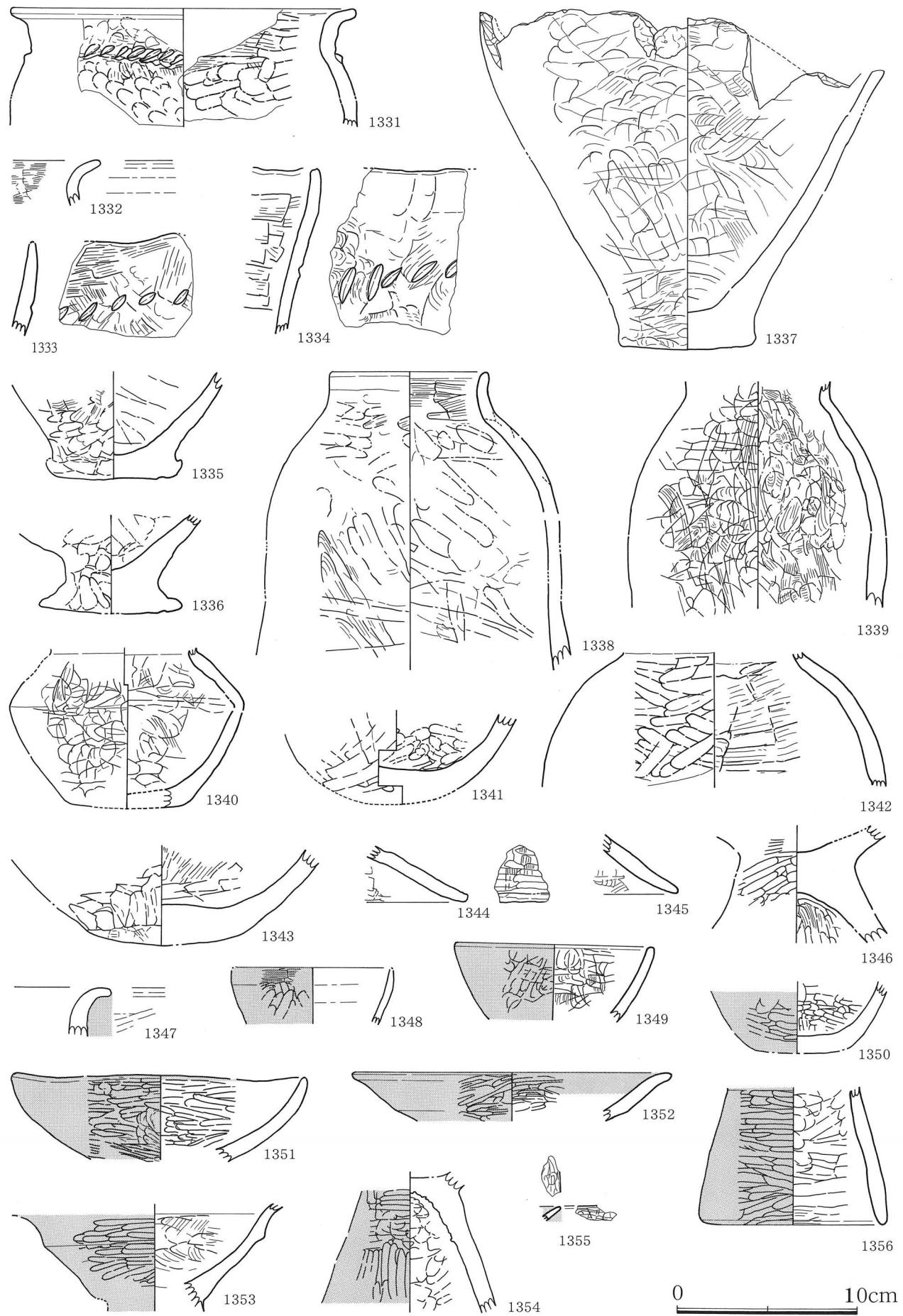
第146図 SA-52 遺構実測図

に少量施されている。

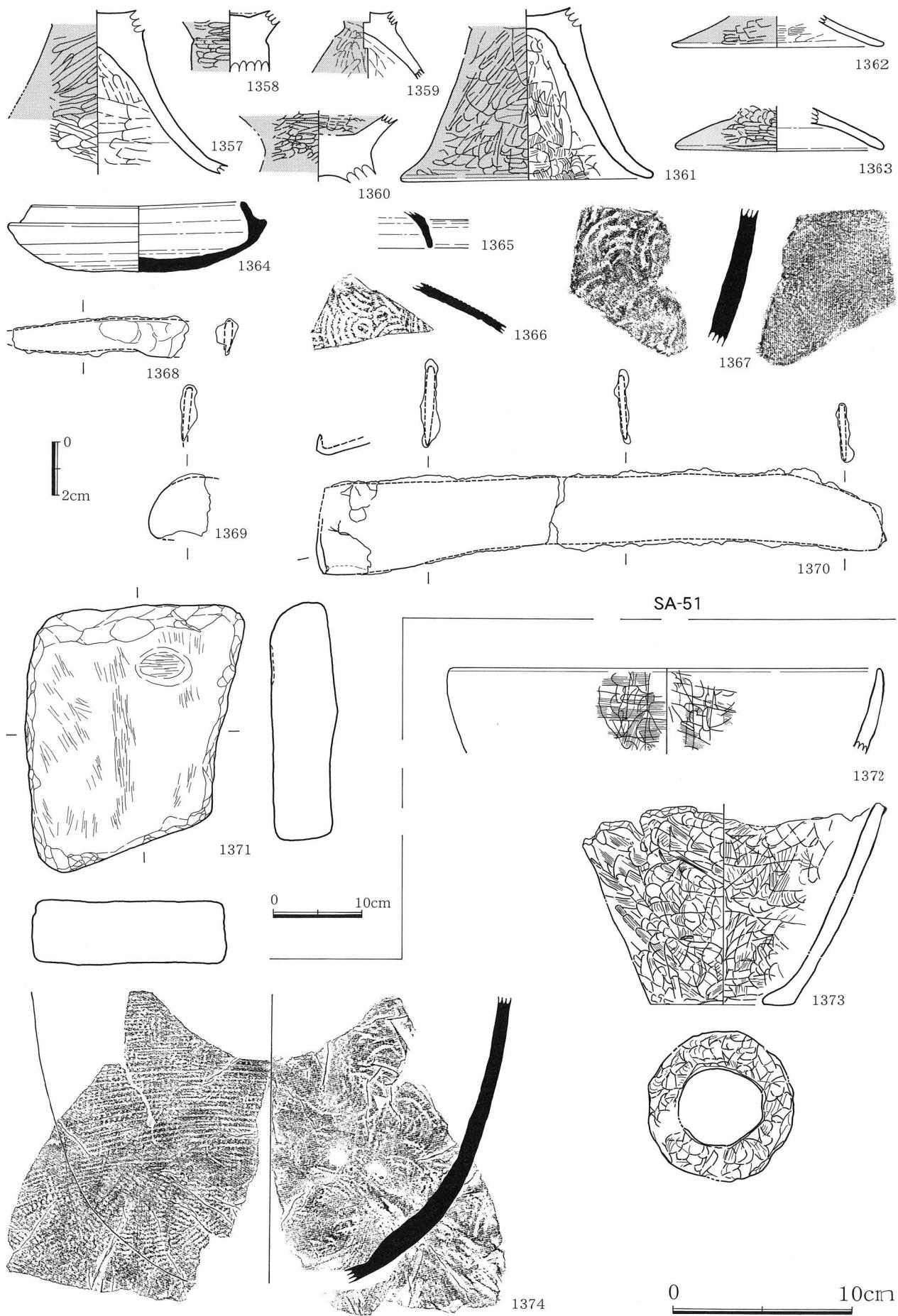
覆土から、土師器片102点、須恵器片7点が出土しているが、図化できるものは少ない。1388の壊身は、62号住居出土片と接合している。台石（1392）は、遺跡内出土例としては最長のもので、長さ56cmを測る。1391は、土製品の剥落片の可能性がある器種不明品である。6世紀後半である。

SA-55（第151図）

45号住居の北東13mに位置した、長さ2.45~2.60m・幅2.2~2.38mの南東辺が短い隅円方形を呈する。覆土は36~39cm遺存するが、10cm程の削失が推定される。北隅のみ壁溝を検出し、主柱穴と炉は未確認である。貼り床は、3~4cmの厚さで施される。南東3mには、06・07号地下式横穴



第147図 S A-51 出土遺物実測図(1)

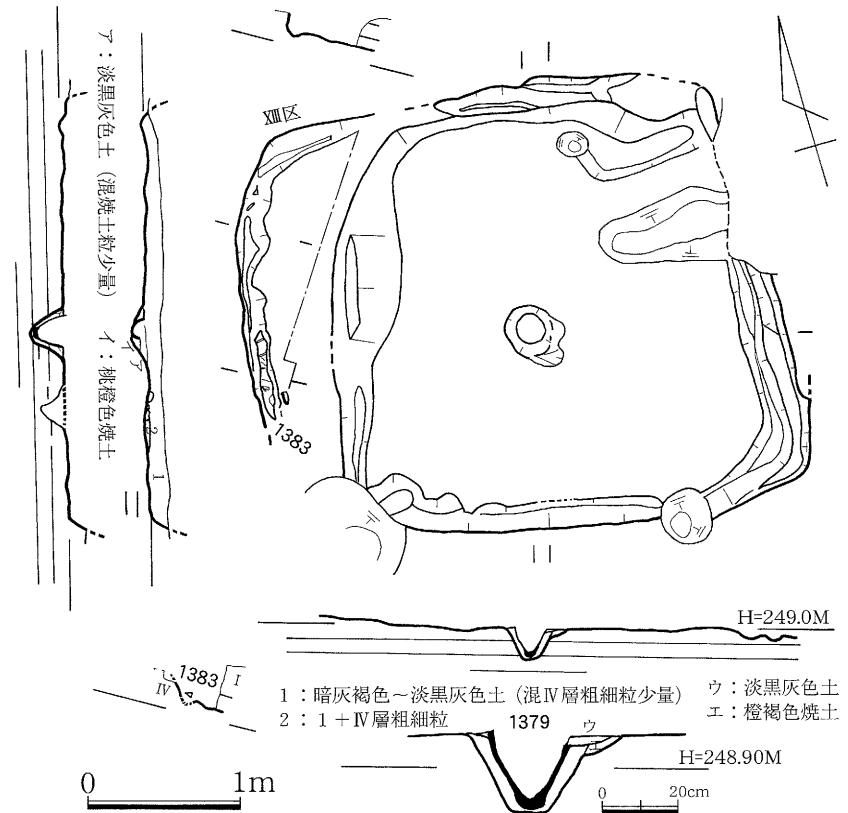


第148図 SA-51 出土遺物実測図(2), SA-52 出土遺物実測図

墓がある。覆土から、土師器片73点が出土したが、図化できたものは少ない。5世紀前半～中葉か。

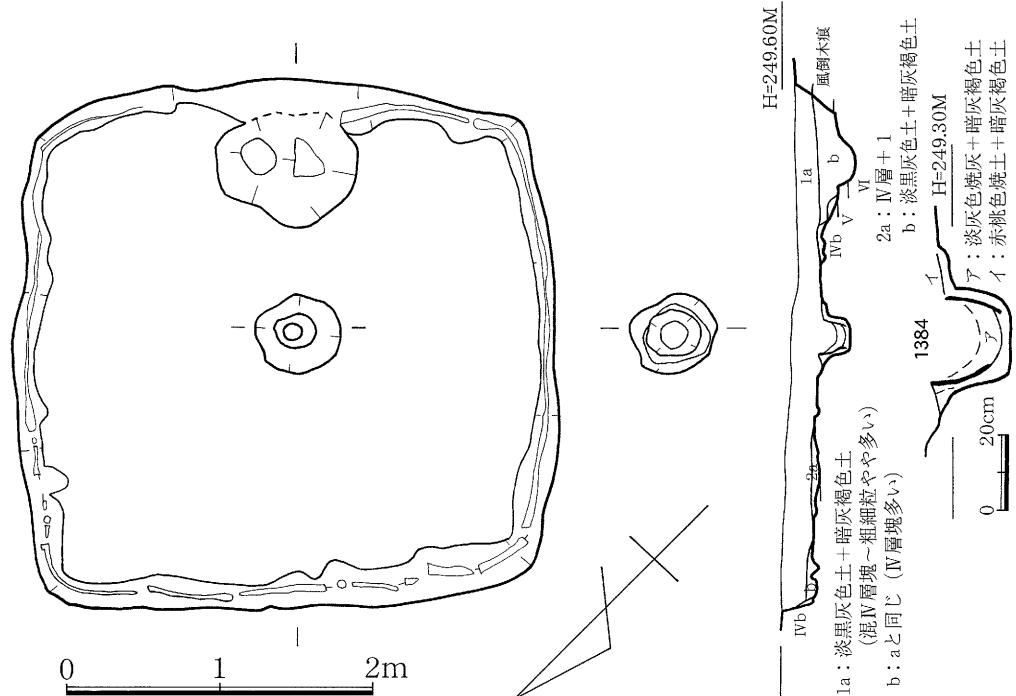
S A-56 (第152図)

55号住居の4.6m北東に位置した、長さ4.46～4.52m・幅3.83～4.12mの隅円方形を呈する住居である。覆土は14～24cm遺存し、土層的には20cm程の削失が推定される。主柱穴は2本(P1・2)で、直径30～36cm・深さ50cmを測る。2本柱の間は、幅54～64cm・深さ10cm(その下に貼り床2～3cm厚)を測る掘り

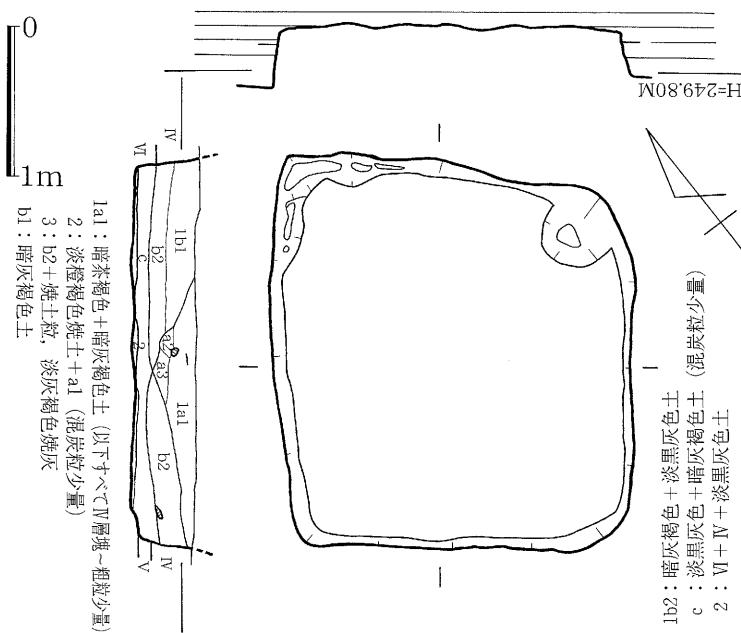


第149図 S A-53 遺構実測図

込み炉になっている。底面には更に深さ33cmのpit(P3)を検出したが、機能は不明瞭である。南東辺中央部と北東辺中央部には土坑がある。P1内には壺の底部(1407)が入っていたが、住居廃絶時の地鎮か偶然かは不明である。覆土から、土師器片591点、須恵器片1点のほか炭化種子3点が出土している。6世紀後半である。



第150図 S A-54 遺構実測図

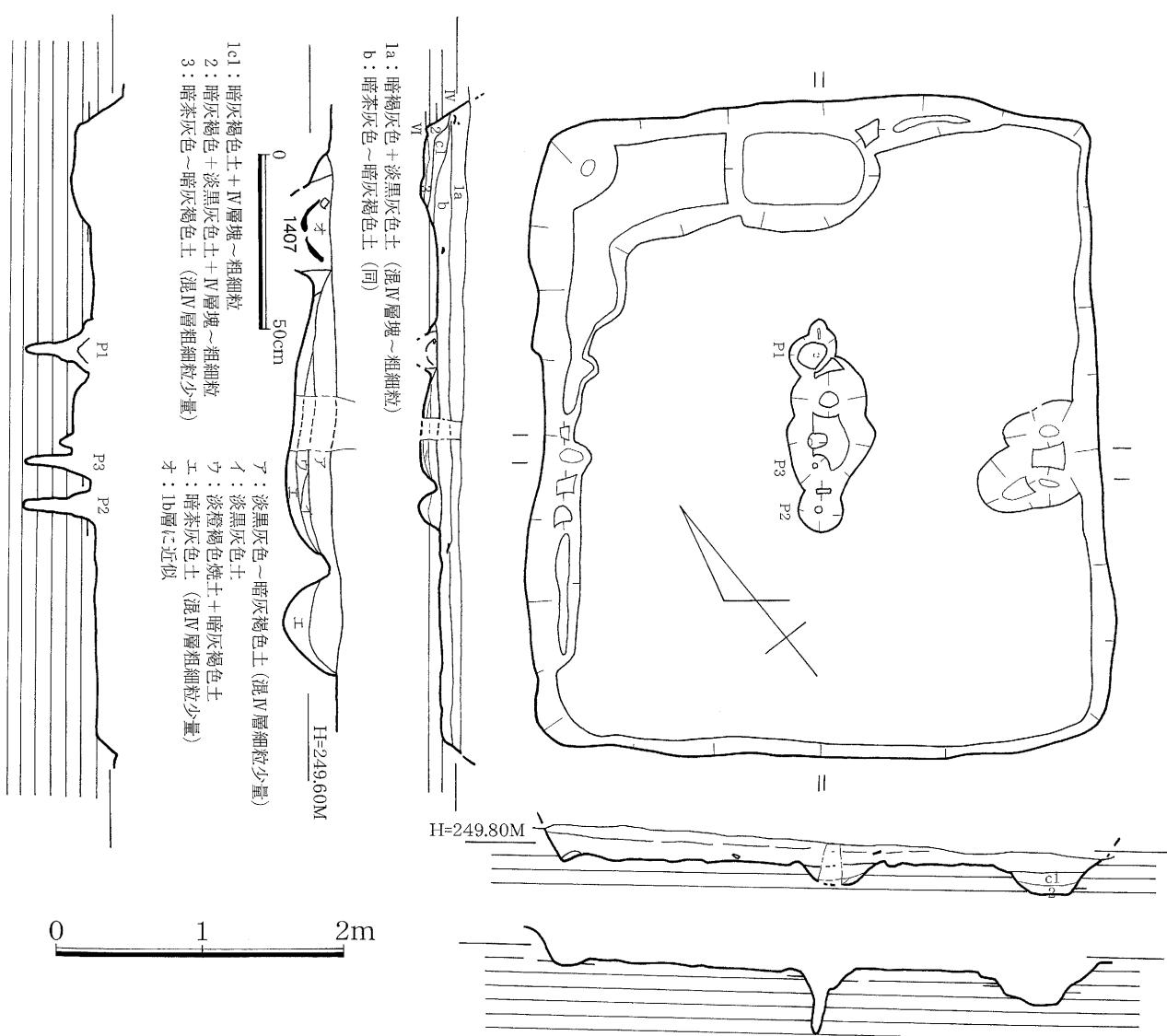


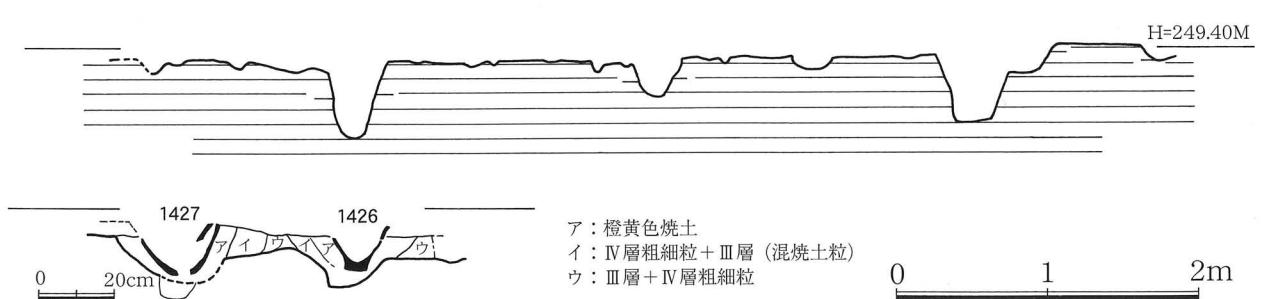
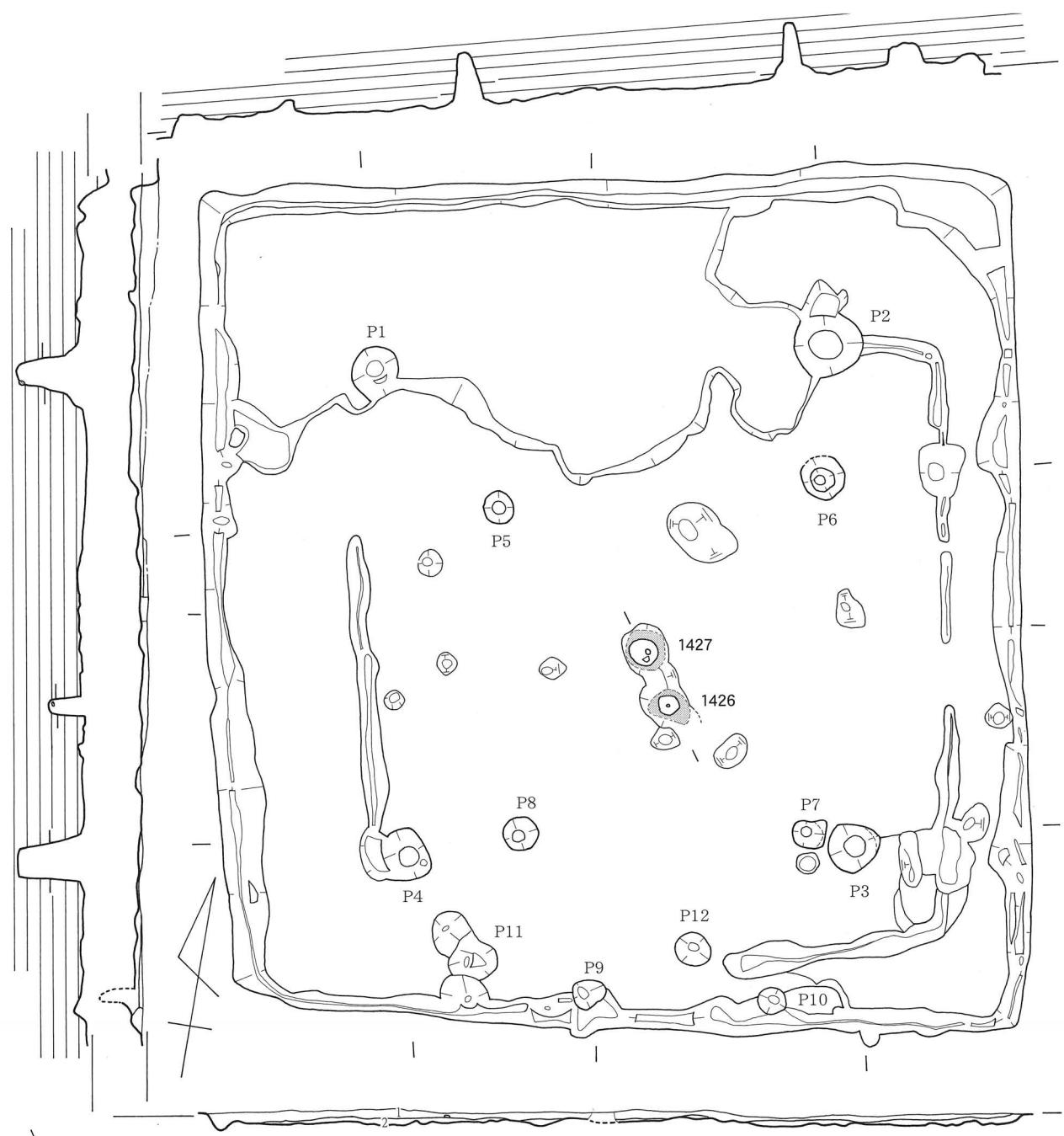
第151図 SA-55 遺構実測図

SA-57 (第153図)

58号住居を切る、東西6.2~6.38m・南北6.5~6.84mの方形を呈する住居である。覆土は北縁1m程が厚さ14cm程遺存し、土層的には20~25cmの削失が推定される。

主柱穴は、直径34~53cm・深さ40~50cmの4本柱（P1~4）である。60cm~1m内側には初期の壁溝が遺存し、主柱穴も4本（P5~8）であったことがわかる。初期の掘形の規模は南北5m・東西4.7mで、





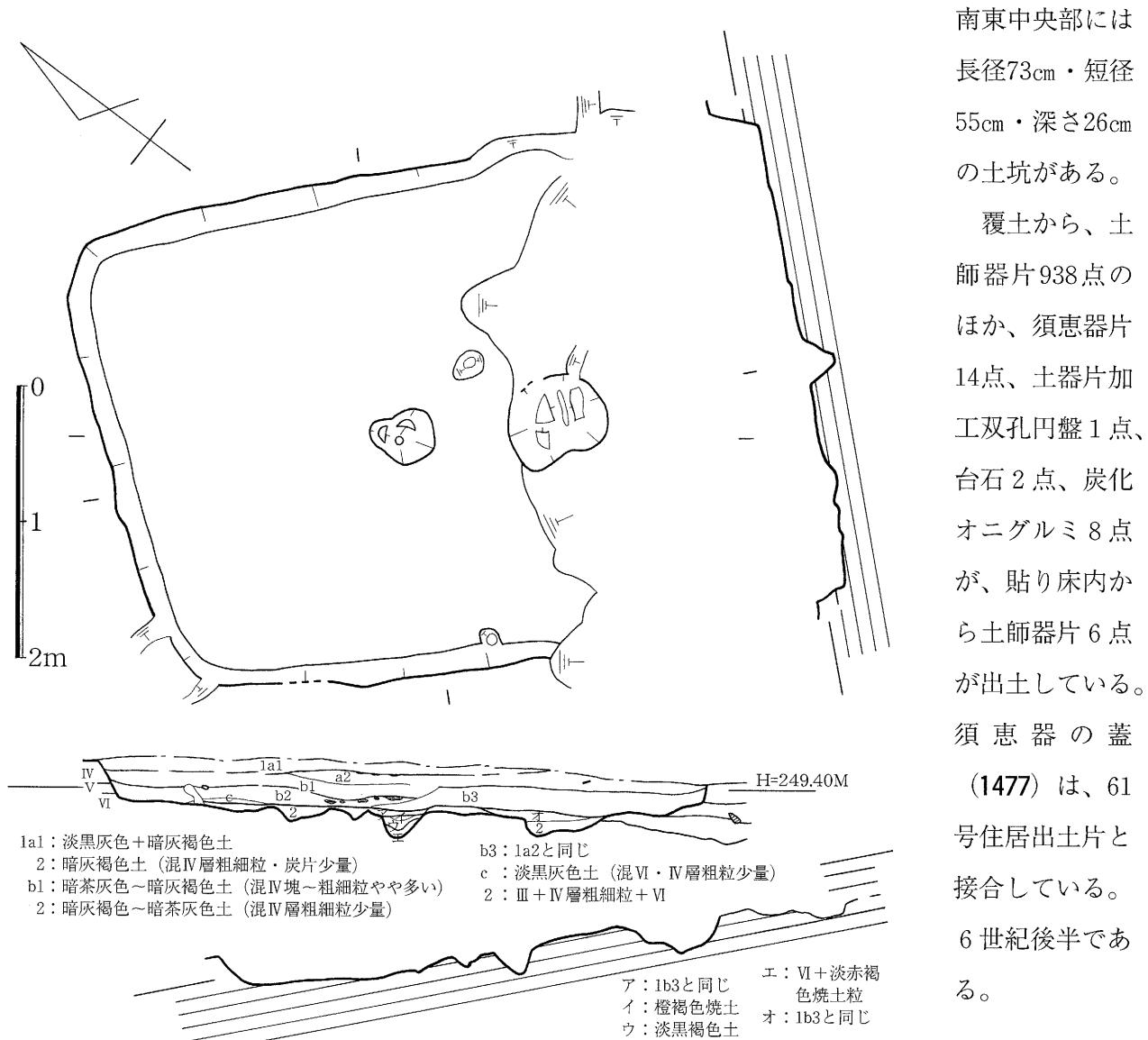
第153図 SA-57 遺構実測図

主柱穴は、直径23~33cm・深さ35~48cmを測る。貼り床は、全面に2~8cm施される。中央やや南東寄りには土器埋設炉が2基検出された。平断面では新旧不明であるが、遺構全体での位置関係から、北側の方が新しいと推定される。住居の南辺中央には、出入口の支柱と推定される新旧の小pitがある。P 9・10は深さ20~22cmを測り、P 11・12は深さ13・25cmを測り、後者のほうが新段階であろうと思われる。土器埋設炉の新段階には、口縁部を打ち欠いた甌（1427）が使用され、古段階では口縁部を打ち欠いた鉢型の甌（1426）が使用されている。

覆土から、土師器片331点のほか須恵器片7点、用途不明鉄製品1点（鉗か）などが、貼り床内から土師器片46点が出土している。6世紀後半である。

S A-58 (第154図)

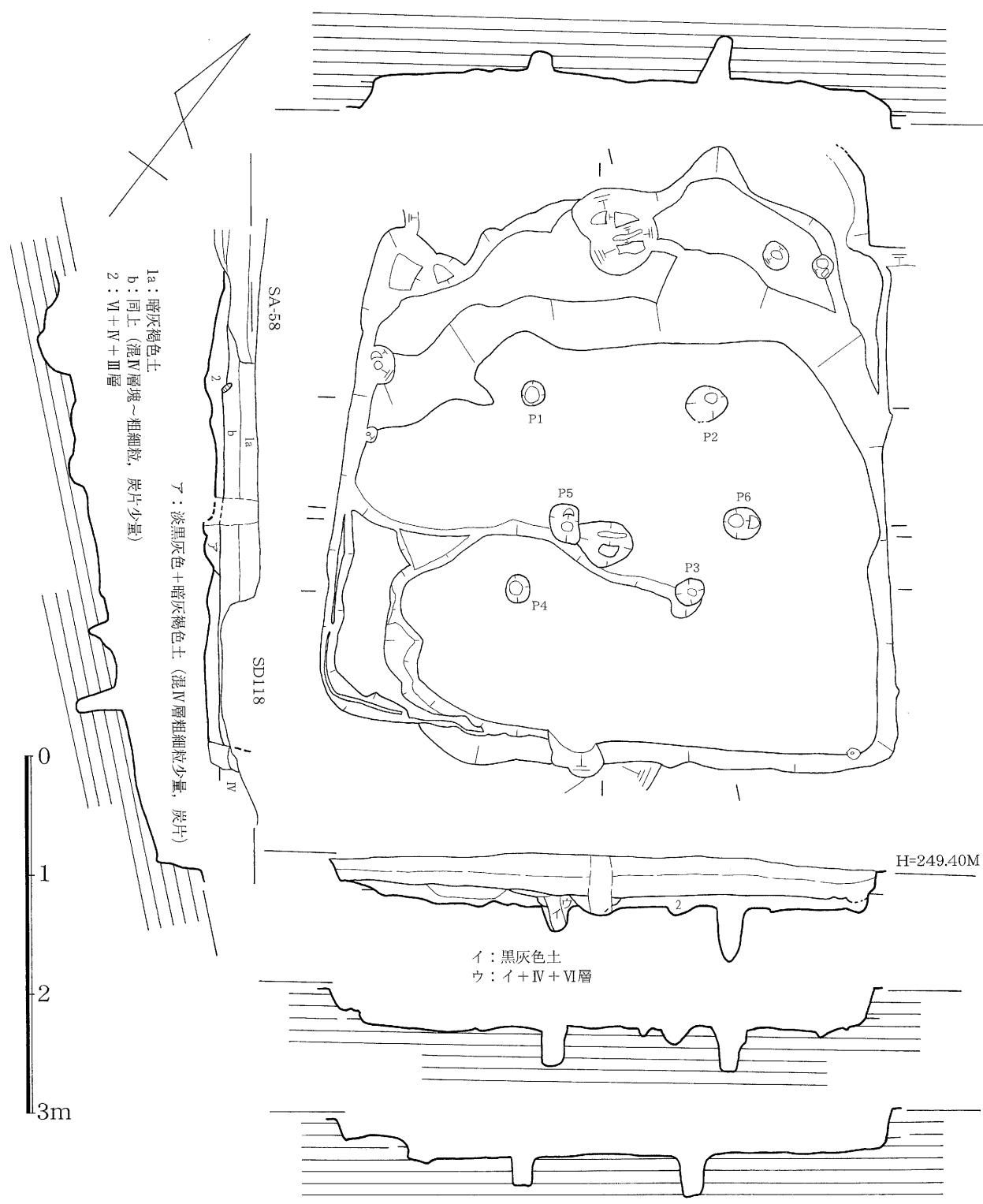
57号住居に切られ、59号住居を切る、長さ4.4m・幅3.4~3.65mの隅円長方形を呈する住居である。覆土は30cm程遺存するが、15cm程の削失が推定される。壁溝と主柱穴は無いが、中央に直径40cm・深さ19cmの掘り込み炉がある。覆土のイ・エ層は焼土であり、少なくとも2時期使用されている。



第154図 S A-58 遺構実測図

S A -59 (第155図)

北辺部を58号住居に切られる住居であるが、2層の掘り込み部の計測から、長さ5.2m前後と推定され、幅3.7~4.75mの、北辺が短い隅円長方形を呈する。覆土は23~34cm遺存するが、南東部は118号溝に切られる。土層的には、15cm程の削失が推定される。主柱穴は4本 (P 1 ~ 4) で、直径20~35cm・深さ18~36cmを測る。中央には、長径50cm・短径30cm・深さ15cmの掘り込み炉を伴



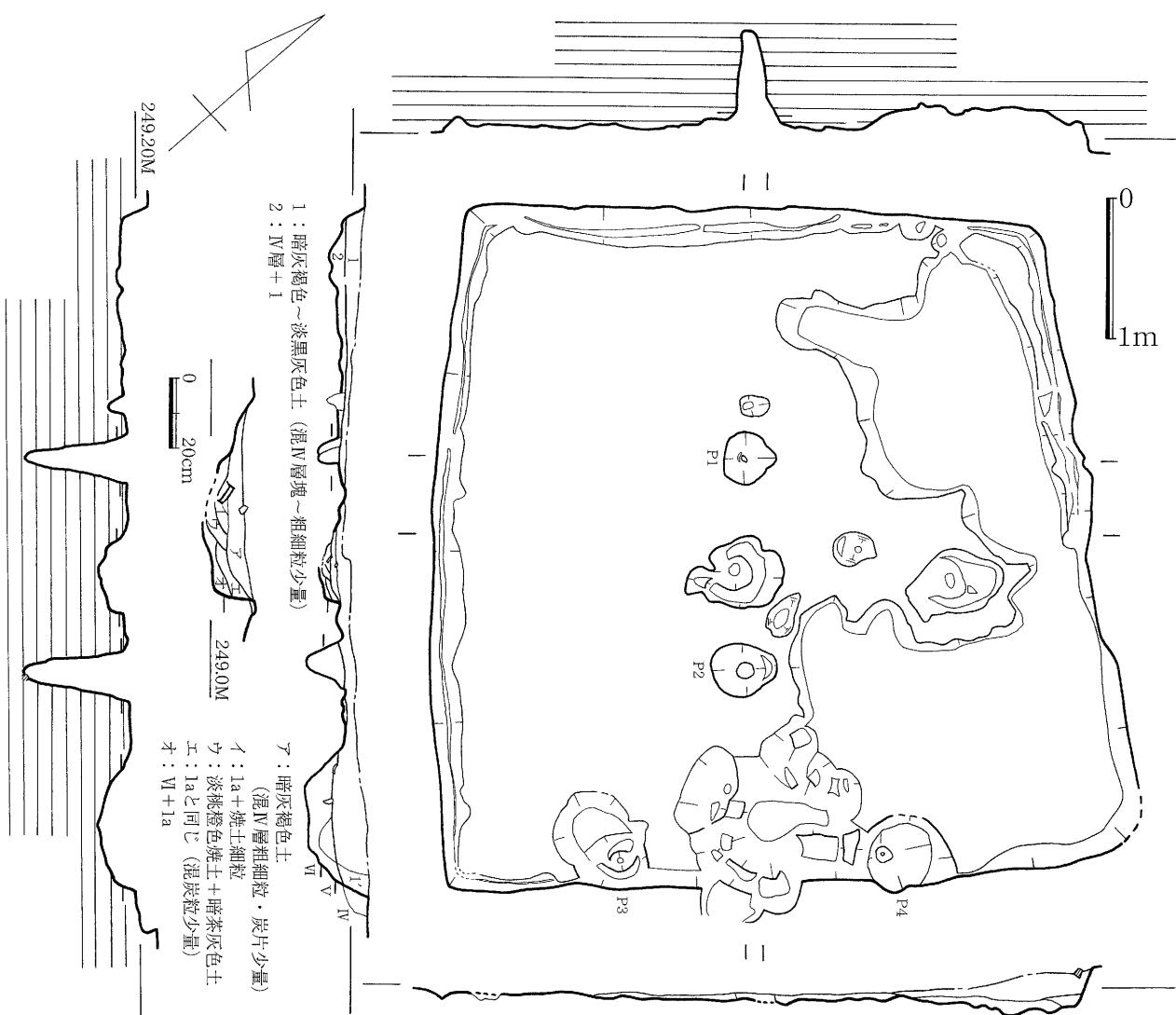
第155図 S A -59 遺構実測図

う。初期の掘削は、南北4.4m・東西4.1m程と推定され、主柱穴は2本（P5・6）で、直径22~30cm・深さ34~38cmを測る。覆土から、土師器片211点、須恵器片2点のほかガラス小玉1点（1495）が、2層から土師器片29点が出土したが、図化できたものは少ない。6世紀後半である。

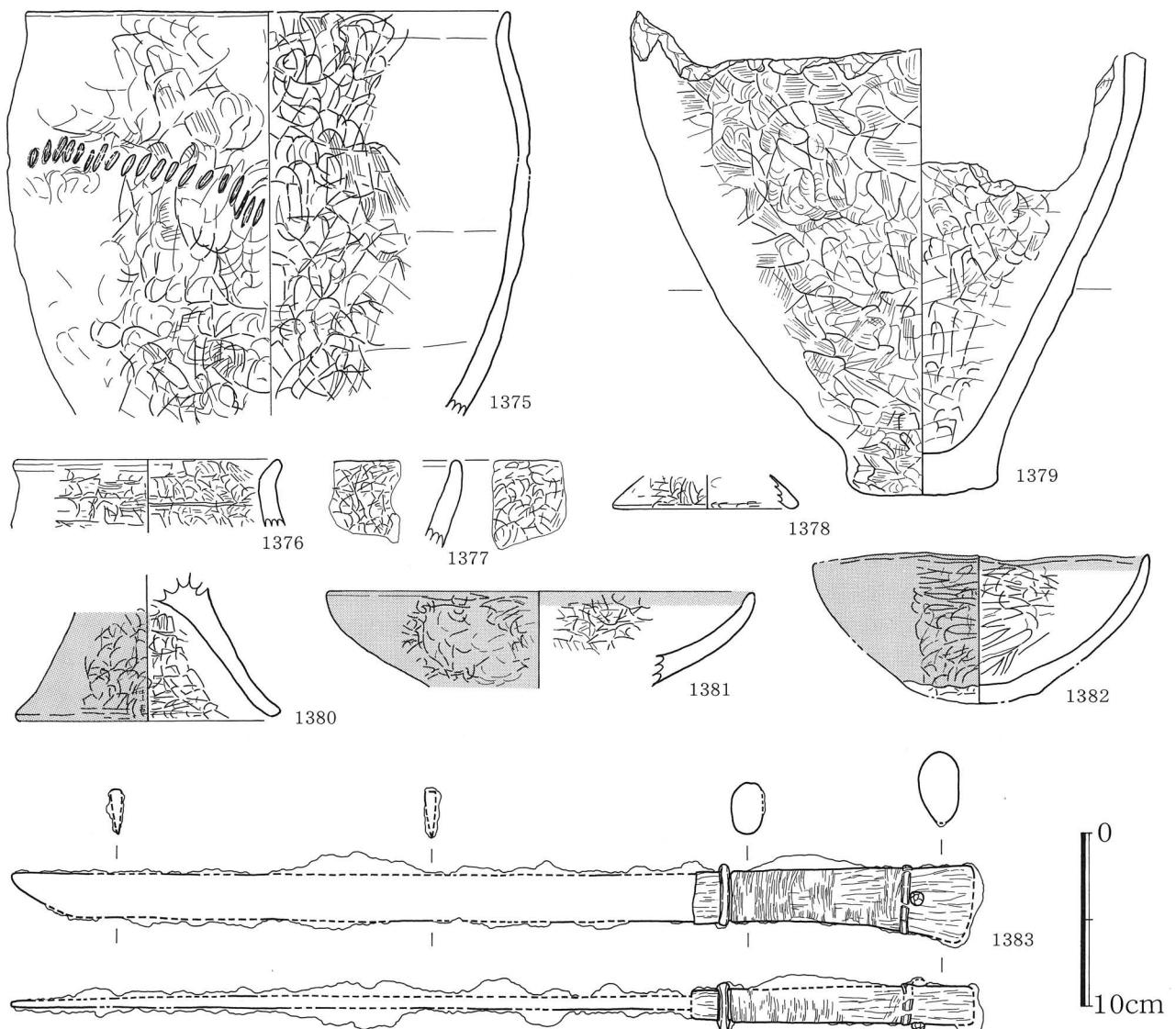
S A-60 (第156図)

57号住居と1m・59号住居の80cm南に位置した、長さ4.58~4.88m・幅4.05~4.84mの台形を呈する。覆土は、118号溝の搅乱と後世の削失により2~18cmが遺存し、土層的には、15~20cmの削失が推定される。主柱穴は2本（P1・2）で、直径30~38cm・深さ70・73cmを測る。中央には、直径54cm・深さ20cmの不整円形の掘り込み炉があり、3時期（ア~ウ層）の使用が推定される。東南壁中央には、長径1.26m・短径0.9m・深さ0.2mの土坑がある。その両脇には、直径50~60cm・深さ29cm（P3）・21cm（P4）の柱穴があり、壁溝も途切れていることから、出入口の支柱穴であったと推定される。貼り床は、3~10cm程施される。

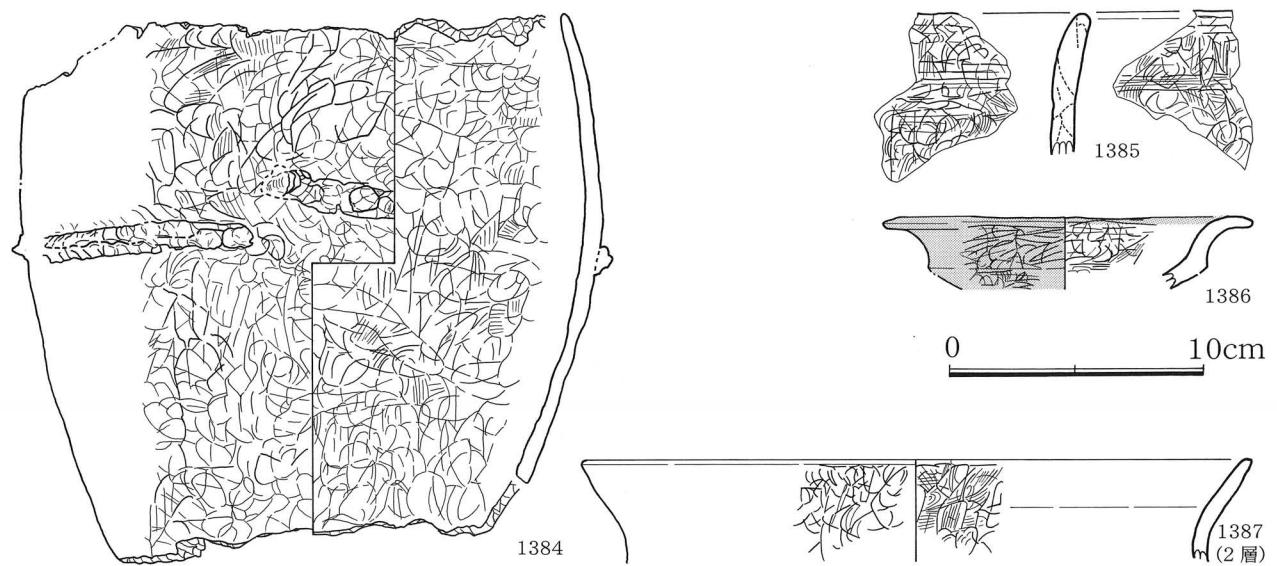
覆土から、土師器片206点、須恵器片1点のほか、鉄器片・鉄床石・砥石が各1点、2層から土師器片6点、須恵器片1点（1513）が出土している。鉄器（1510）は、鉄鎌の鋒片に別物の鉄片が



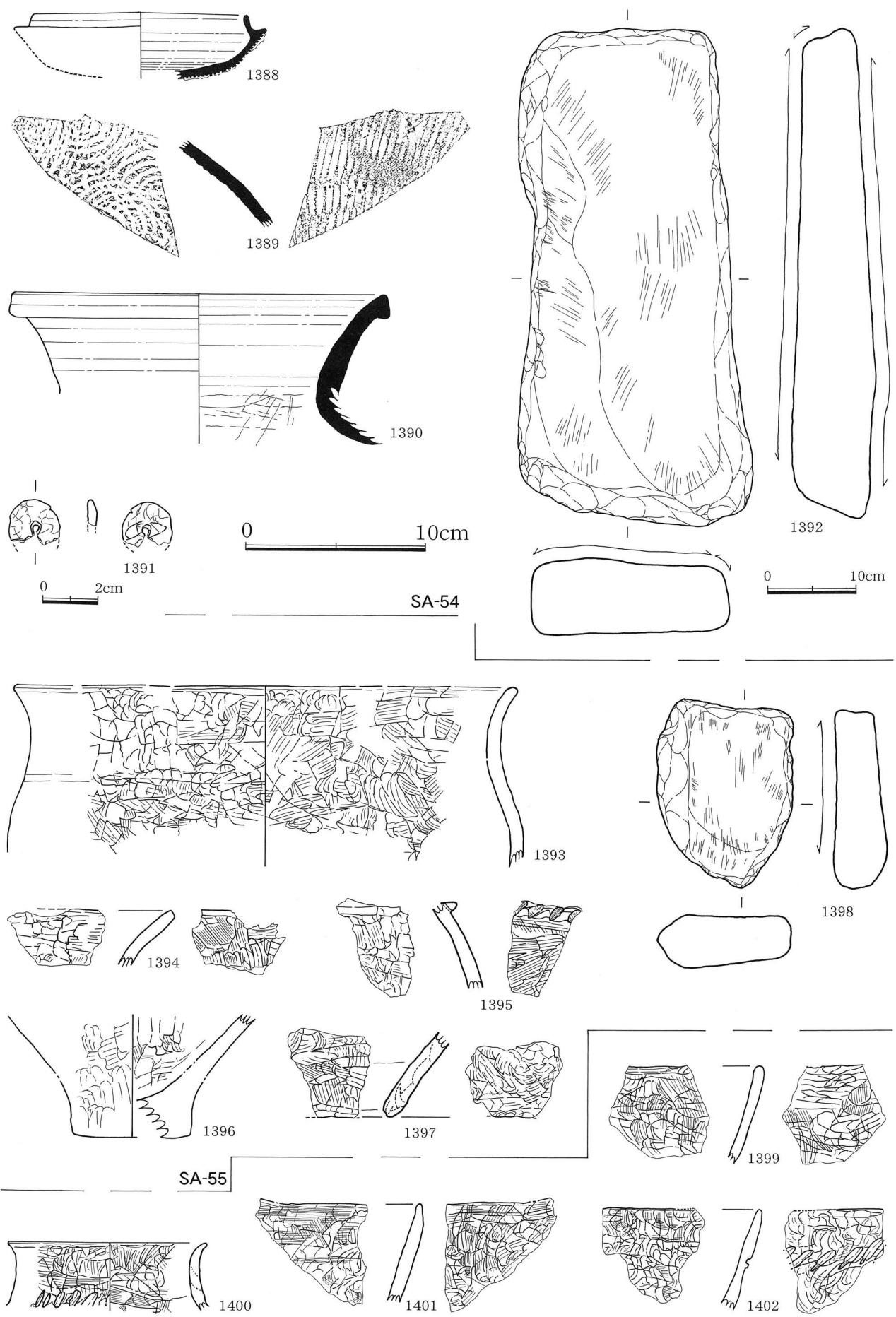
第156図 S A-60 遺構実測図



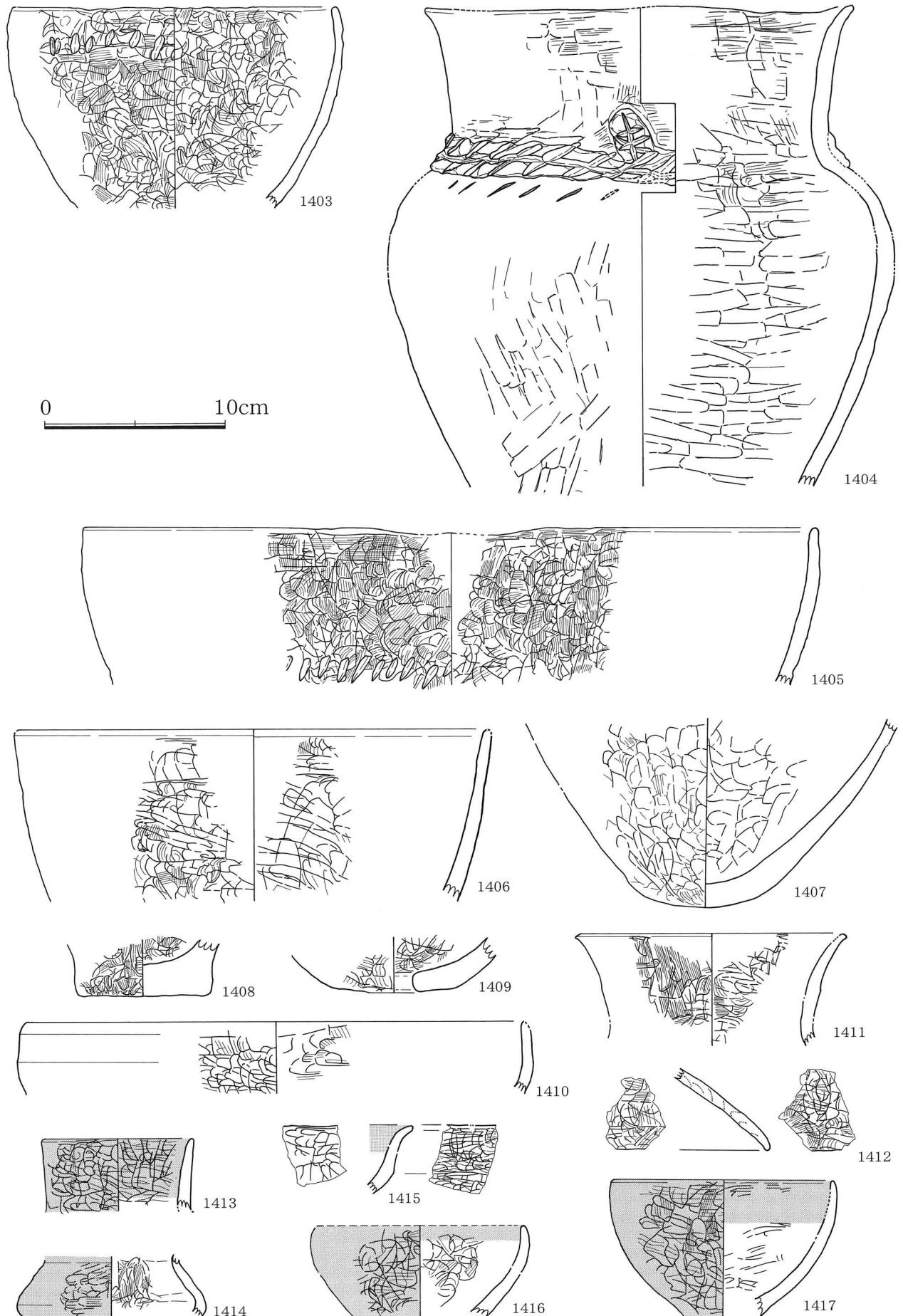
SA-53



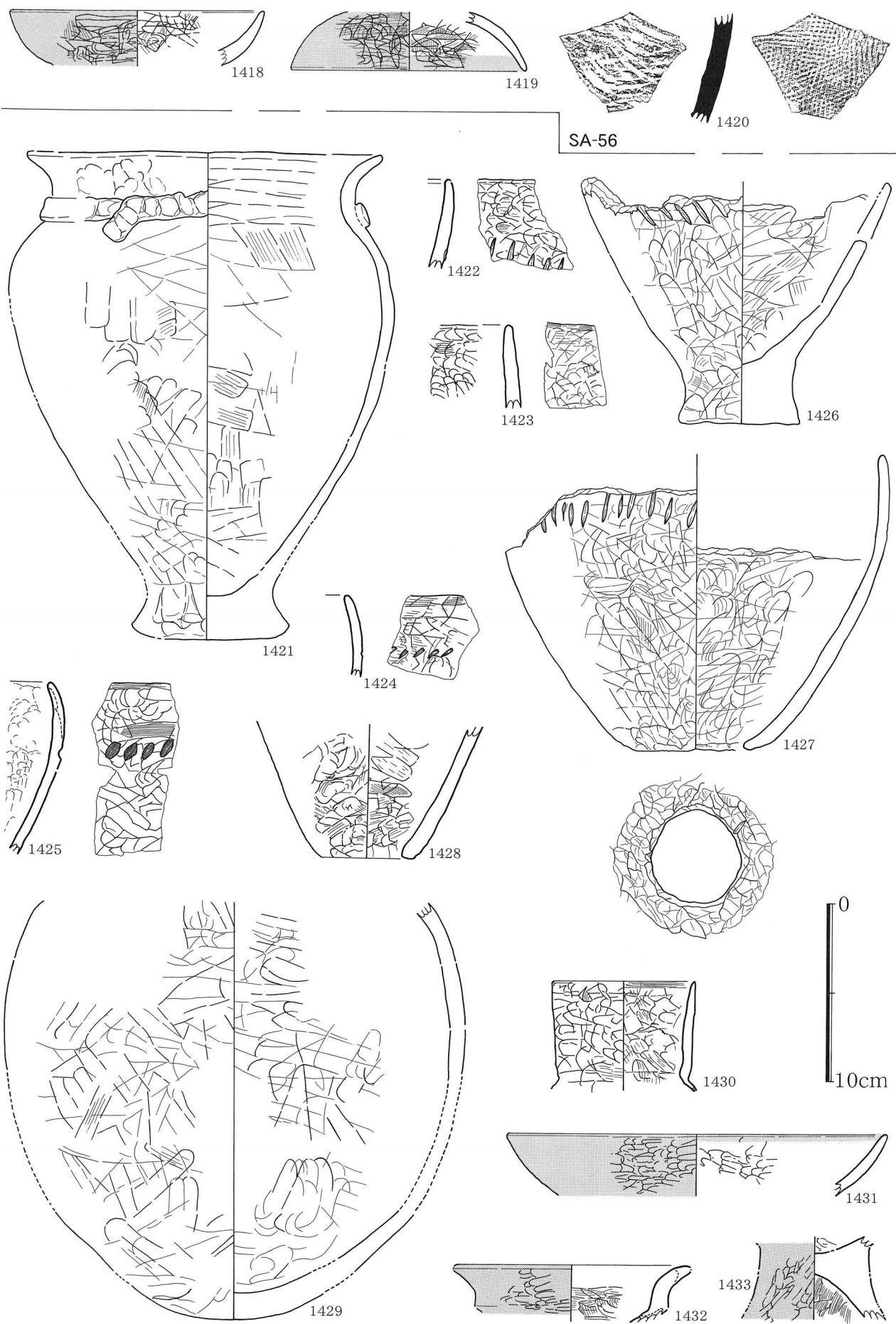
第157図 S A-53-54 出土遺物実測図(1)



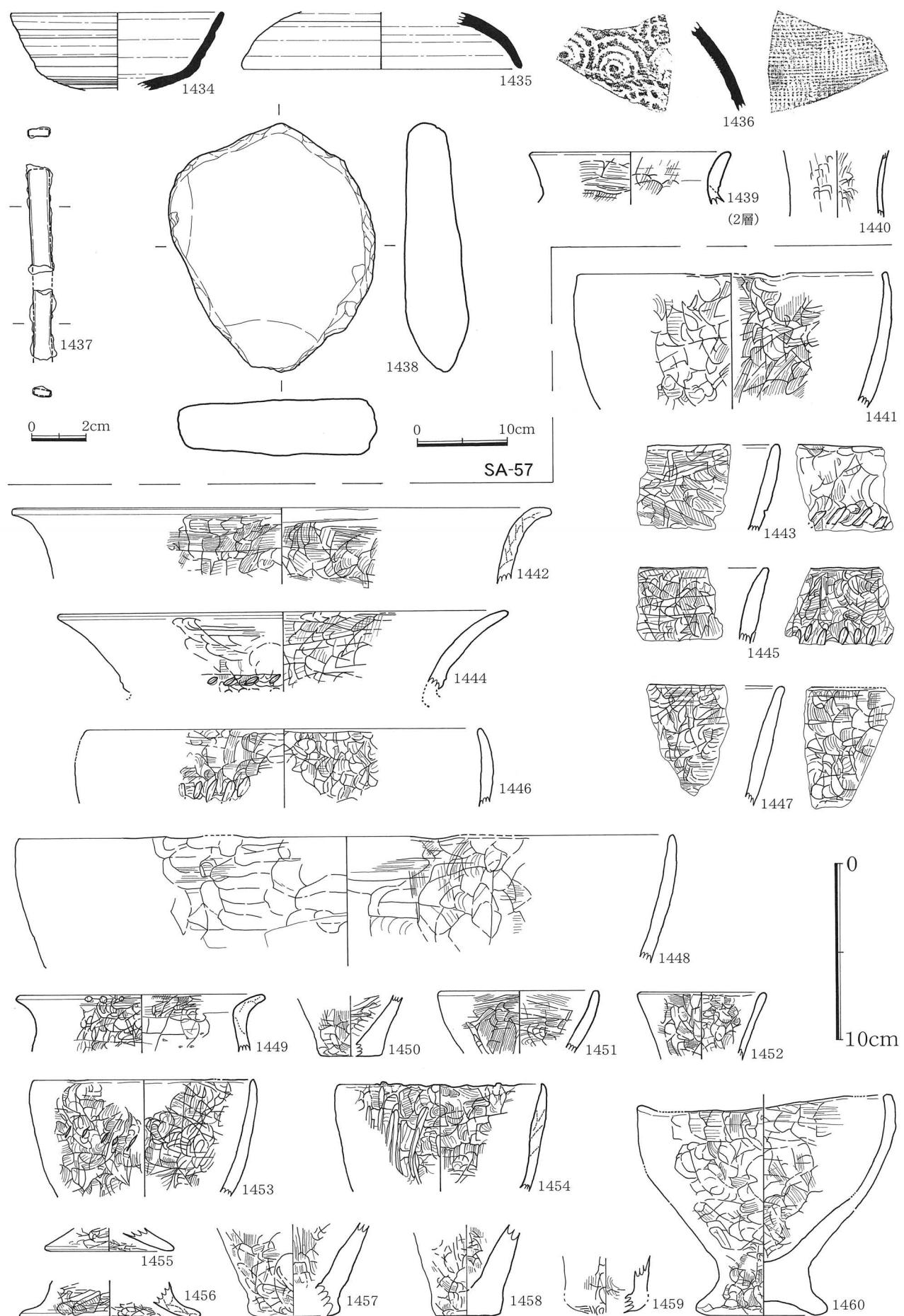
第158図 SA-54 出土遺物実測図(2), SA-55-56 出土遺物実測図(1)



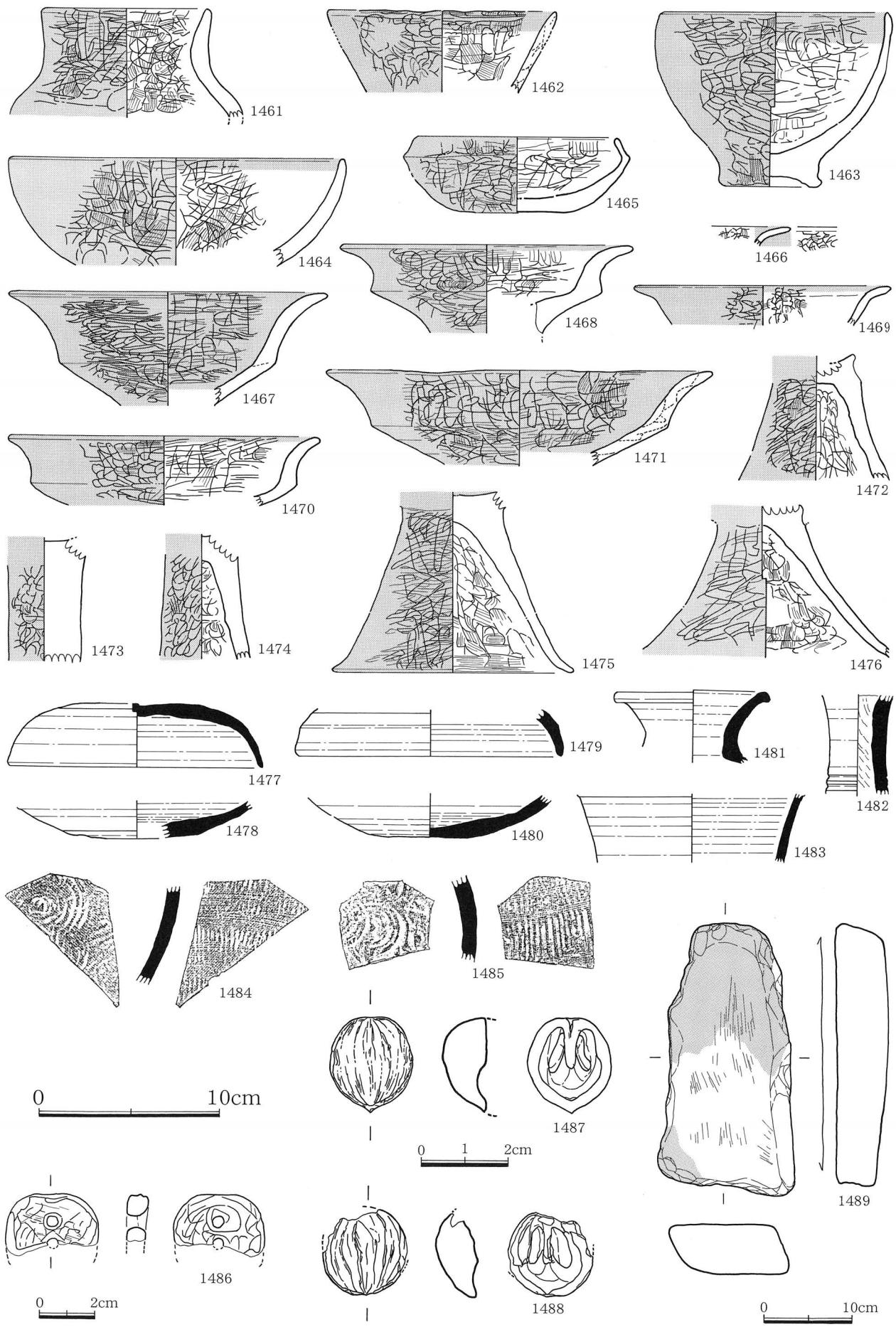
第159図 SA-56 出土遺物実測図(2)



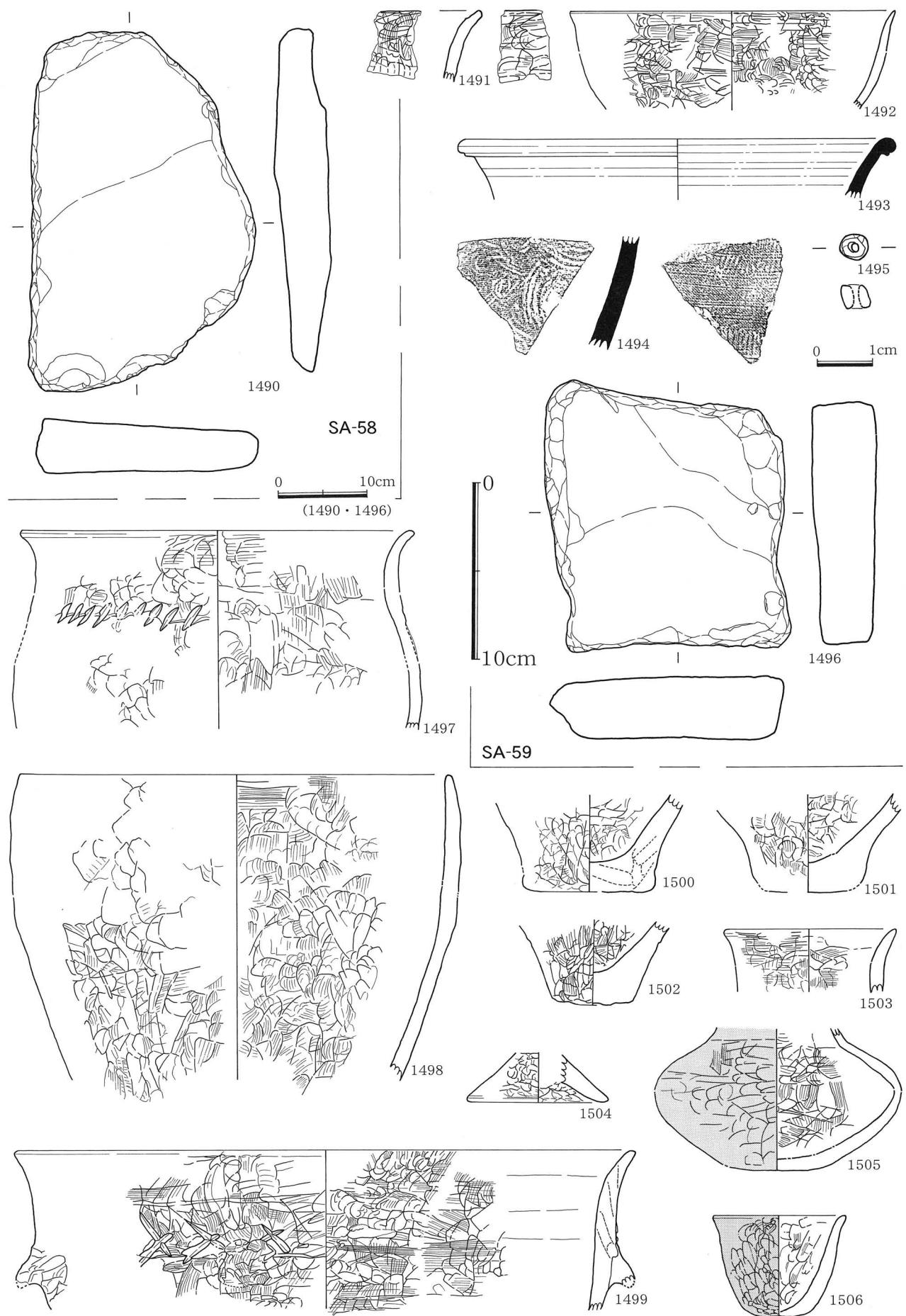
第160図 SA-56 出土遺物実測図(3), SA-57 出土遺物実測図(1)



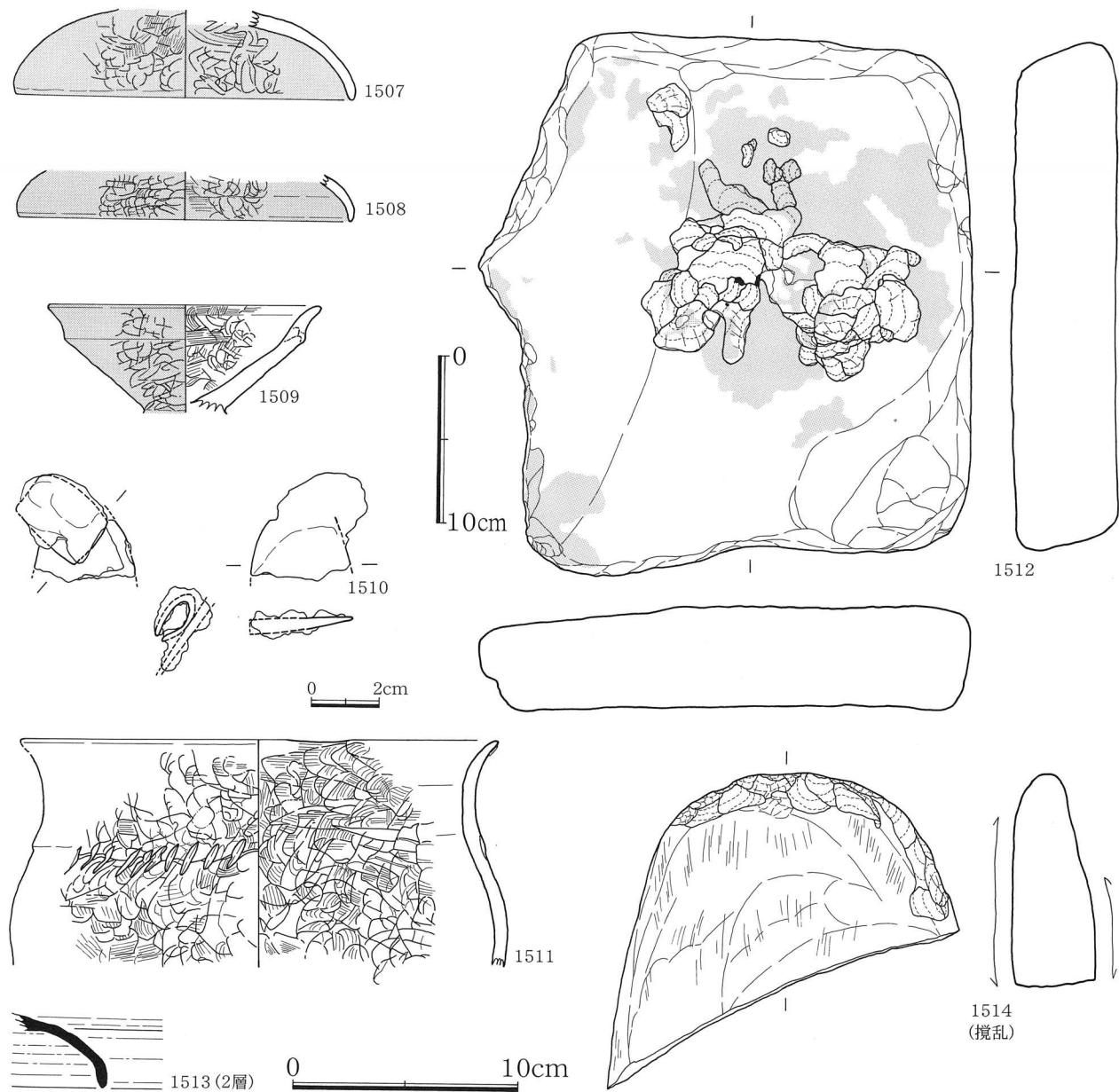
第161図 SA-57 出土遺物実測図(2), SA-58 出土遺物実測図(1)



第162図 S A -58 出土遺物実測図(2)



第163図 SA-58 出土遺物実測図(3), SA-59・60 出土遺物実測図(1)



第164図 S A-60 出土遺物実測図(2)

銹着している。鉄床石（1512）は、被熱し、表皮が弾け、鍛造剥片が付着し、稜（角）の使用も顕著である。これらの要素から中央炉で小鍛冶を営んだことが想定される。5世紀前半頃で、須恵器は混入と思われる。

S A-61 (第165図)

方形の62号住居を切る、直径6.1m前後の円形住居である。覆土は26~32cm遺存するが、土層的には20~25cmの削失が推定される。貼り床は、4~10cmの厚さで施される。62号住居の切り合い関係は平面での把握が困難であったが、貼り床の中に62号住居の焼けた床面の土塊が天地逆転して入っていたことから、新旧が明確になった。主柱穴は2本であるが建て替えがあったようで、南北2個ずつがある。柱穴の規模は、直径24~30cm・深さ16~20cmであり、P 1とP 3が新しい段階の主柱穴であろうと推定される。中央部の覆土下部には炭片や焼土塊が認められたが、明確な炉は確認



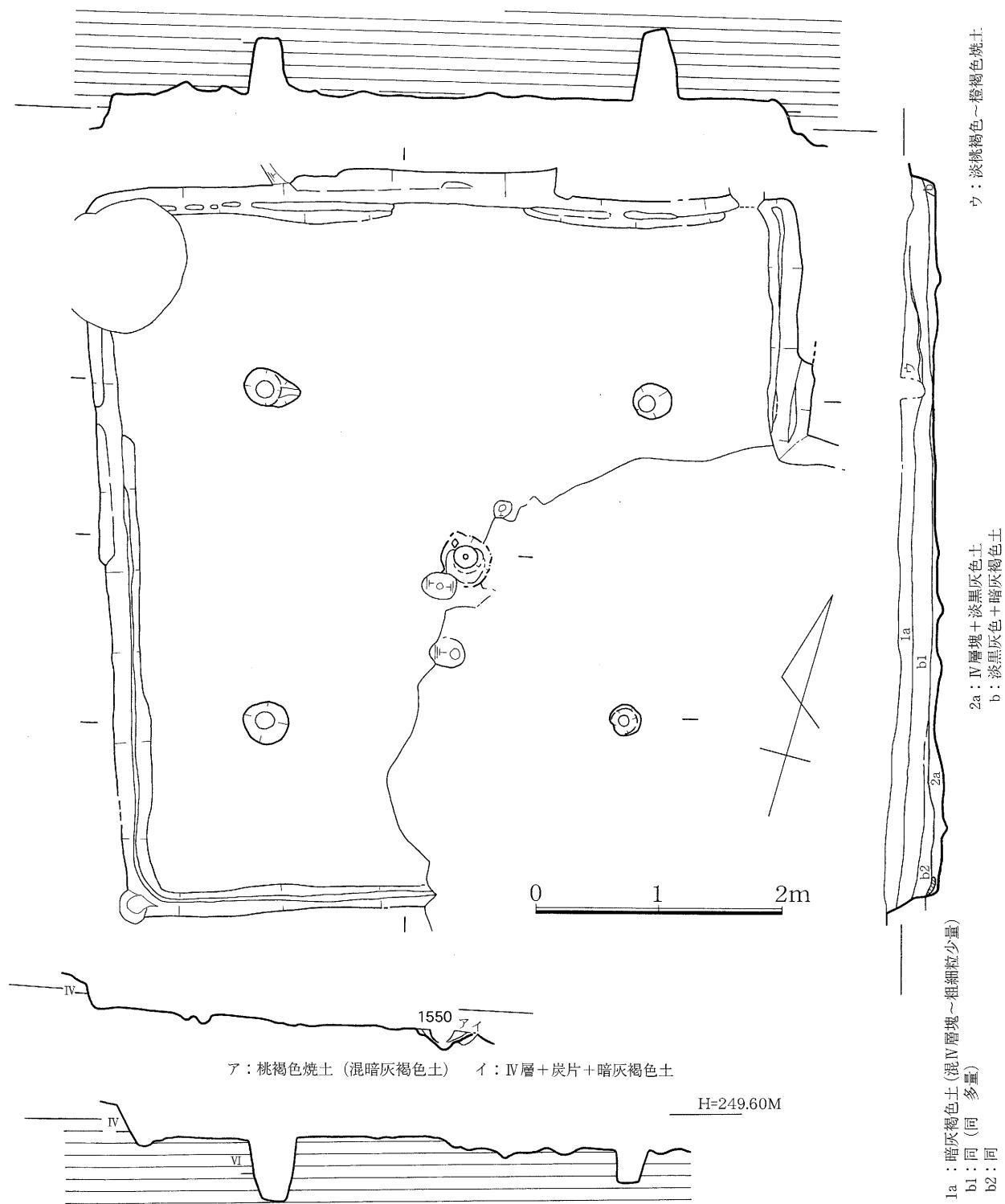
第165図 SA-61 遺構実測図

できなかった。

覆土から、土師器片1182点のほか、須恵器片20点が、2層から土師器片102点が出土したが、図化できたものは少ない。須恵器片の提瓶（1537）は、62号住居出土片と接合している。1523は甌の底部であるが、遺跡出土遺物で唯一の多孔タイプである。1538は、須恵器の甌片を両面加工で三角形状に加工した用途不明品である。6世紀後半である。

SA-62 (第166図)

東西5.8m・南北6.1mの方形住居である。覆土は20~30cm遺存するが、土層的には10~20cmの削



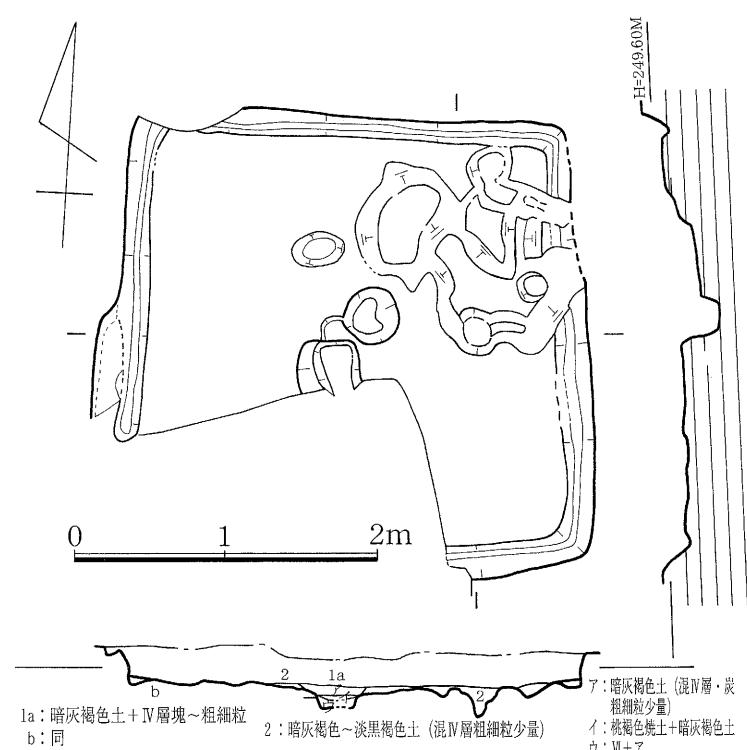
第166図 SA-62 遺構実測図

失が推定される。床面はほぼ全面被熱し、中央付近には厚さ3~4cmの焼土塊もあった。主柱穴は4本で、直径28~37cm・深さ28~61cmを測る。中央には、口縁部を打ち欠いた甌(1550)を使用した土器埋設炉がある。覆土から、土師器片1167点のほか、須恵器片33点、須恵器片加工品(1564、両面調整)、3個に割れた台石が、2層から土師器片102点が出土したが、小片が多い。6世紀後半である。

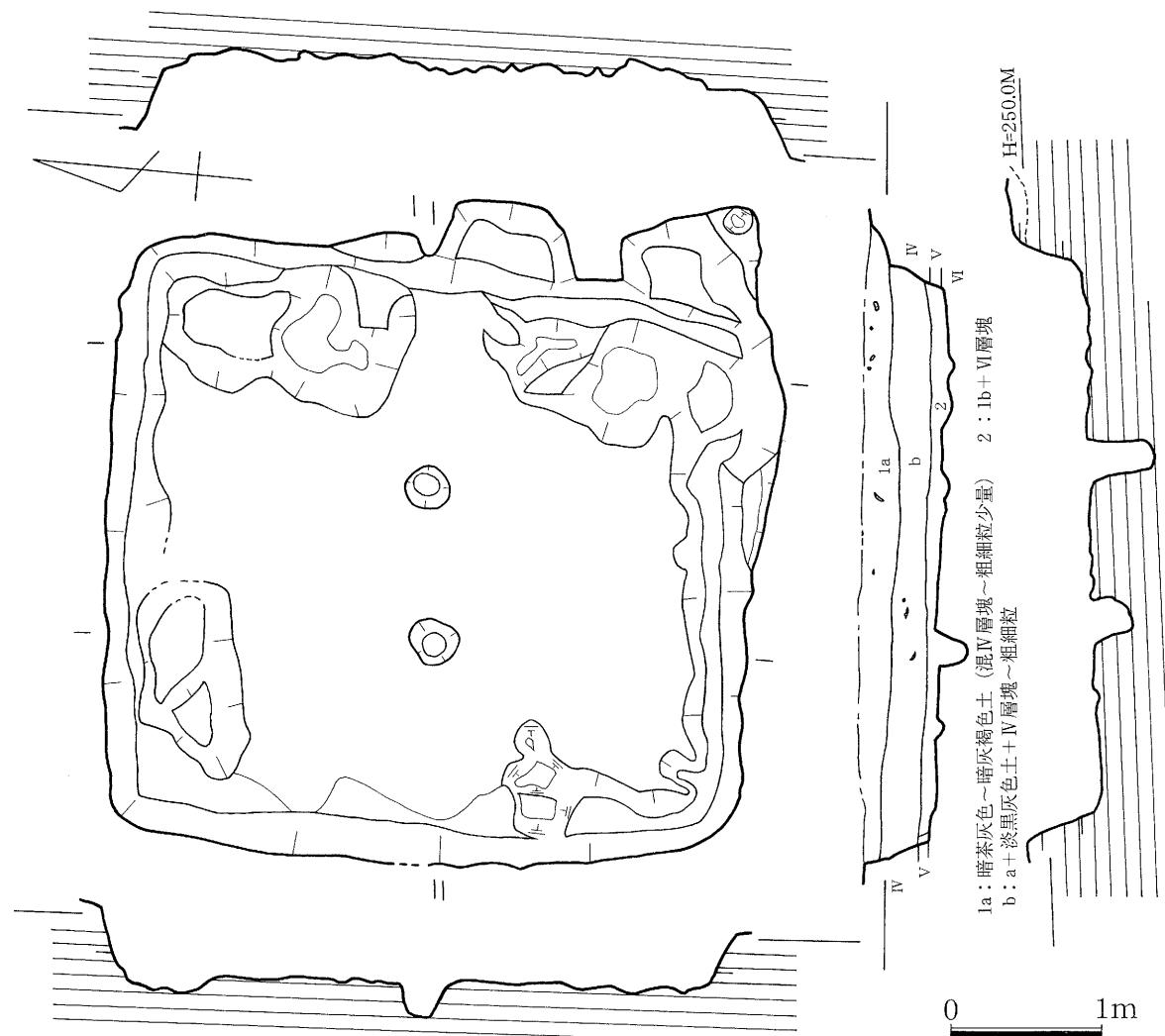
S A -63 (第167図)

62号住居に切られた、東西2.98~3.32m・南北3.01mの方形住居である。覆土は16~25cm程遺存するが、土層的には10cm程の削失が推定される。主柱穴は不明、貼り床は2~22cmが施される。中央やや南寄りには、長径44cm・深さ10cmの2次掘り込み炉、ア・イ層直下に幅25cm・深さ8cmの初期掘り込み炉(ウ層)がある。

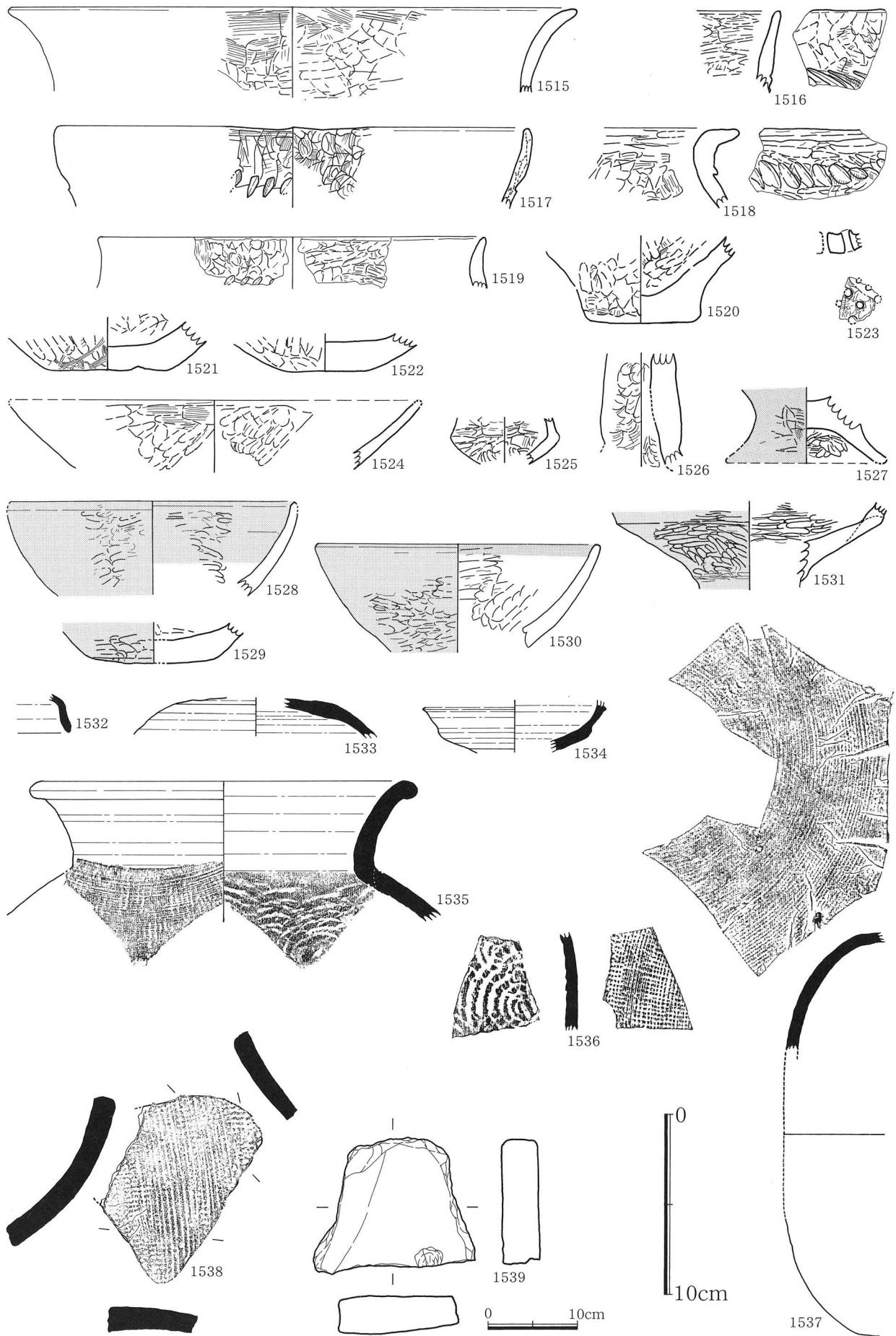
覆土から、土師器片224点が出土したが、図化できたものは少ない。5世紀代と思われる。



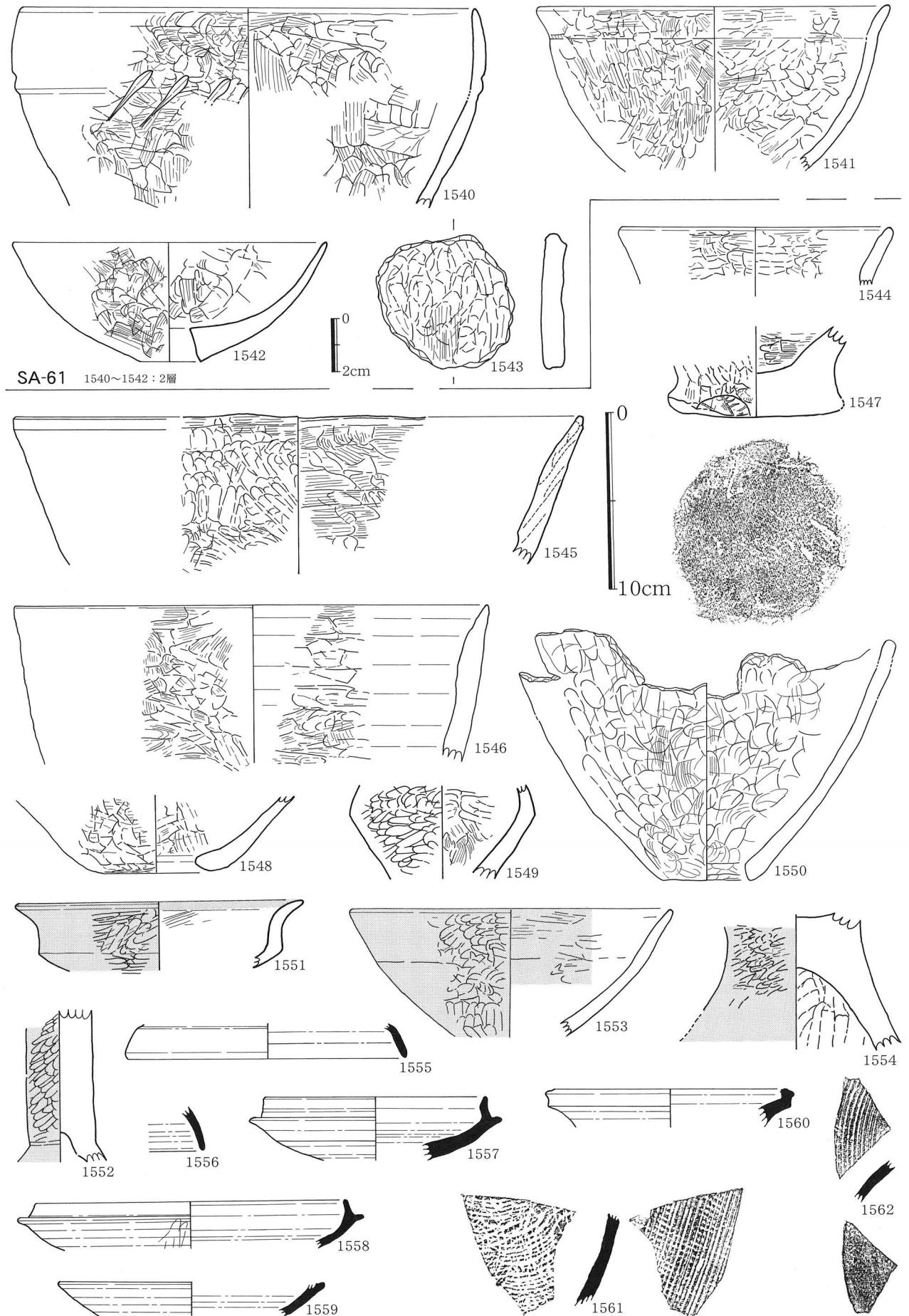
第167図 S A -63 遺構実測図



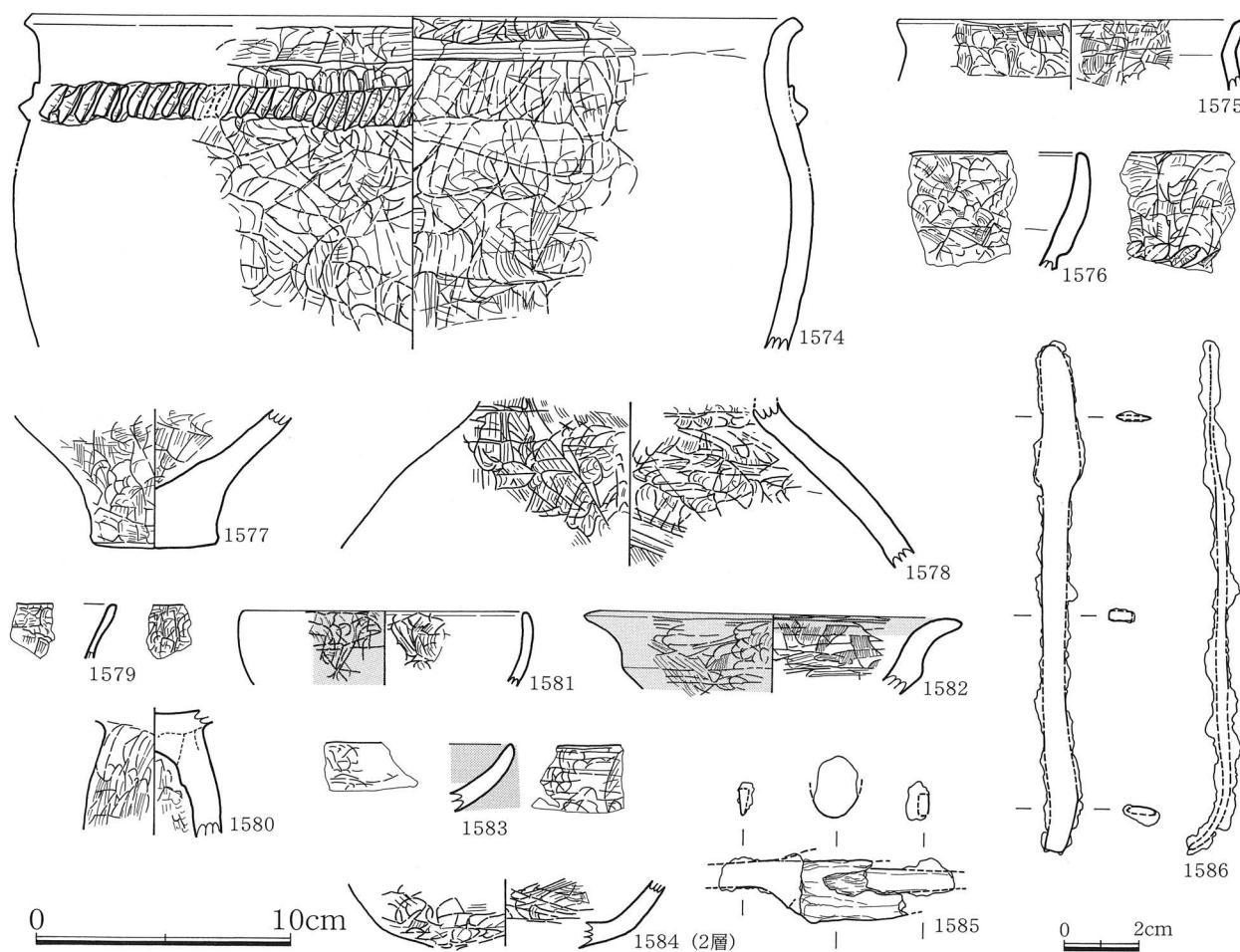
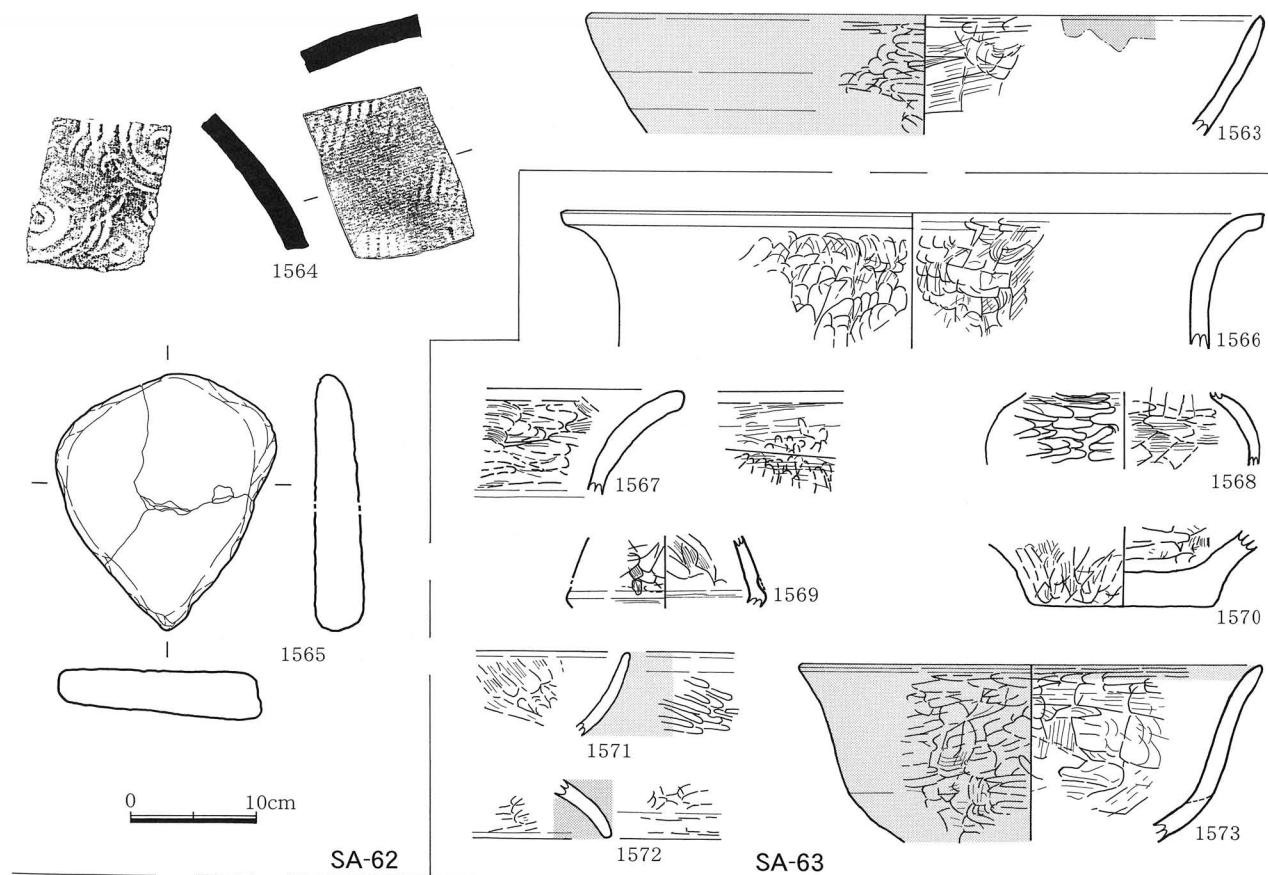
第168図 S A -64 遺構実測図



第169図 SA-61 出土遺物実測図(1)



第170図 SA-61 出土遺物実測図(2), SA-62 出土遺物実測図(1)

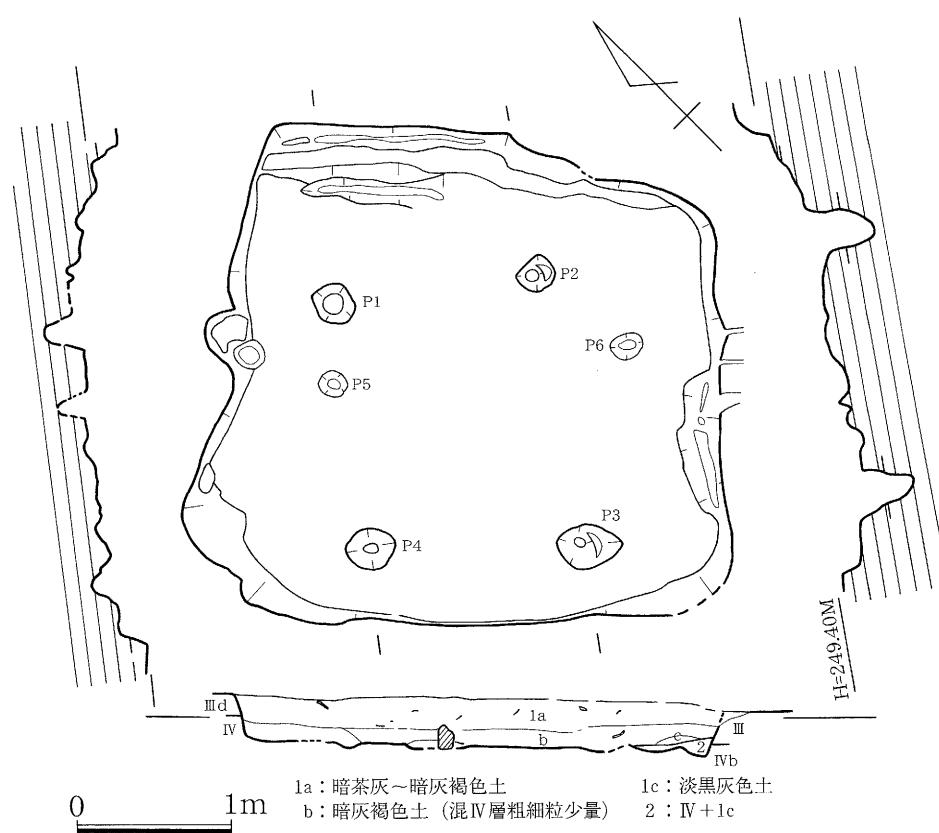


第171図 SA-62 出土遺物実測図(2), SA-63・64 出土遺物実測図

S A-64 (第168図)

Ⅲ区のほぼ中央部に位置した、東西3.8～4.06m・南北4.2～4.45mの隅円方形基調の南東部に、幅90cm前後・奥行き30～60cm・深さ10cmの張り出し2ヶ所が付属する。覆土は38～45cmが遺存し、10cm程の削失が推定される。主柱穴は2本で、直径29～33cm・深さ27・45cmを測る。

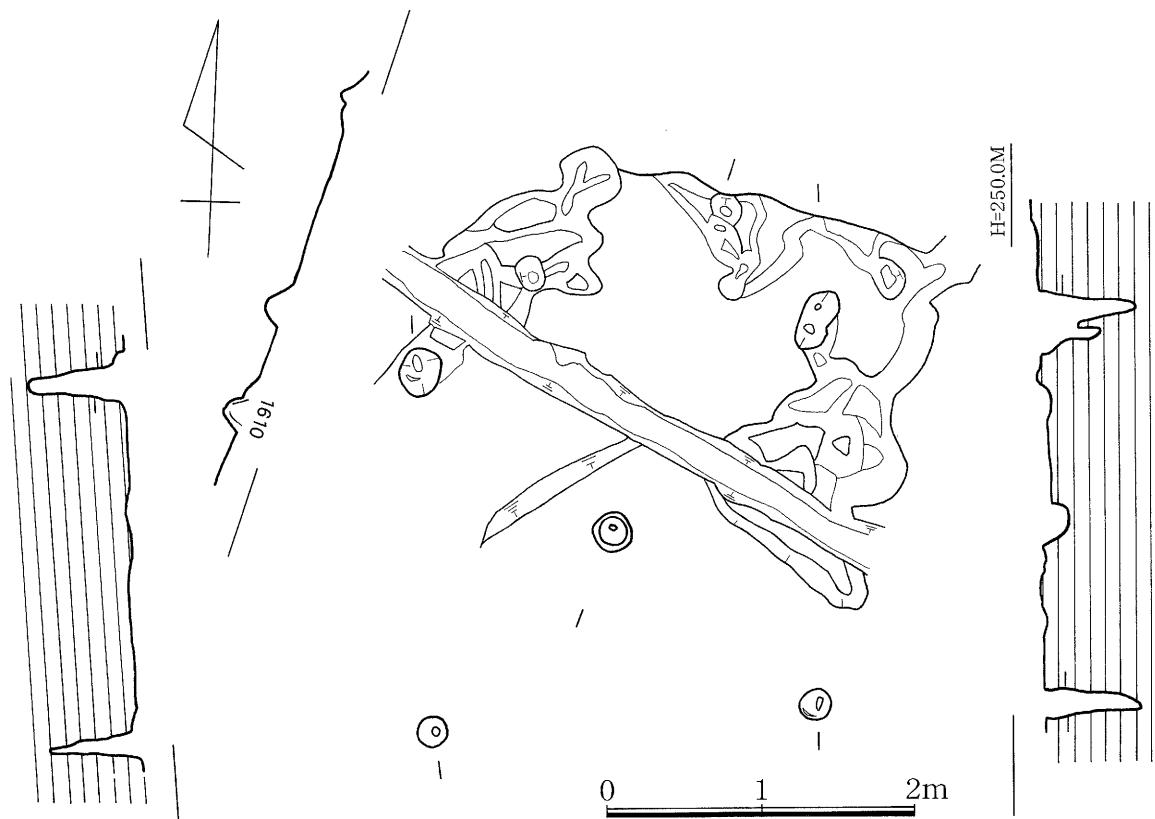
覆土から、土師器片



1352点のほか、須恵器

第172図 S A-65 遺構実測図

片2点、鉄鏃・刀子各1点等が、2層から土師器片44点が出土している。1586は長頸鏃であるが、基部も鋭角である。5世紀中葉頃の住居で、須恵器は混入と思われる。



第173図 S A-66 遺構実測図



第174図 SA-67 遺構実測図

S A-65 (第172図)

46号住居の南西側において、遺物包含層を5cm程掘り下げたところ東西3.08~3.58m・南北2.85~3.29mの隅円台形のプランを検出した。覆土は、27~32cmを測り、貼り床は僅かである。主柱穴は4本（P 1~4）で、直径20~32cm・深さ22~45cmを測る。北壁の40cm内側には初期の壁溝が遺存しており、P 5（直径16~18cm・深さ20cm）と6（直径17~21cm・深さ13cm）の2本柱が想定される。炉は検出されなかった。

覆土から、土師器片261点のほか、須恵器片1点が出土したが、図化できたのは少ない。3世紀後半~4世紀前半の住居で、須恵器は混入の可能性が高い。

S A-66 (第173図)

45号住居の北5mに位置した、主柱穴4本と土器埋設炉、若干の2層の広がりが遺存していた住居である。土層的には、25~30cmの削失が推定される。主柱穴の南北間は2.45m・東西間は2.5~2.6mを測り、柱穴の規模は、直径18~33cm・深さ60~63cmを測る。中央には、甌の下半分（1610）を使用した土器埋設炉がある。覆土と2層から土師器片各1点が出土し、6世紀後半と思われる。

S A-67 (第174図)

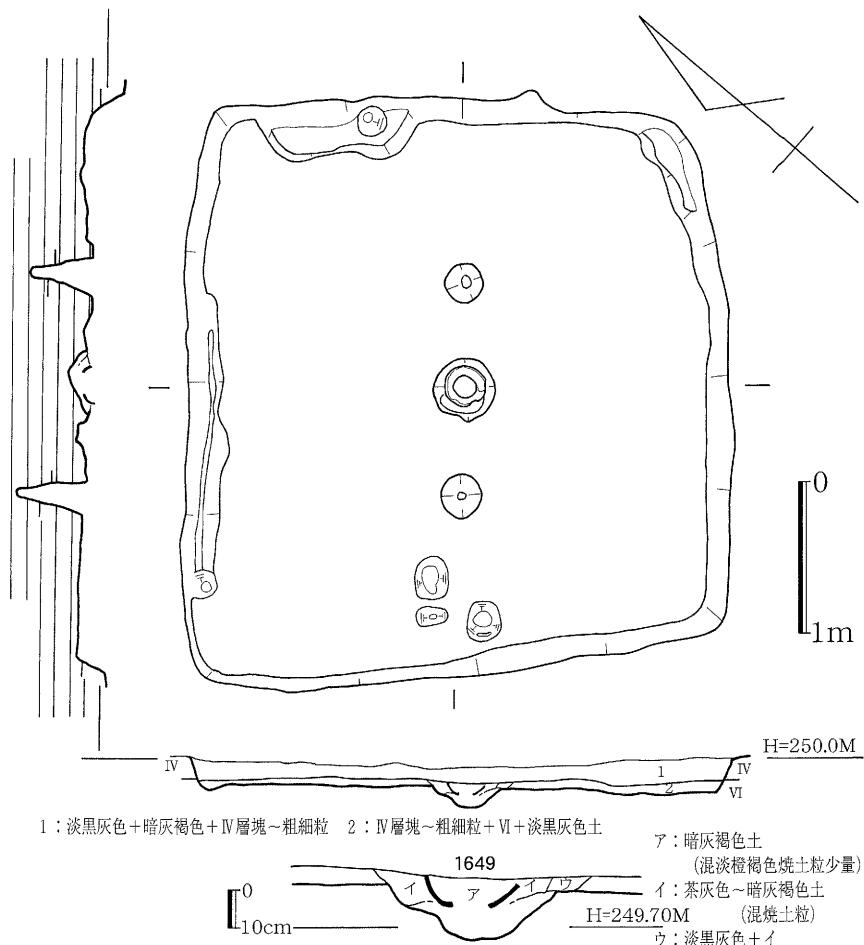
Ⅹ区の中央付近に位置した、長さ5.96~6.25m・幅5.82~5.87mの方形基調の住居である。覆土は40~50cm遺存するが、土層的には20~25cmの削失が推定される深めの住居である。

主柱穴は4本（P 1~4）で、直径25~35cm・深さ24~27cmを測る。新段階（拡張時）の炉は1d層上面に直径90cm程に広がる1c層（深さ4cm）の凹みである。

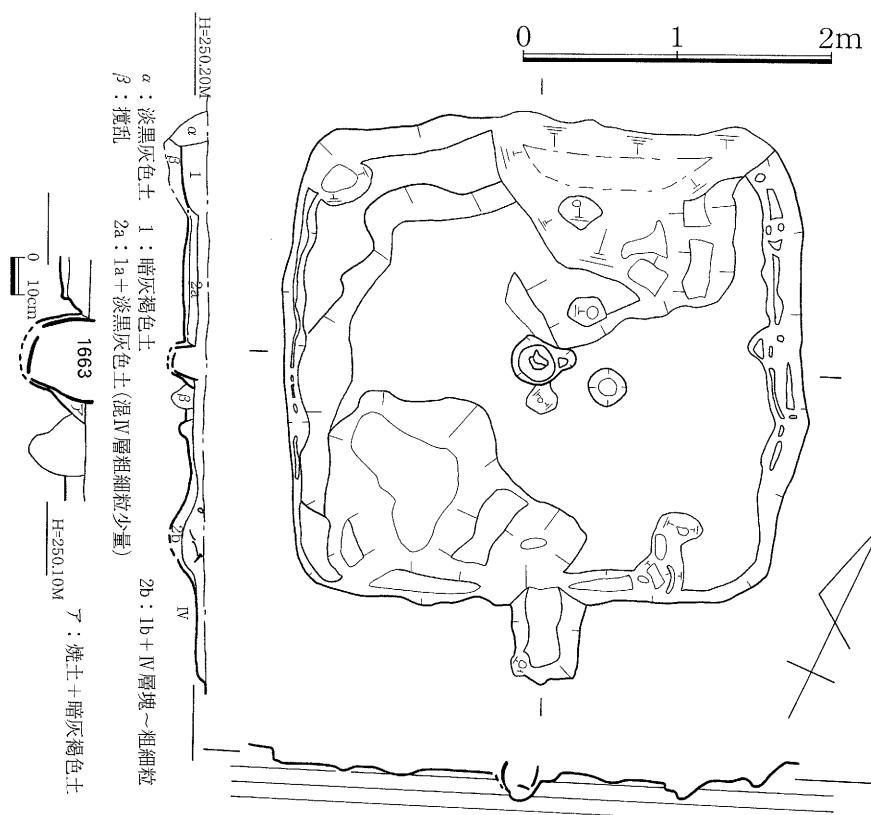
東隅には、上面の幅91~96cm・長さ1.93mの掘り残し（ベッド状遺構）がある。

初期の主柱穴は2本（P 5・6）で、直径31~48cm・深さ30cmを測る。その中間寄りには、巨礫を避けて長径50cm・短径38cm・深さ26cmの掘り込み炉が付属する。

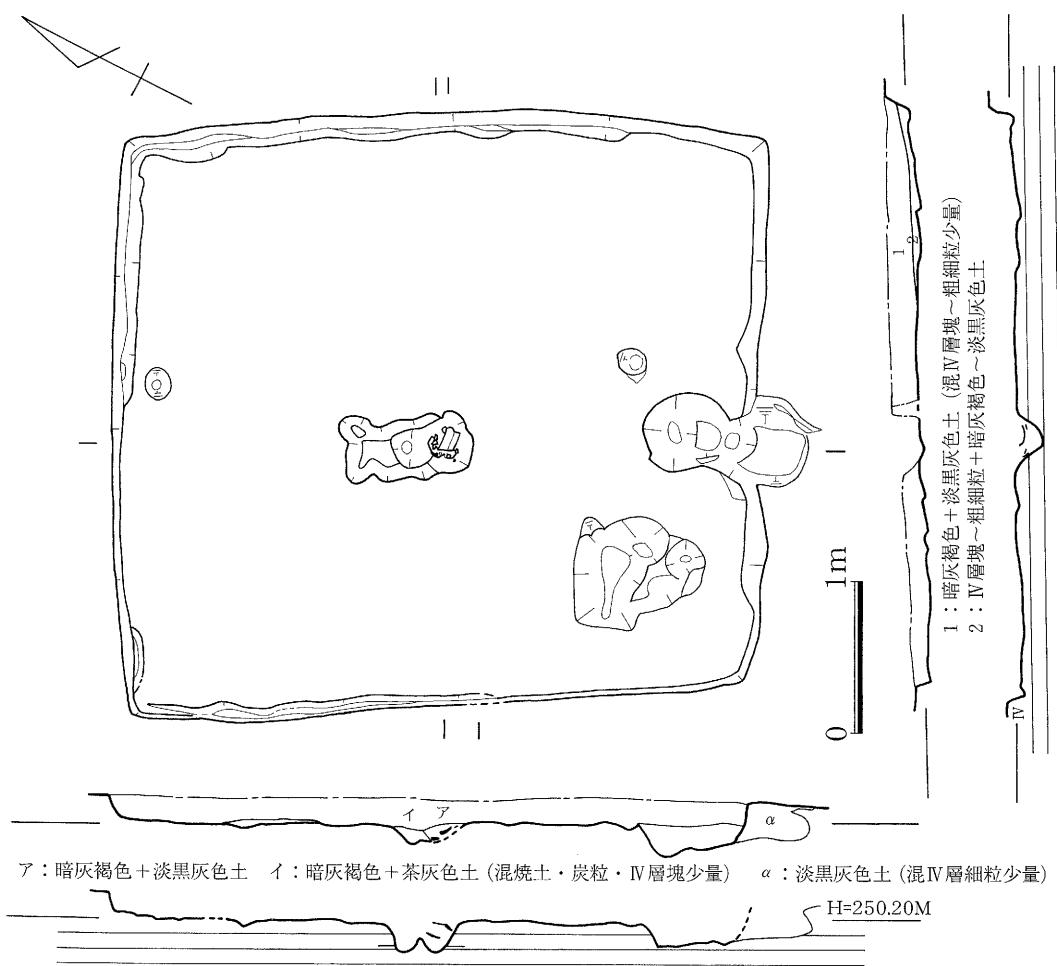
覆土から、土師器片1288点、須恵器片1点、鉄器片・砥石各1点が、2層から土



第175図 S A-68 遺構実測図



第176図 SA-69 遺構実測図



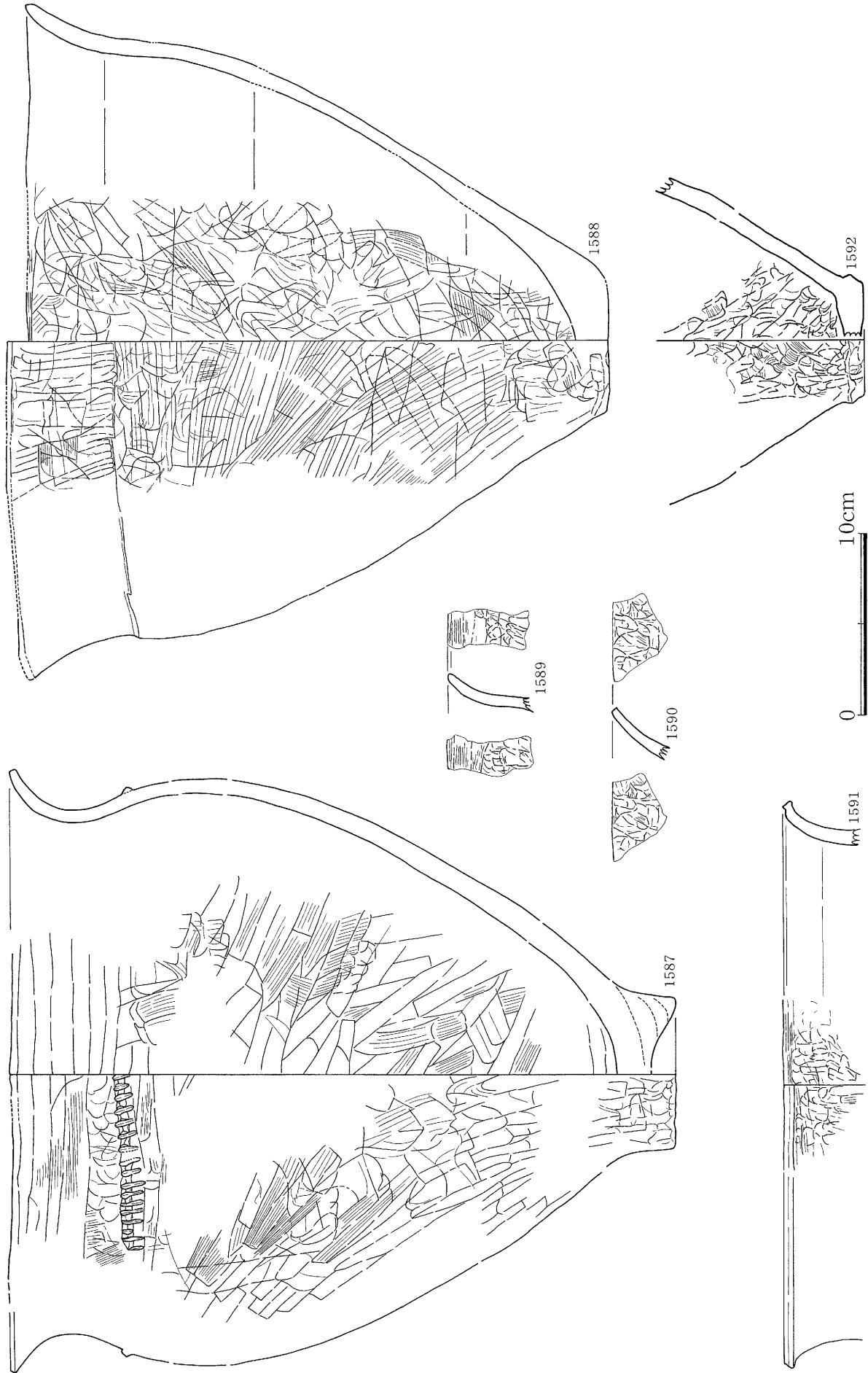
第177図 SA-70 遺構実測図

師器片75点が出土しているが、図化できたのは少ない。1629と1643は、隣接するSK-762出土片と接合している。5世紀中葉の住居で、須恵器は混入と推定される。

SA-68 (第175図)

III区の南東部に位置した長さ3.4~3.87m・幅3.2~3.59mの南東壁が短い隅円長方形を呈する住居である。覆土は、8~16cm遺存するが、土層的には25cm程の削失が推定される。主柱穴は

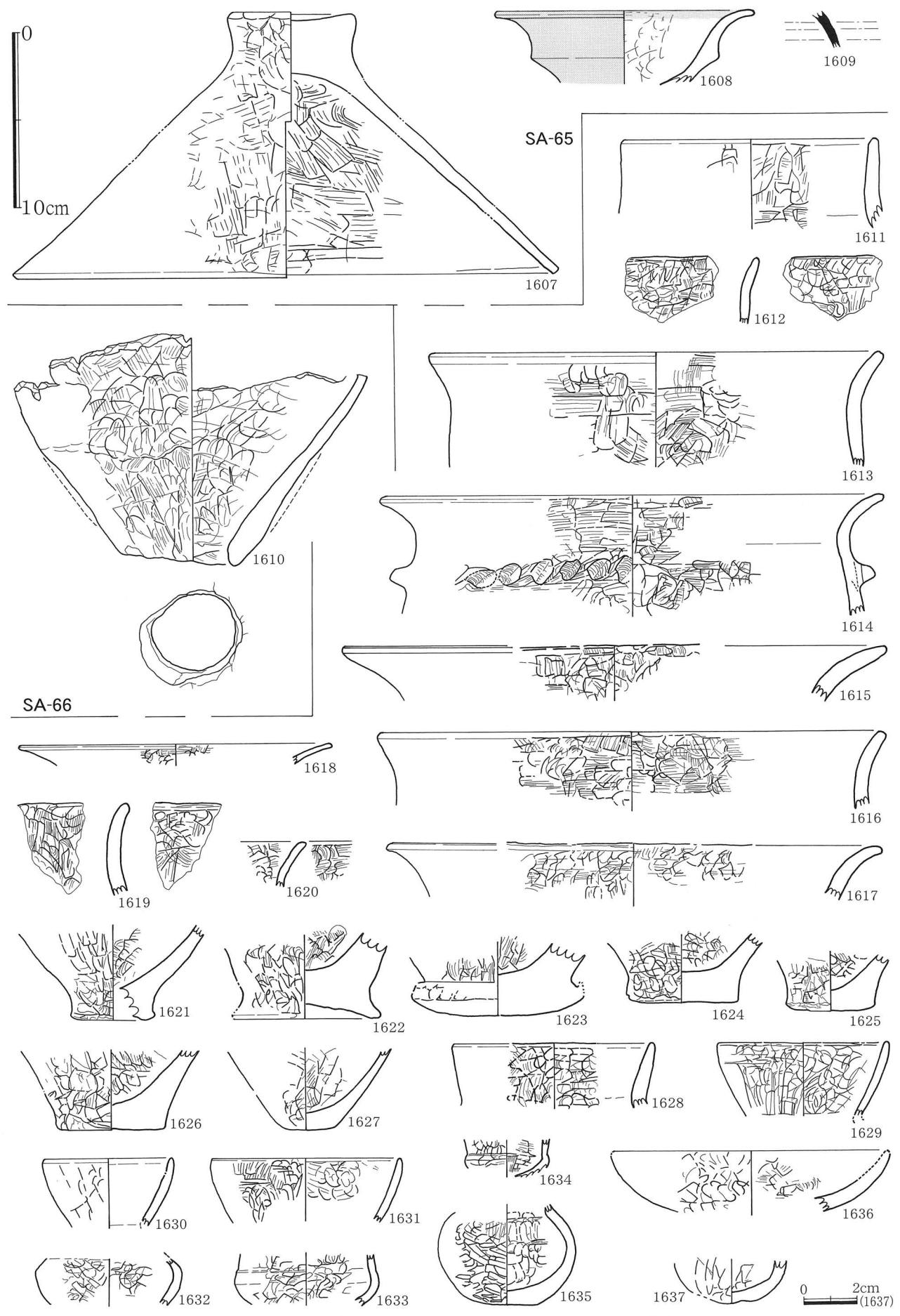
2本で、直径



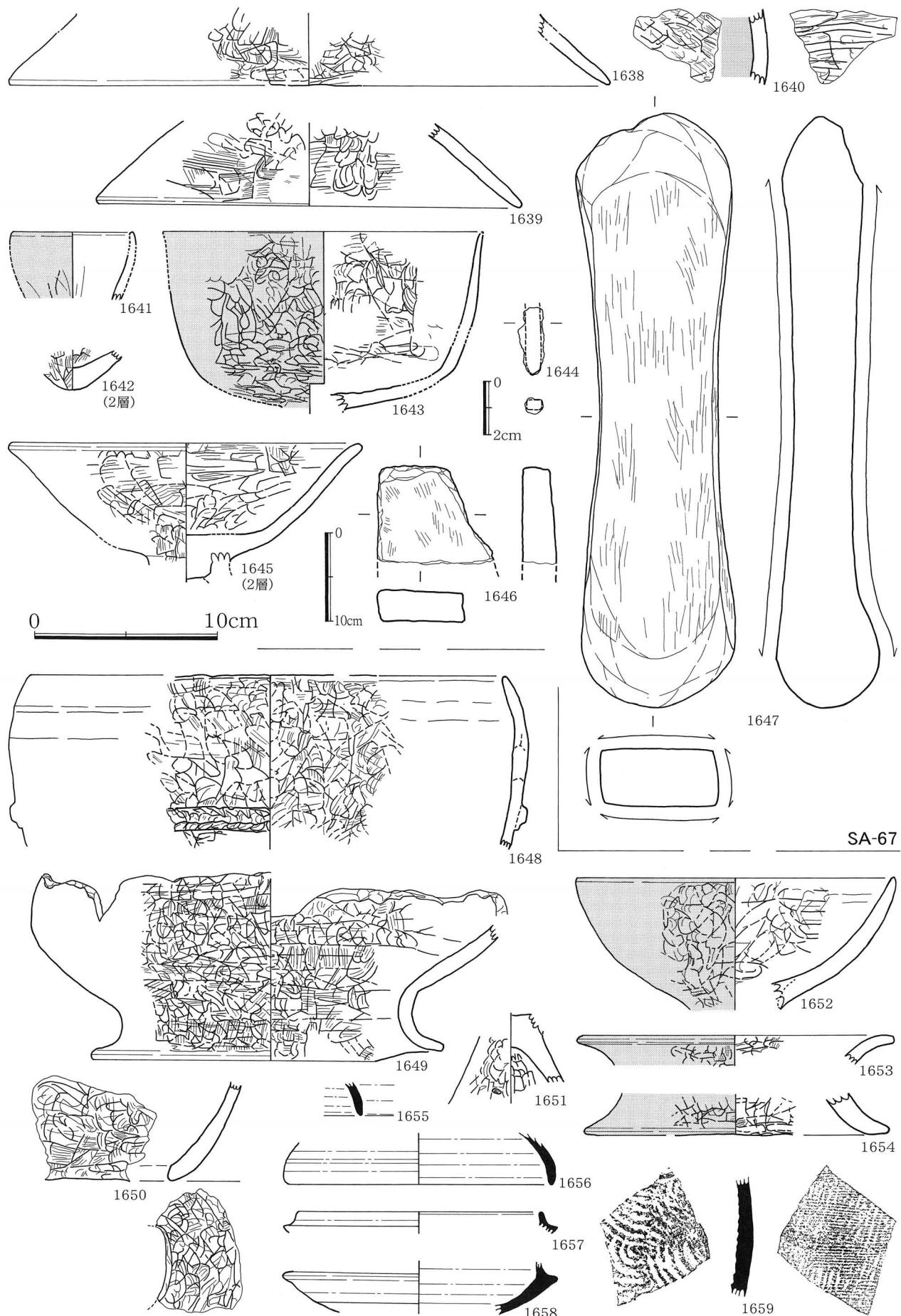
第178図 SA-65 出土遺物実測図(1)



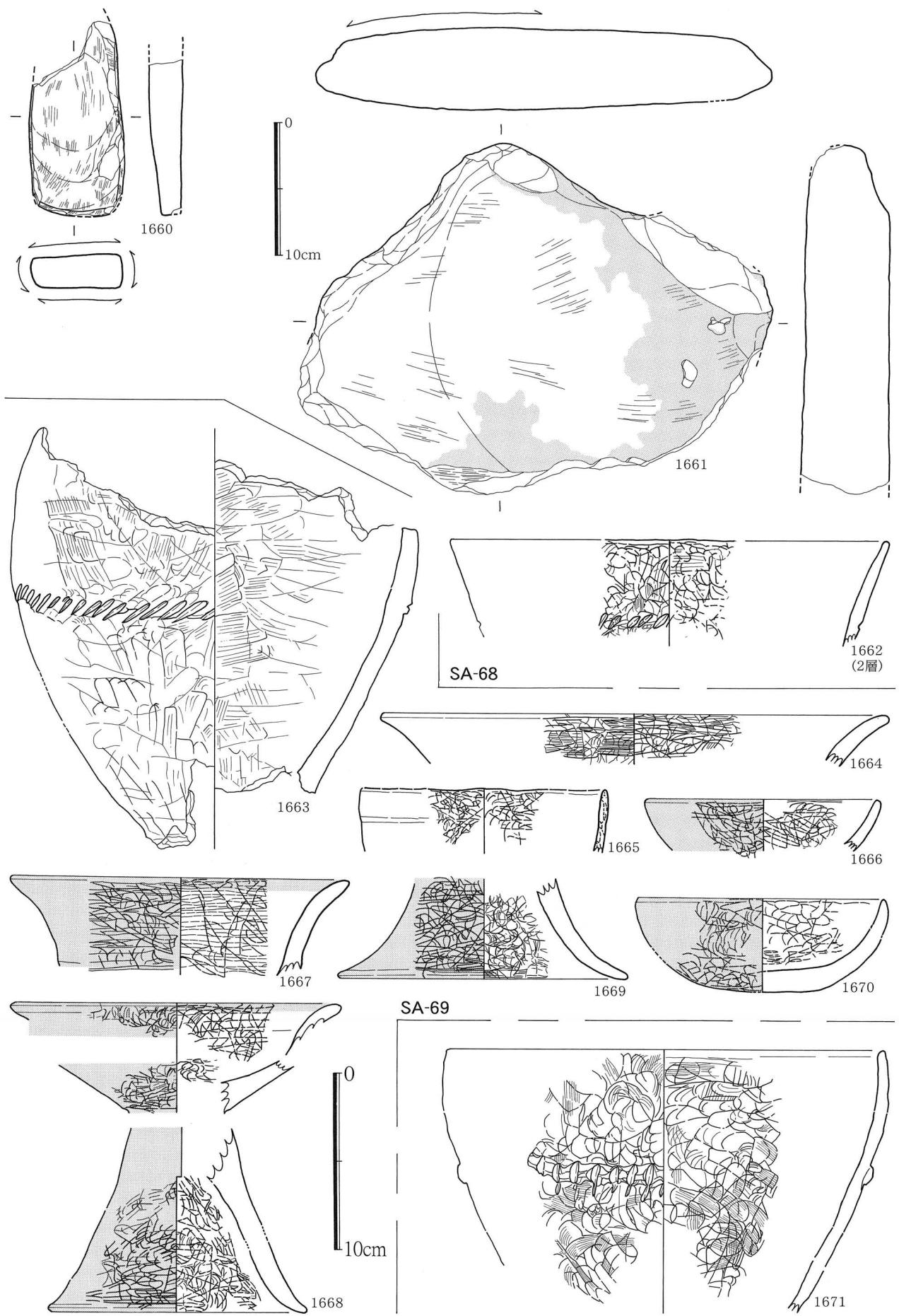
第179図 SA-65 出土遺物実測図(2)



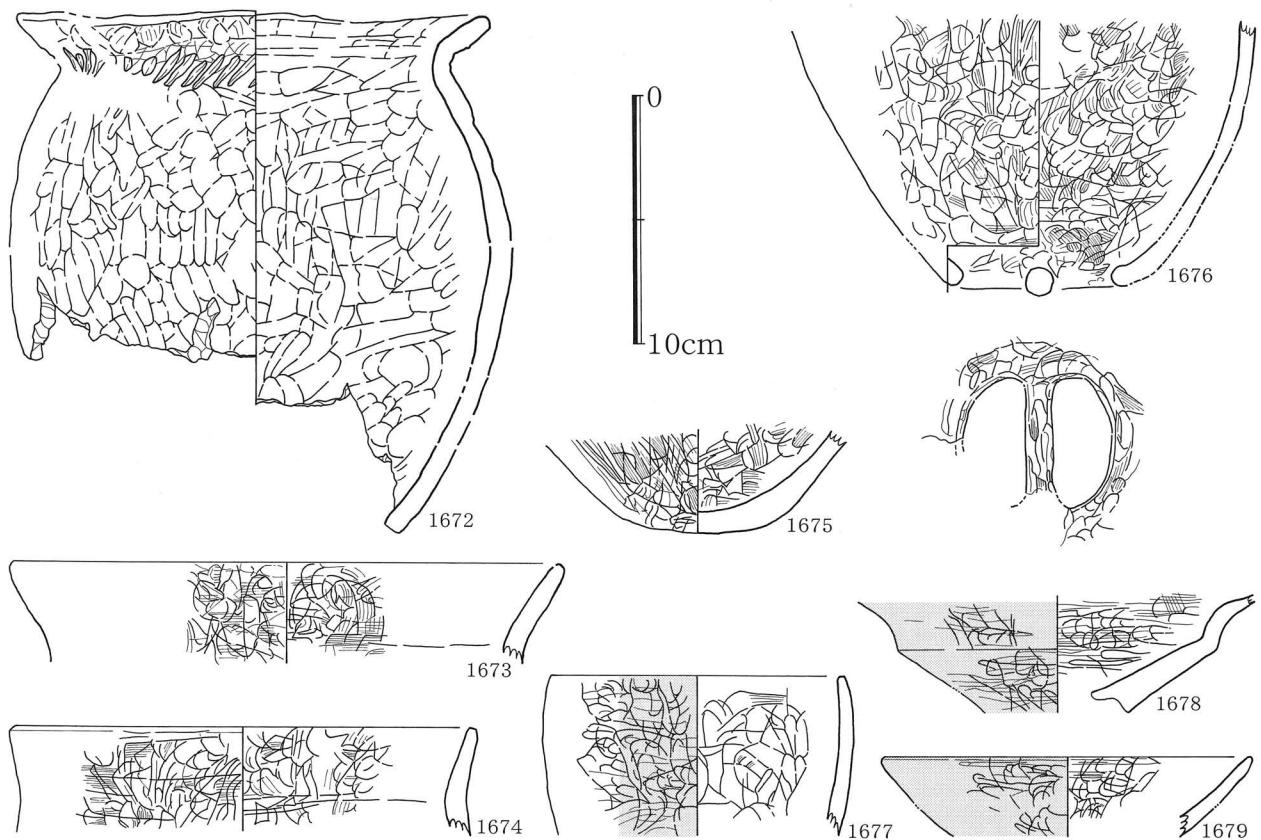
第180図 SA-65 出土遺物実測図(3), SA-66-67 出土遺物実測図(1)



第181図 SA-67 出土遺物実測図(2), SA-68 出土遺物実測図(1)



第182図 SA-68 出土遺物実測図(2), SA-69・70 出土遺物実測図(1)



第183図 SA-70 出土遺物実測図(2)

25~30cm・深さ40・45cmを測る。中央には、壺の胴部以下を打ち欠いて反転（1649）した土器埋設炉がある。

覆土から、土師器片188点、須恵器片6点、砥石・台石（鉄床石か）各1点が、2層から土師器片29点が出土しているが、図化できたのは少ない。6世紀後半である。

SA-69（第176図）

東西3.4m・南北3.2mの隅円方形の南辺中央に、長さ52cm・幅38~49cm・深さ5~6cmの出入口が付設されている。覆土は6~14cm遺存し、土層的には10cm程の削失であり、当初から掘り込みの浅い住居であったと推定される。北端部は風倒木痕の土層も掘り込んだ結果、遺構底面が削失している。中央には、口縁部と底部を打ち欠いた甕（1663）を使用した土器埋設炉がある。その22cm東には、深さ26cmの柱穴状pitがあるが、対置するpitは無い。出入口の直下には、貼り床が施された、直径50cm程・深さ10cm・底面の直径20cmの土坑がある。貼り床は、全面に4~10cm施される。

覆土から、土師器片153点が、炉の南側には炭化燃材が少量出土した。6世紀前半か。

SA-70（第177図）

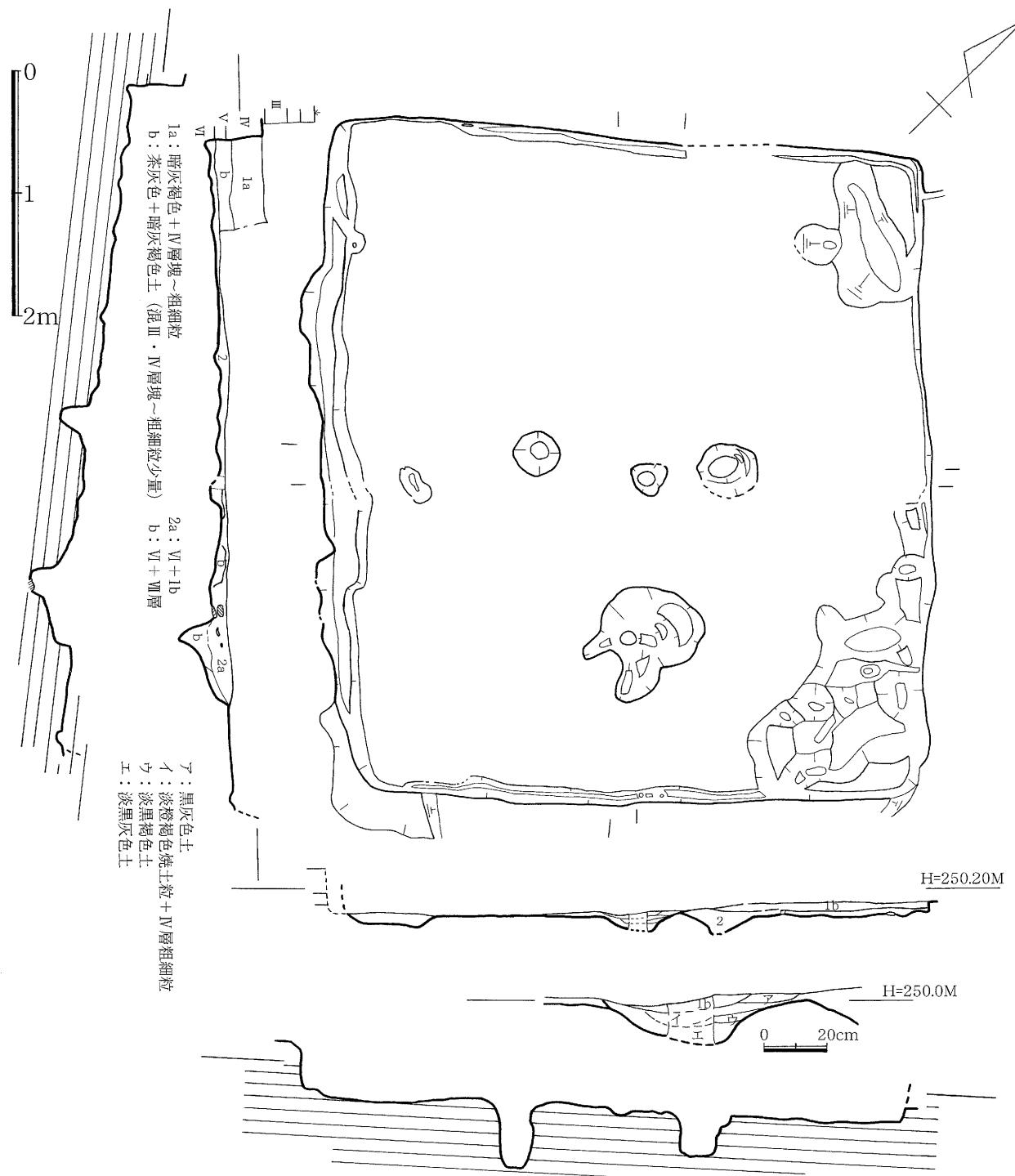
長さ4~4.20m・幅3.7~3.94mの長方形を呈し、東辺がやや胴張る。覆土は14~16cm程が遺存し、土層的には5~10cm程の削失が推定される。貼り床は僅かで、主柱穴は無い。中央やや西寄りには2時期の掘り込み炉があり、新段階では甕の下半（1676）を使用した埋設炉に甕の破片（1672）が流入している。南辺中央西寄りには、長径60cm・短径50cm・深さ14~20cmの土坑が伴う。底面は南

東壁を抉る土坑に繋がり、切り合いは不明瞭であるが、74号住居と同様、出入口として存在した可能性もある。

覆土から土師器片158点と須恵器片1点が出土している。6世紀前半か。

S A-71 (第184図)

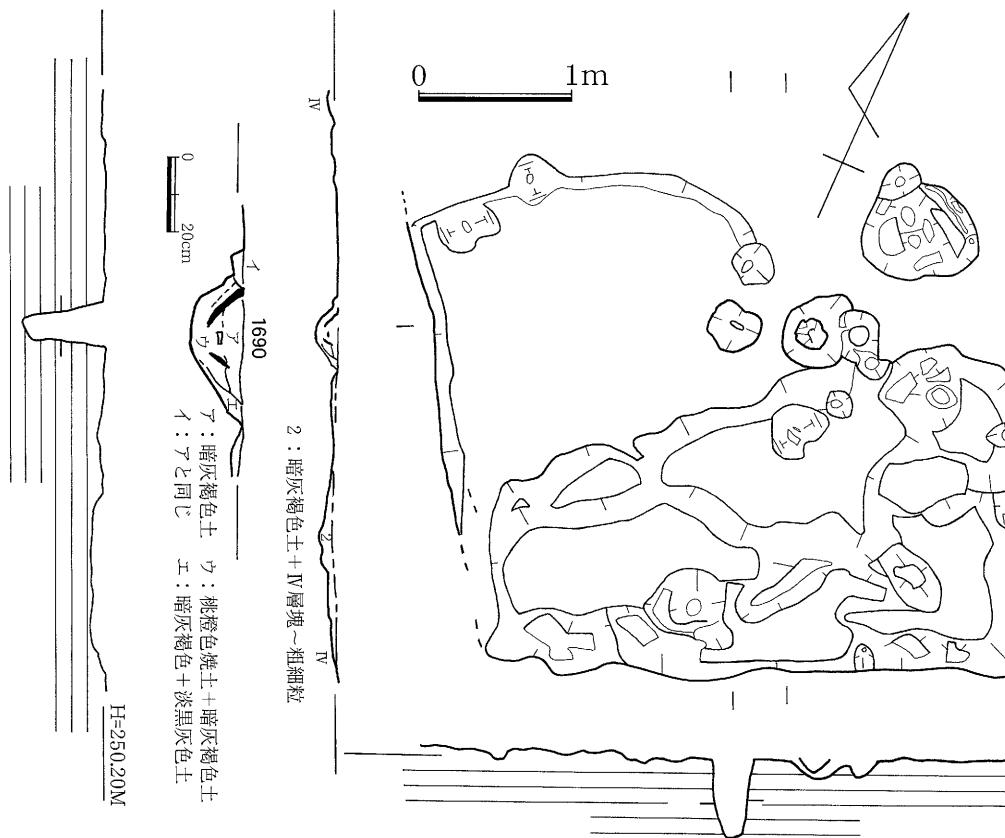
表土剥ぎの際、筆者の監督不行届の為に40cm程削失してしまったが、西北部を拡張して掘形を検出したことから遺構の規模等が判明した。長さ5.26~5.46m・幅4.6~4.9mの長方形を呈し、覆土は32~38cmの厚さでIV層上面から掘り込んでいる。主柱穴は短軸方向の2本で、直径34~47cm・深



第184図 S A-71 遺構実測図

さ34・54cmを測る。中央やや東寄りには、深さ18cmの不整形な掘り込み炉がある。南東部の不整形土坑は貼り床で埋填され、機能していない。

覆土から、土師器片106点、須恵器片6点等が出土しているが、図化できるものは少ない。5世紀前半頃と思われ、須恵器は混入か。

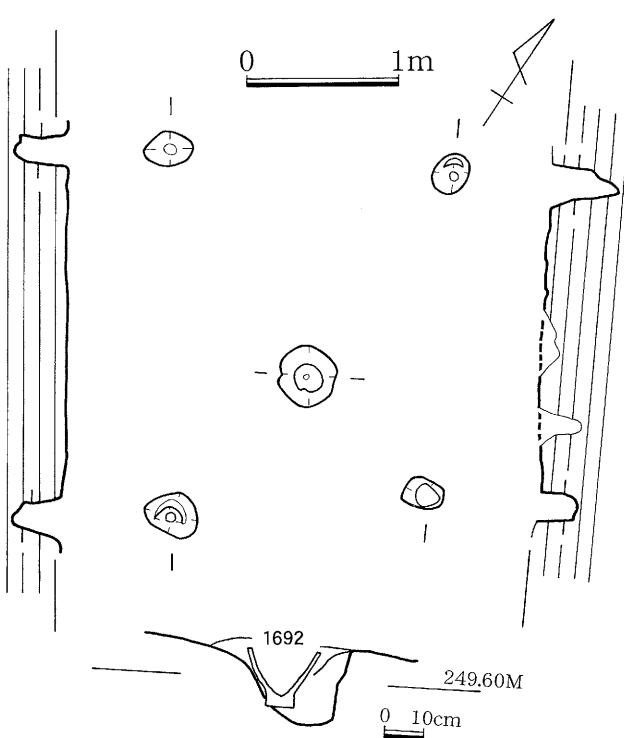


第185図 SA-72 遺構実測図

SA-72 (第185図)

71号住居の東2mに位置した、約4m四方と推定される住居で、土器埋設炉と南側の覆土・2層が僅かに遺存していたが、土層的には10cm程の削失と推定され、当初から浅い住居であったと思われる。明瞭な柱穴は、炉脇にある深さ54cmの歪つなpitのみである。埋設炉の土器は壺の上半を打ち欠いたもの(1690)で、外面に整形時の布目压痕を残す。

覆土から、土師器片40点の他、鉱滓1点(写真図版413)が出土している。南東壁の80cm外方には、16号地下式横穴墓が構築されている。5世紀後半～6世紀前半か。

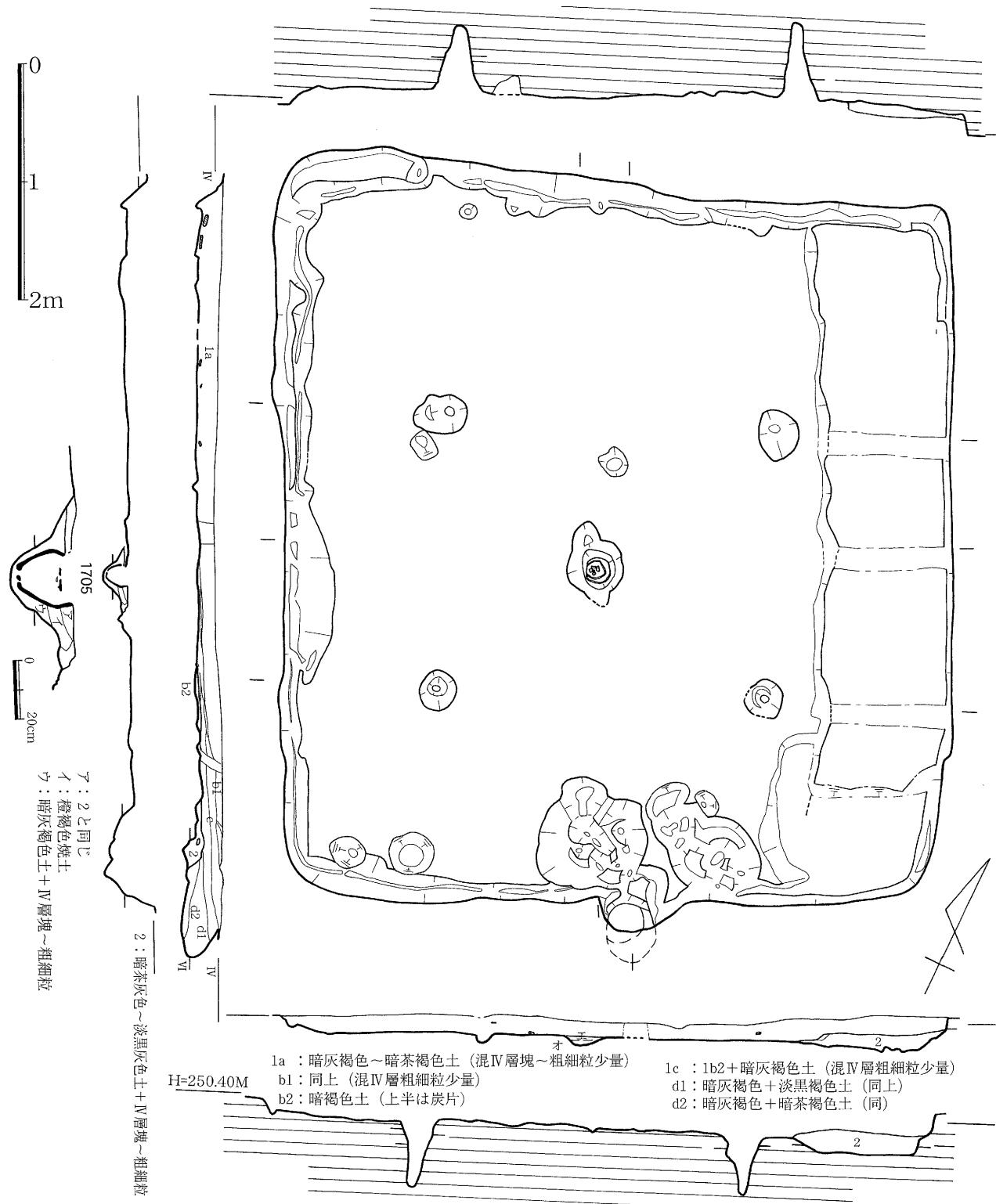


第186図 SA-73 遺構実測図

S A-73 (第186図)

54号住居の南西 5 m で、主柱穴 4 本と中央南寄りに位置する土器埋設炉を検出した。柱穴は、直徑 20~36 cm・深さ 25~30 cm を測り、掘形は柱間の距離から 3.4 × 5 m 程の長方形が推定される。

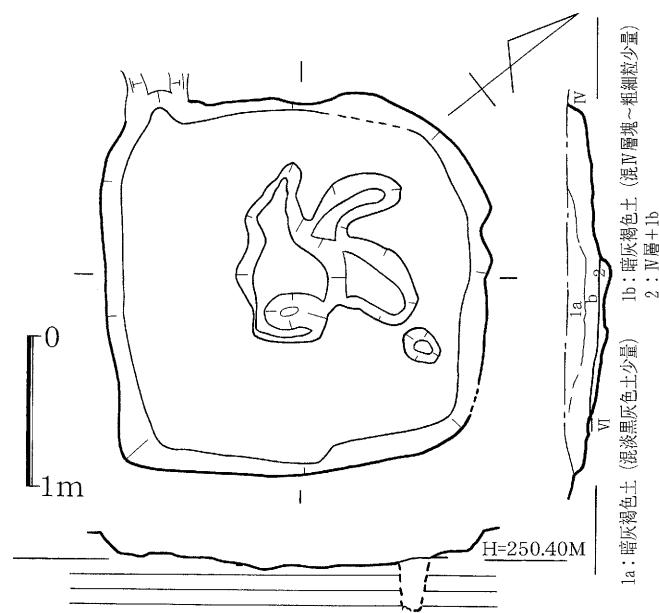
炉には、上半分を打ち欠いた甕 (1692) が使用されている。5世紀代か。



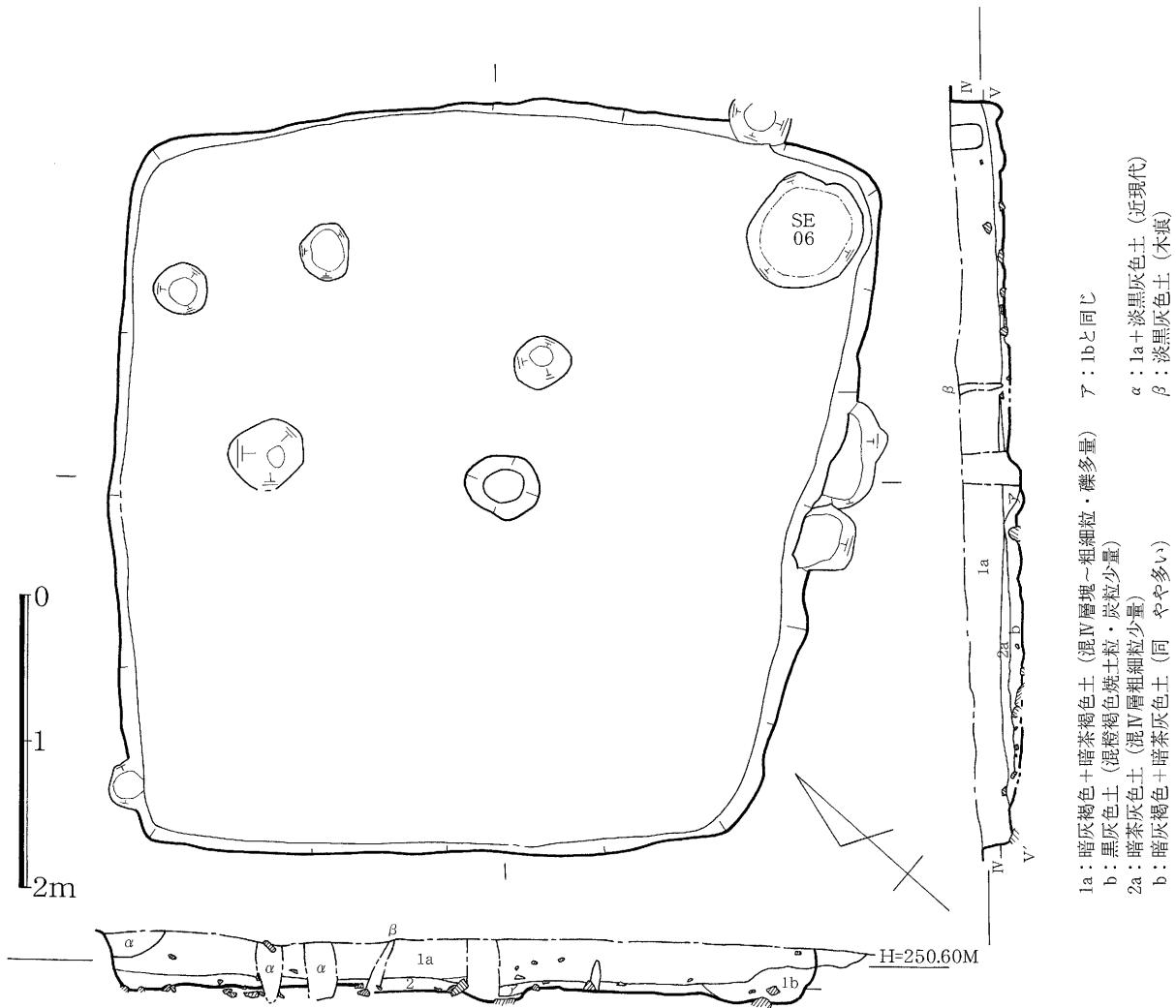
第187図 S A-74 遺構実測図

S A-74 (第187図)

長さ5.9～6.40・幅5.60mの隅円長方形を呈する。覆土は12～20cm遺存し、土層的には5～10cm程の削失が推定される。貼り床は僅かであるが、東壁沿いに幅1m・高さ6～20cmのベッド状遺構が構築されている。主柱穴は短軸方向に4本あり、直径31～43cm・深さ52～63cmを測る。主柱穴の中央には、口縁部を打ち欠いた甌(1705)を使用した土器埋設炉がある。南辺中央には壁面を抉り外方へ25cm突出する特殊な土坑があり、その両脇には出入口の支柱を建てた穴の可能性がある不整形な掘り込



第187図 S A-74 遺構実測図



第189図 S A-76 遺構実測図

みがある。

覆土から、土師器片1570点のほか、須恵器片36点、土器片加工円盤、被熱した台石各1点が、2層から土師器片20が出土している。

中には、須恵器の甕片を両面調整で整形し、刃部を形成・使用したとみられるもの（1735）がある。丹塗り土師器には、須恵器模倣壺蓋（1715）・壺身（1716）もあり、豊富な器種がある。高壺（1721）の内面付着物の螢光X線分析では錫が41%含まれていた（付篇）。1699と1703・1710・1713・1739は被熱している。6世紀後半である。

S A-75（第188図）

74号住居の北1.6mに位置した、縦横2.5mの、半円半方形の住居である。覆土は12~20cmが遺存し、土層的には20cm程の削失が推定される。主柱穴や壁溝は無いが、中央部の不整形な凹みが貼り床を施されていることから住居であると断定される。

覆土から土師器の小片が50点出土したが、図化できたのは壺の底部1点（1742）のみである。5世紀中葉か。

S A-76（第189図）

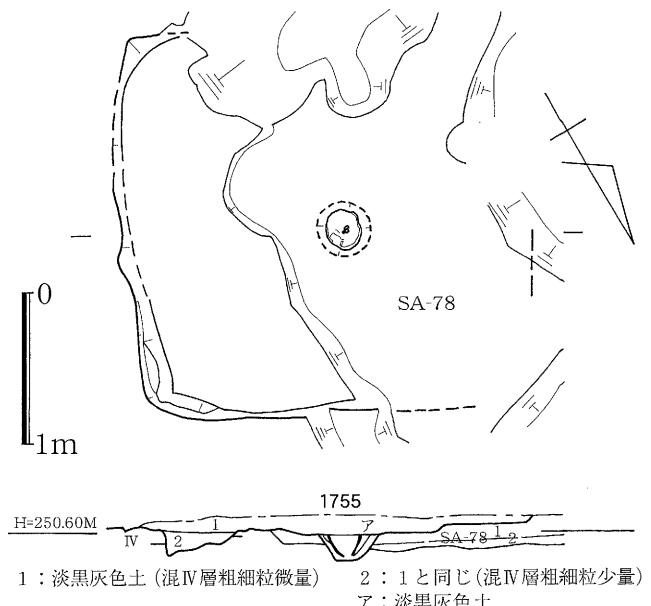
75号住居と40cm離れた位置にある、長さ4.8~5.1m・幅4.1~5.0mの、台形状の西南辺が短いプランである。覆土は25~30cm遺存し、土層的には10~20cmの削失が推定される。主柱穴は無いが、中央に長径52cm・短径40cm・深さ12cmの掘り込み炉がある。貼り床は6~12cmの厚さで全面に施される。壁溝は平面図には描かれていないが、ほぼ全周していた。

覆土から土師器片515点のほか、須恵器片2点、ガラス小玉・すり石・台石が各1点、貼り床内から土師器片70点が出土しているが、図化できたのは僅かである。主として4世紀前半頃で、須恵器は混入と思われる。

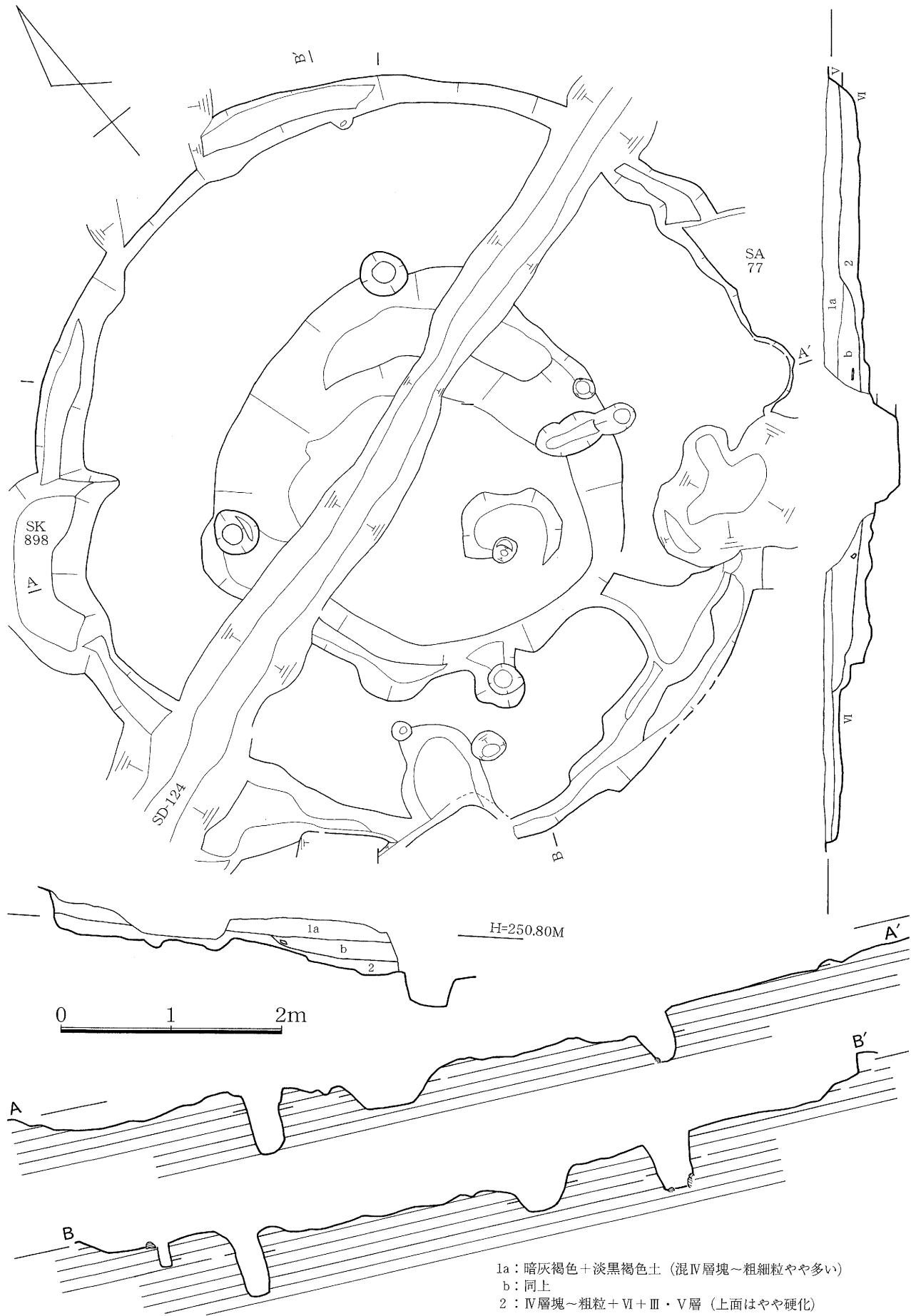
S A-77（第190図）

XIII区の北端部、78号住居を切る、2.6m四方と推定される方形住居である。覆土は5~13cm遺存し、30cm程の削失が推定される。西側底面には、幅56cmの段（高さ4cm）がある。中央には、口縁部を打ち欠いた甕（1755）を使用した土器埋設炉がある。主柱穴は無く、南辺部は、風倒木痕まで掘り込んでしまったために遺構が消失した。

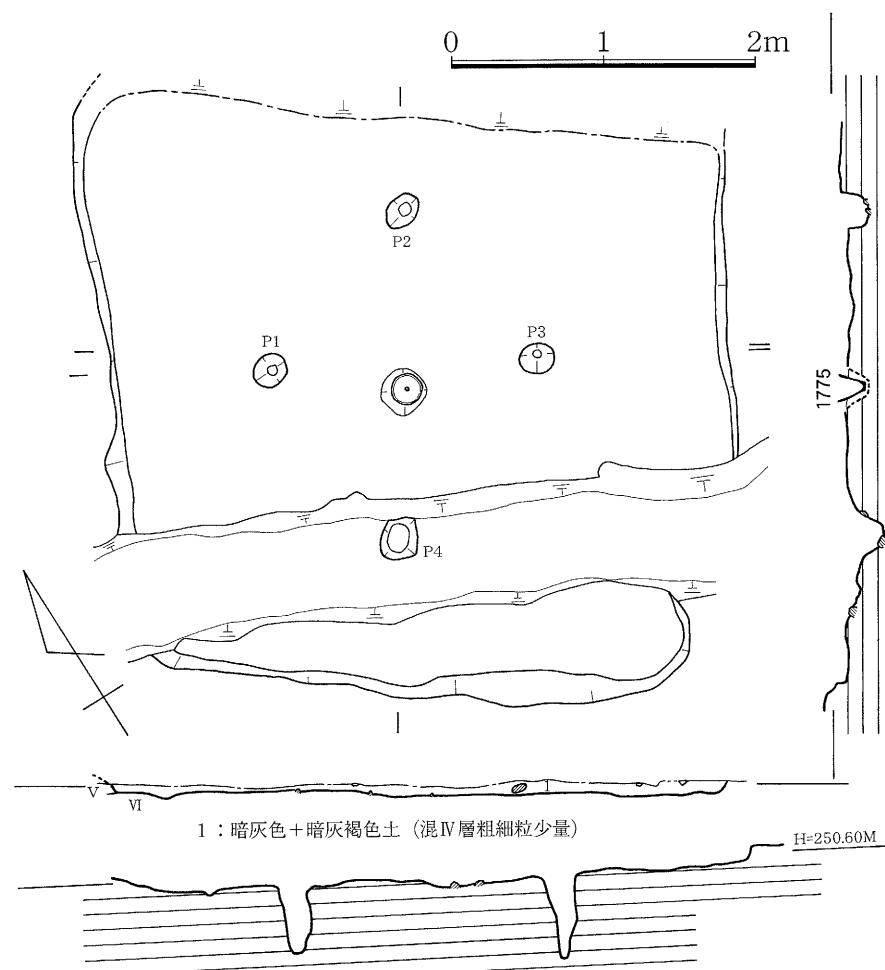
覆土から、潰れた甕（1756）のほか土師器片132点と須恵器の壺身1点（1761）が出土しているが、図化できたのは僅かである。6世紀後半である。



第190図 S A-77 遺構実測図



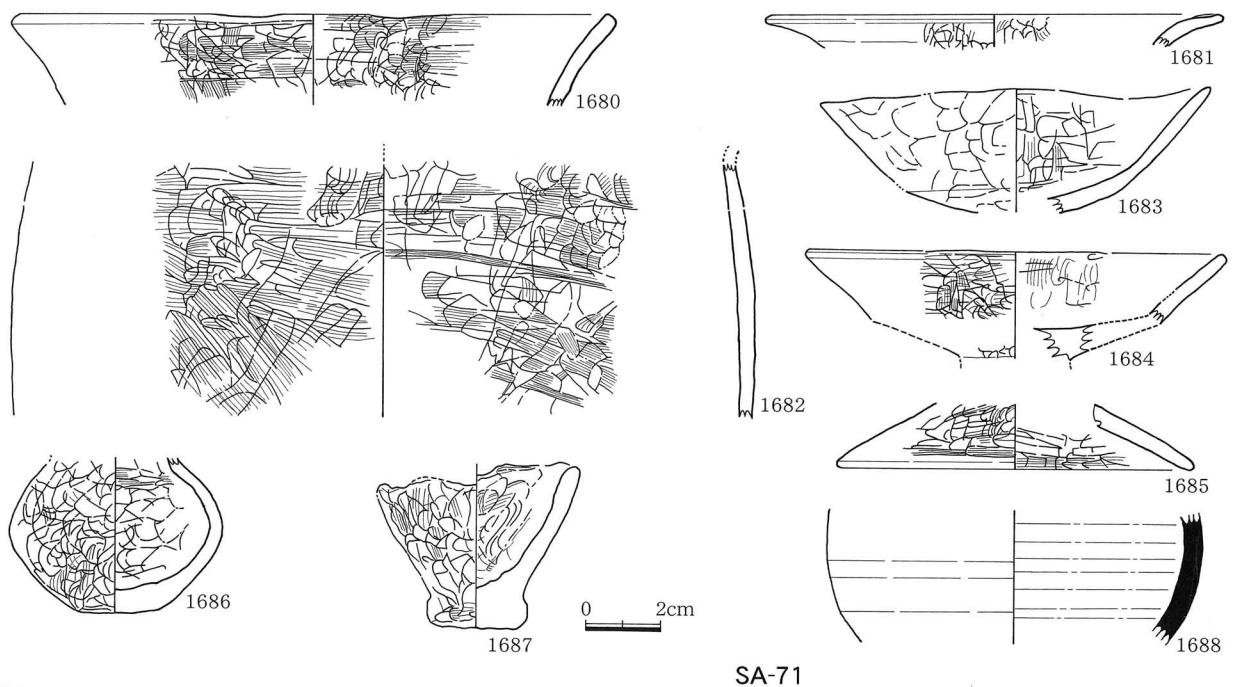
第191図 SA-78 遺構実測図



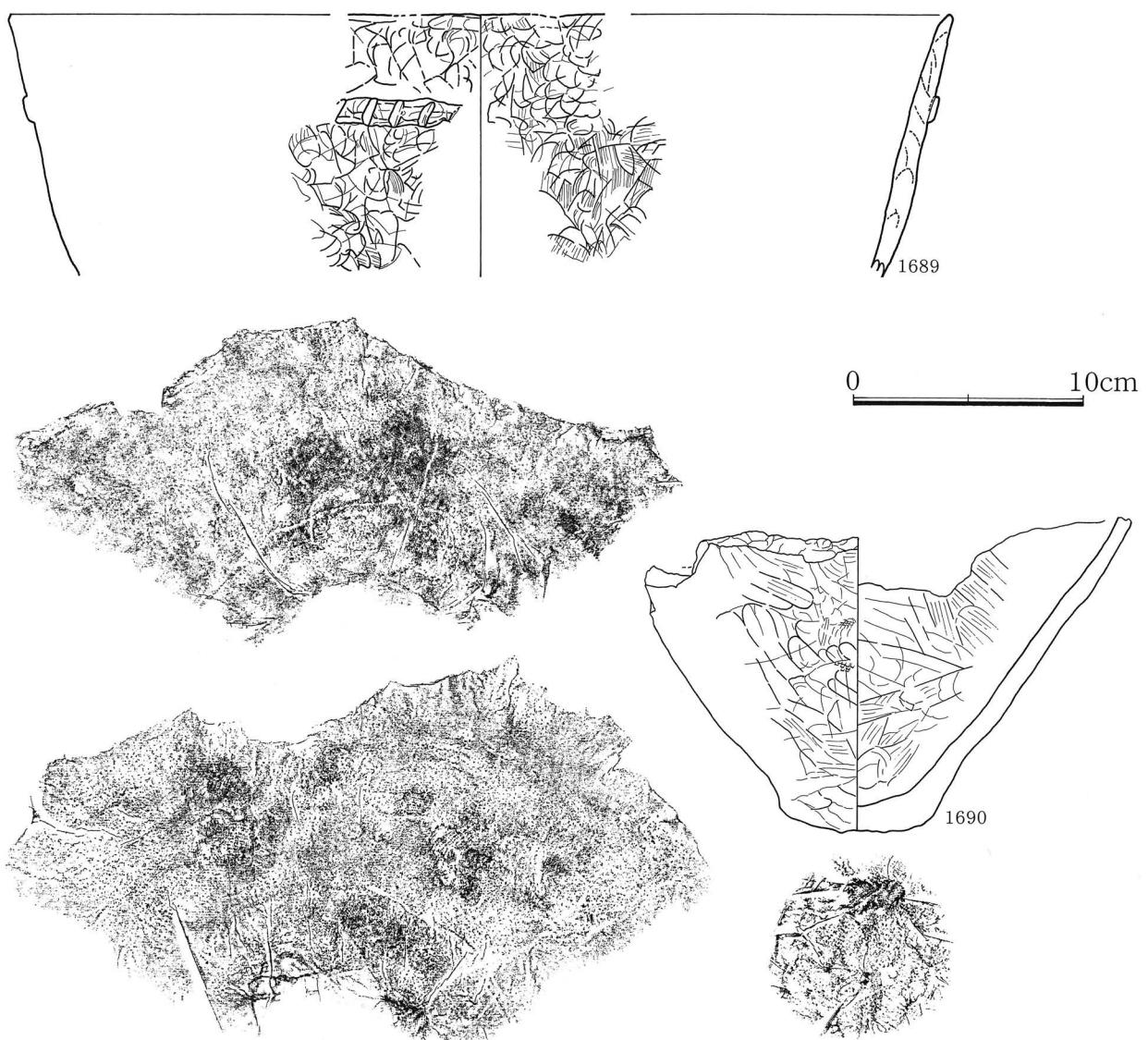
第192図 SA-79 遺構実測図



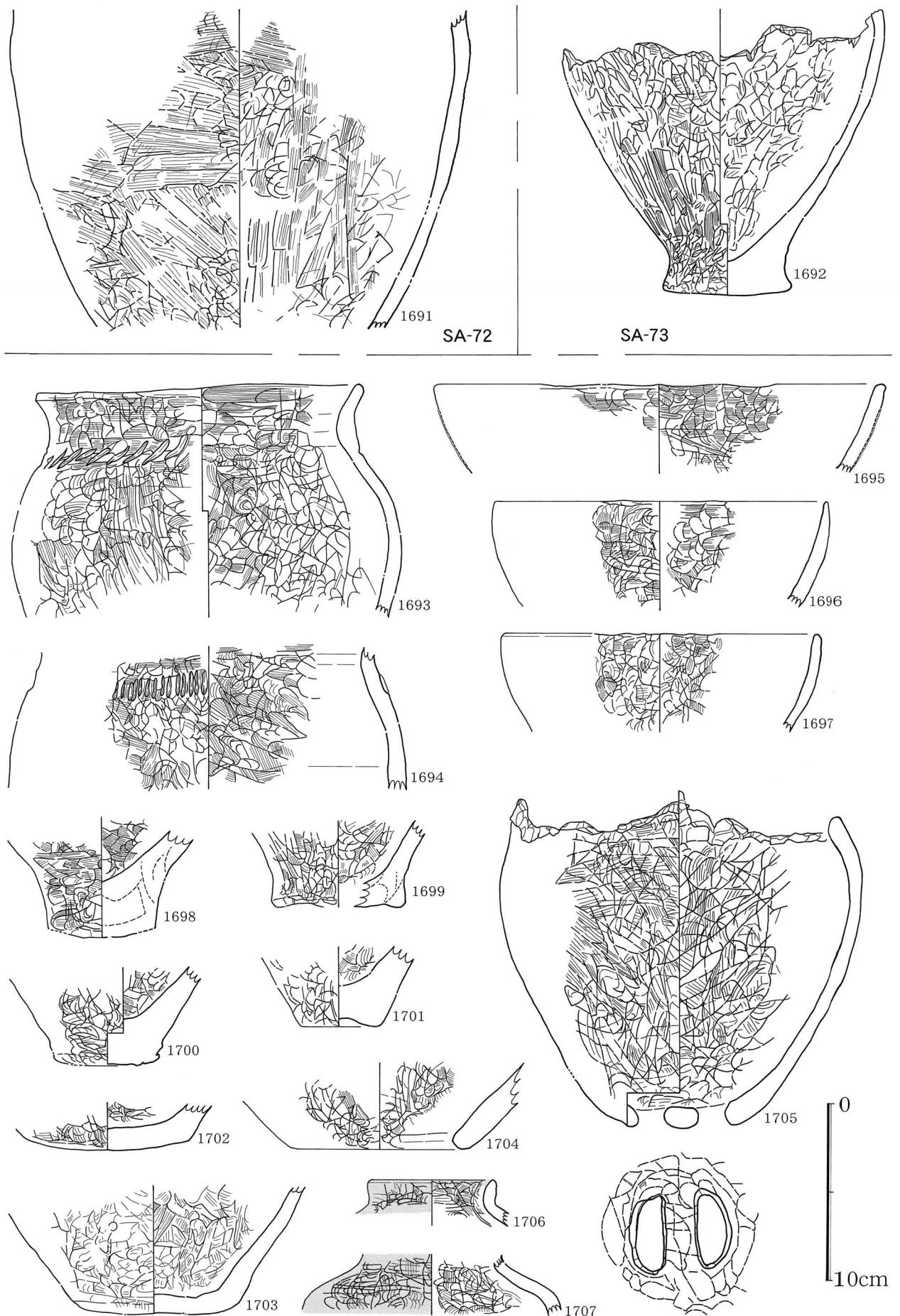
第193図 SA-80 遺構実測図



SA-71



第194図 SA-71・72 出土遺物実測図(1)



第195図 SA-72 出土遺物実測図(2), SA-73・74 出土遺物実測図(1)